

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



フレンズ逆レイプ合同誌

～アニマルガールによる性的暴行被害記録集～



目次

表紙、裏表紙……………しこりば

【陸】

P5 …………… 間間山
P13 …………… いにつっきー
P17 …………… イラン伊蘭
P23 …………… ウィナーズサークル
P25 …………… おきあみ
P33 …………… カイチョー
P39 …………… 座織きたか
P47 …………… しおバター
P51 …………… しこりば
P59 …………… ちょいや君
P63 …………… ドリキャスン
P69 …………… 那魅ちあ希
P75 …………… にのじ
P81 …………… ビタミンみー
P87 …………… ま王
P95 …………… ミリ
P101 …………… 村山東一

【鳥】

P109 …………… エクィテス
P117………… はづきガレット
P125 …………… れいひ

【海】

P127 …………… いの
P129 …………… 絶対絶命
P135 …………… てらねこす

【UMA】

P139 …………… 朝倉銀
P143 …………… おきやお
P149 …………… せんすいかきゅう
P157 …………… チェルノ・をかし
P165 …………… 那魅ちあ希

【Extinct】

P166 …………… Nokemono-san
P173 …………… おささみ
P177 …………… コカ茶
P183 …………… トトキチ
P185 …………… マメゾウ
P193 …………… モリマサカズ

【小説】

P202 …………… エロニアート
P208 …… ジャパリトロッコの人
P216 …………… スカーレッドG
P225 …………… せがれきんぐ
P230 …………… たなか
P236 …………… タマリリス
P246 …………… たると
P255 …………… WAROSU

P260 …………… あとがき

ここはジャパリパーク

フレレンズが無害であることが
知れ渡っており、まだヒトが
容易に訪れることが出来た
時代である

ナイツオブジャパリパーク

作：間間山



フレレンズには会えなかったし
何事もなく終わったな……
帰りの最終フェリーは
17時だったっけ……

連休を使って一人で
ジャパリパークに来てみたけど……

時刻表

便	アンイン港発	(三崎着)
1	07:30	08:40
2	08:30	09:40
3	09:30	10:40
4	10:30	11:40
5	11:30	12:40
6	12:30	13:40
7	13:30	14:40
8	14:30	15:40
9	15:30	16:40
10	16:30	17:40

あっ



しまった……
一時間間違えてた



……ってことはここで
一晩過ごすのか……

しかしサンドスターが発見されて
わずかししか経過していないこの時代

フレレンズについての研究は
初期段階であり、未発見の事象が
多いため彼は知らなかった……

フレレンズは特定の周期で
発情期に入り……

彼は偶然にもその時期にパークへ
訪れてしまったのである……

アオー



ハニ♡

♡♡♡♡♡

ハニ♡

とりあえず
散歩するか…

ガザン

うみやう
男の子はっけうん

それ以前に様子が
おかしくないか…？
人間には害は無いと聞いたが…

あれは…
フレンズなのか…？



うわっ

どん

ふふ…
つつかまえてた

一緒に
あそぼ

いただきます♡

♡♡♡



!?

だらうー



あんっ…
良い感じ…

ぶぢゅ
ぶぢゅ

何だこれは…
夢でも見てるのか…

いん!
いん!

ハア…もつと
舐めてえ…

ふふ…
オスの味だあ…

ねちよ

じゅ
じゅ

じゅ
じゅ

そろそろ
イってみようかな

じゅ
じゅ

じゅ
じゅ

くば
ね

あは…
奥まで入ったあ…

最高…
♡

あっ

オスの匂いがすると
思ったら、なんだか
楽しそうだねえ

抜け駆けしてズルいのだ!
アライさんもエッチしたいのだ!

ズ
ズ

あわわ





ズフフ

ぎゅむ

いーなー、次は私も
やりたーい!



.....

へ3♡

へ3♡

なんだか
癖になる味だね、
おもしろーい!



なんだか暑く
なってきた...

ぬぎっ

ごめんね...こうして
いないとおかしく
なっちゃいそうだから...



どしっ

おやおやあ? 妹ばっかり
注目しとるやないか、
ウチを忘れたらあかんでえ



あ♡

あ♡

アカン...こんな快感
生まれて初めてや...
やめられへん...!!

バン

バン



わく♡

ハア♡

あっ……!

ばちゅ

自分で腰を振ってる

ばちゅ

わく♡

エトピリカちゃんぽっかり
ずるいです! 早くパフィン
ちゃんにもそのお菓子をくださーい!

もっと……
下……

ハア♡



もう……しようが
ないわね……

オスの匂いをもっと
嗅いでいたいのに……

クン♡

クン♡

ぶちゅらららら



ギンギツネ……僕もう
もうお腹いっぱいだよ

あ♡

あ♡

ぎんぎつね

たん

たん



なんだ……まだ
こんなに出るん
じゃないか……
身体は正直だな

私達はあと10回以上は
いけるぞ……!!

なんだ……情けない
声を出して……

ど
び
ゆびゅ



なあ…早く
替わってくれよな

メチャクチャに
してあげたい…

はあ…乳首を
吸われるのって
凄く気持ちいいな…

全く…アイドルに
こんな事をさせるなんて…
責任取ってもらうわよ…



PPPに囲まれて気持ち良い
思いをするなんて万死に値するわね。
お仕置が必要だわ…

おーよしよし
疲れたねー

大好きなおっぱい
でちゅよー

こうして彼には多くの
奇襲が続いた…

もふ♡
もふ♡



一体いつまで
続くんだ…

そろそろ勘弁
してくれ…

何言ってるの？



ジャパリパークにはまだたくさん
フレンズが居るんだよ？

これからもずっと一緒だよ
お兄ちゃん♡



…う

うわああああああああ
ああああああああ

この後、彼の行方を
知るものはいないという

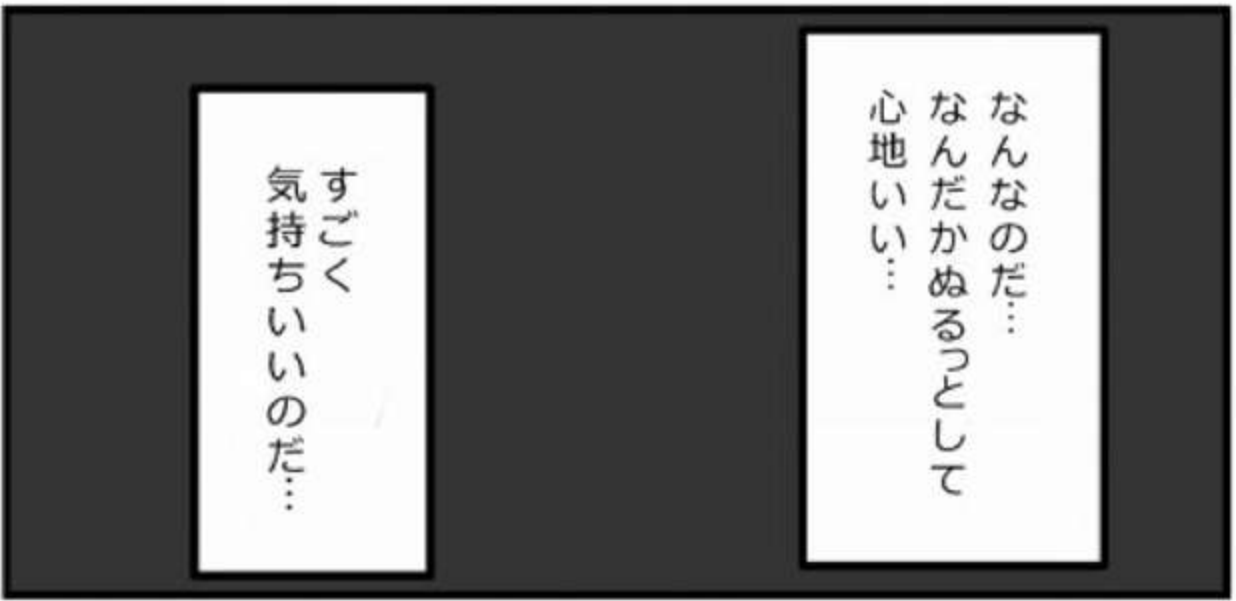
皆さんはくれぐれも
パークを訪れる際は
気を付けよう！

完



あんな
のだ...？

はっ



なんなのだ...
なんだかぬるつとして
心地いい...

すごく
気持ちいいのだ...



...うて

えええええ!?

フエネック
何してるのだ!?

ちゅ...
ちゅ...
ちゅ...

あ、
あらいふあん



気持ち
いいのだ

フエネックの下が
ねっとししていて



しかもこの
お股の棒は
なんなのだ!?

んふふふ

なんだかいろいろニオイが
すると思ったら、

こんなものが
生えていたんだね



だったら
アライさんので

う
あ

汚してくれない
かなあ。ふふ

あ
あ



だだめなのだ
フエネック、汚いのだ

そんなこと
ないよー

あ

ぽ

ぽ

あ



それにもアライさん
してるでしょ

そうだけど、
だめなのだ、
汚してしまうのだ



う
あ

ぽ
ぽ
ぽ



きつとすじく
気持ちいいよ♡

ズズ...



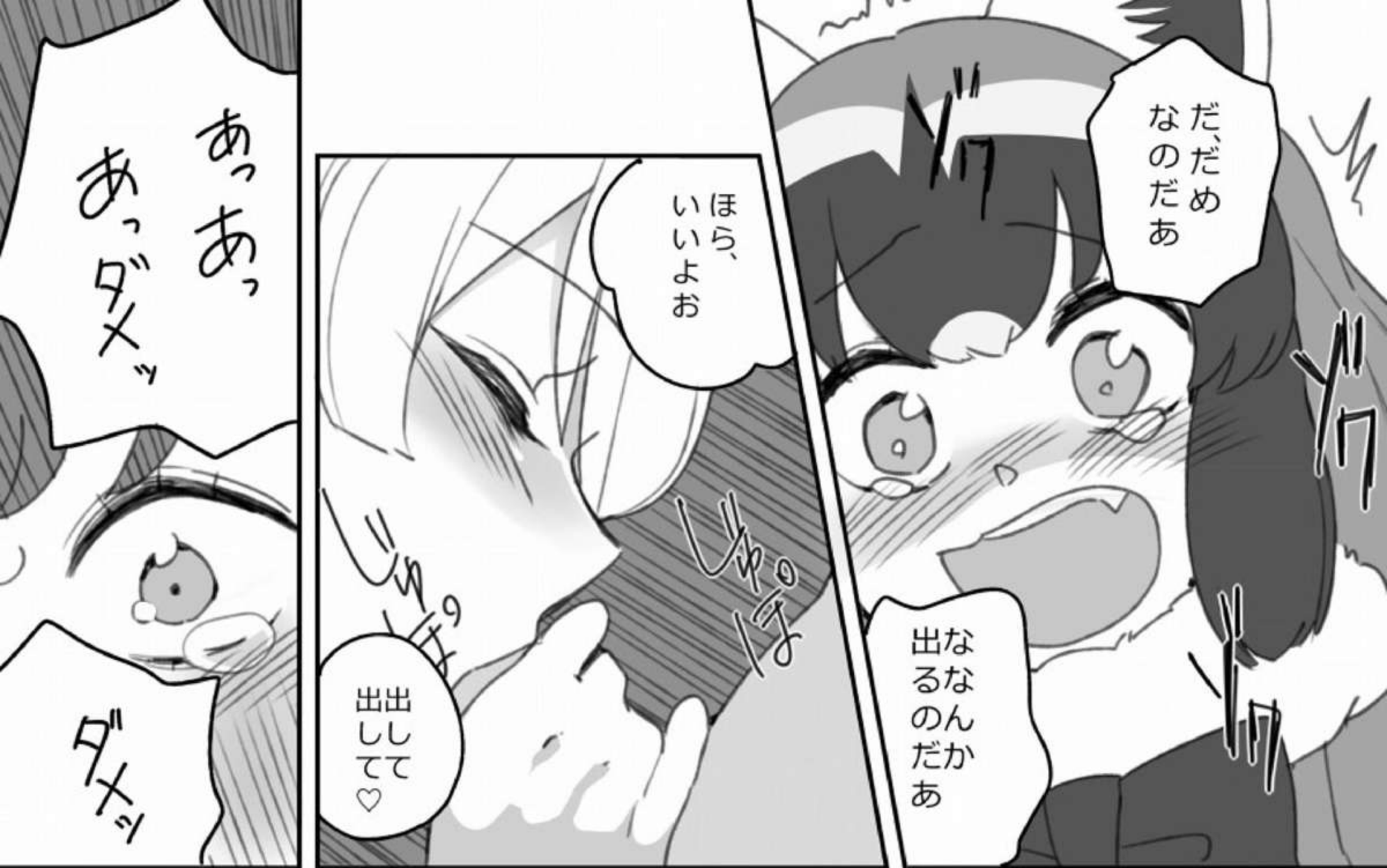
そんなのだ!!

ぽ

あ



そんなこと
ないよお



ぽん
ぽん

だだだめ
なのだあ

出るんだかあ

あああ

ああああ♡

わ

ぽん
ぽん

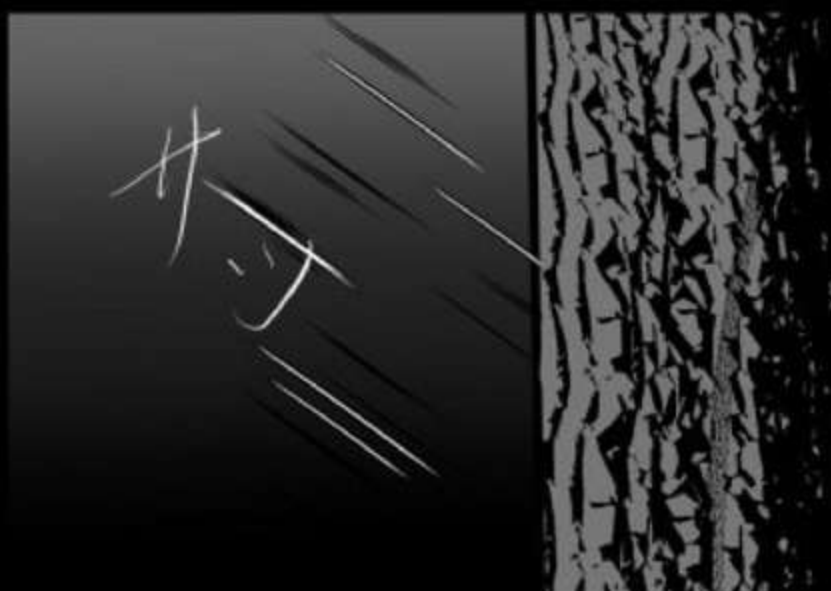


おわり



肉食系草食女子

by イラン伊蘭





ごめんなさい

ゆるしてください…

逃げたって無駄よ？
私達のほうが足速いから



お姉さんたちの水浴びを
覗く悪い子はお仕置きが
必要ねえ…

※カバの足の速さは時速40キロ以上

シヨタ
ち○ぼ…
いいわあ♥

男の子なんだから
もう少し頑張って♥

舌できれいに
しましようにね♥





もう許して…

ぼく…限界…
もう…射精ない…

ぴんぴん
ぴんぴん
ぴんぴん
ぴん



そんなこと言っても
まだ出るじゃないの♡
もう一回イけるでしょ？

男の子なんだから
弱音はいちやダメ♡

と
びんぞろぞろ

おわり？



やあ、タイリクオオカミだ

私の身の上と聞かばい

ある日、
彼と
「ツガイ」に
なったんだ

WIFE

MARRIED!

HUSBAND

?

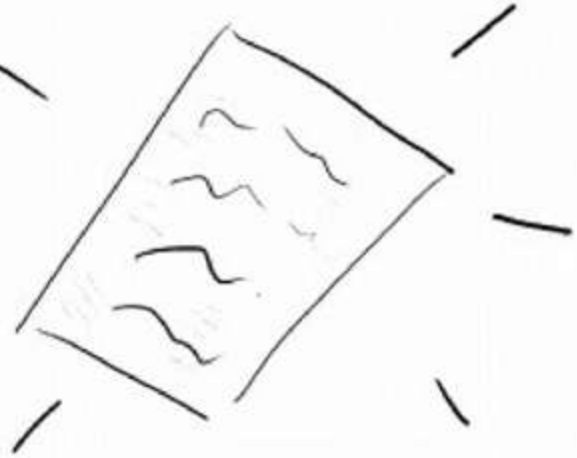
でも、私に全く手を出さないんだ



「君が大切だから」ってね

彼がこんなのを落としていった

「メモ」ってやつだ



でも、さっぱりだ。
フレンズの名前と数字…
そして、知らない言葉。
私の名前の横には、108と…



どうしても気になった私は
博士に聞いてみたんだ



「けもシ」って
何だい、ってね。

早い話、
答えはこうだった



私は今も
「おあすつ」って
「あすつ」って
「あすつ」って

そんなことをされたら、
黙っていられないじゃないか



あれだけ「おあずけ」されたんだ。
辛抱たまらなくなった私は、彼を襲ったんだ。

ゴムをするか？
いやだなあ、ナマに決まっているじゃないか

これが、キミが何回も
想像してたナカだよ！
私だって本当は
群れを作りたくて……！

お

そうしたらね、
彼がこう言うんだ……

実はね、この前
病気をもらっちゃって……

モロイヤンなのだったっ……

お
ごんは
ちちゃんと
つけよう

Fin.



.....
!?

れでいーすあんど
じえんとるめーんど!!



皆様大変お待たせ
いたしました!



ワァァァァァ!

本日のメインコーナー!!
「けものパレード」です!!

体の自由が
奪われてはいる……
一体これは……!?

思い出せっ!!
何があった!?

確か最後の
記憶は……

でフレンドズの餌を運ん
でいて……その後には?

さて、では早速最初
の挑戦者に入場
して頂きましょう!

準備はいい?

ちよ、ちよっと
待ってくれ!

まずいっ!

相手はヒト型とは
言え、所詮は獣だ……!

何をしでかすか
わからん……!

ここはどこなんだ!?
一体何をするつもりだ!?

よくわかんないや!

というわけで
挑戦者かもーん!

ザッ



やーやー
どもども

いやー災難だねー

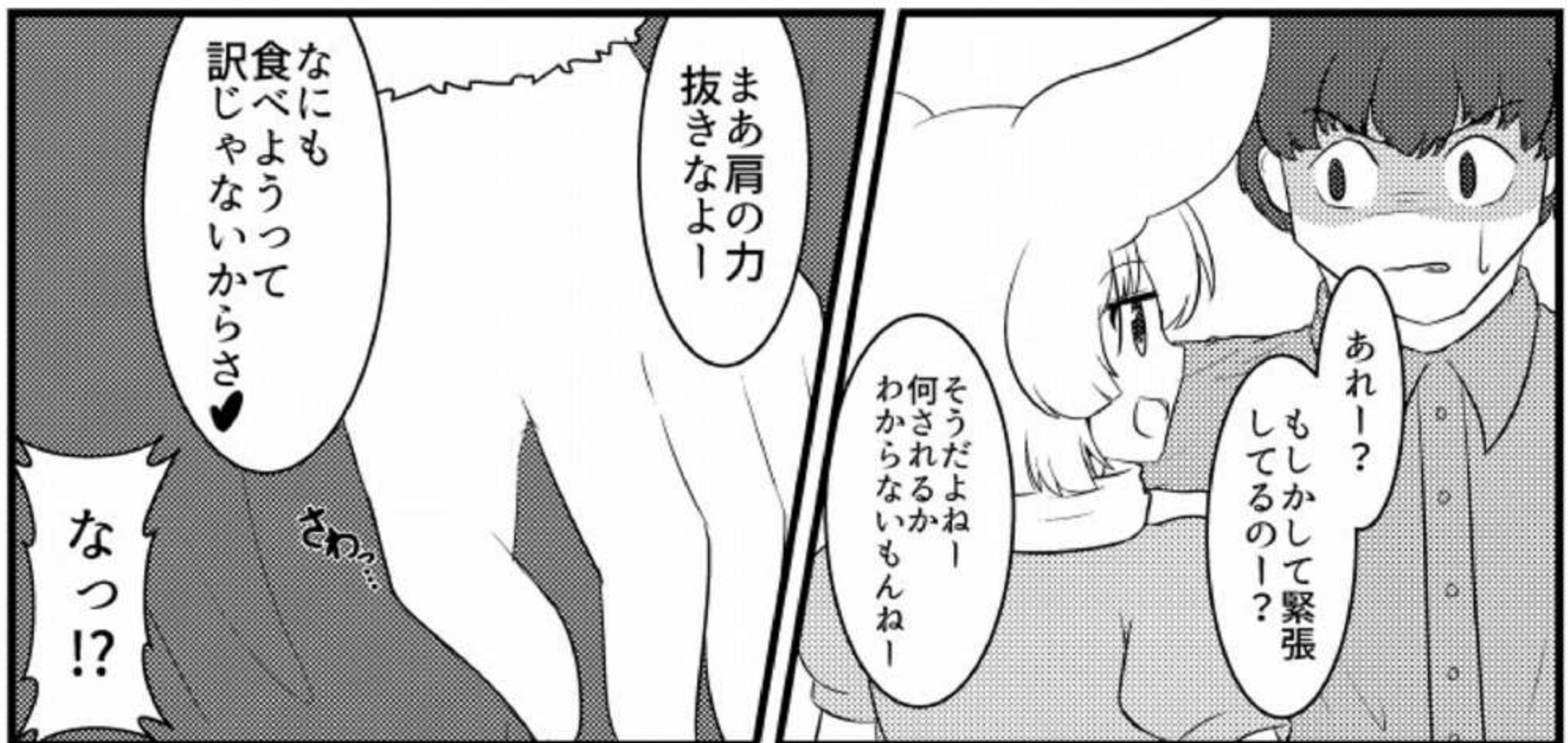
目が覚めたら突然
こんな状況だもんねー

ああ、でも
本気でいくよー？

アライさんも
応援してるしねー

こいつは確か……
フェネットクだったか……？

がんばるのだー!!



まあ肩の力
抜きなよー

なにも
食べようって
訳じゃないからさ♡

なっ!?

あれー？
もしかして緊張
してるのー？

そうだよねー
何されるか
わからないもんねー





じゃ、早速始め
ましようか



んじゃ、次よろしくねー

わかったわー

えっ……?



じゃ、負けは負けだからねー

くそっ……! ヒトの姿
とはいえ、獣なんかには……
一体なんで……!



でも、私もやるからには
本気でやるわよー?

ふふっ、一回出したから
次はキビしいかしら?

えっ!?
なっ!?

ちよっ、まっ……!



あら?もしかして
次もダメそう
かしら?

ふうっ……!
そっ、そんなに早く……!

ふふっ、出しても
いいのよ?

くっ、まだっ……!
ああっ!



うっ、いつ、一体は
お前たちの目的は
なんなんだっ!

人間にこんなこととして
許されると思っ……!

うーん……
そうねー……
じゃあ私に勝ったら
教えてあげるわよ?



でっ、でるっ！

あら、こんなに……

あなた、結構
旺盛なのね？



でも出しちゃったわねー

残念ながら何も
教えてあげられるわけには
いかないわ

一体……なんで……

……ダメだ……
……頭が……
……鈍……
……つ……

あら？
もしかして
疲れちゃった？

なっ……!!

は……？

こんなところで
へばってちゃ、
この先危ないわよ？





貴方は
"おまかせ"
が好きですか？

あ、起きたのだ♡

なかなか起きないから
心配したぞ♡

えっ？
何してなの？…んん？

そんなの…

描いた人：カイチョー

アライさんと仲良くなったと思ったら
押し倒されてオマカセされちゃうお話



逆レイプ
口内性交♡

に決まってるのだ♡
XXは何も
しなくていいから...

アラカイさんに
オマカセなのだ♡

ちゅっ♡











いっぱい射精たのだ……♡

気持ちよかったのだー？

んべん

どろろ



え？
何言ってるのさっ

1回で終わる
わけ無いのだ！

もっともっと
射精かせて
あげるのだ！

聞かせなれてシないのだー

おほ！！ *おほ！！* *おほ！！*



ライオンさん、
ライオンさーん？

掃除の時間です……

よっ？

あれ
いない……



おすっけ
雄気

描いた人…座織きたか
(ざしき きたか)

いつもあそこで寝てるのに……
それに返事もない……

ヘラジカさんと……？

でもあれは無闇やたらと
するなってパークガイドに
言われてるはずだし……



え、どうしたんですか
どこか調子でも

じゃぱりまん
でしたら後で僕が



ライオンさ…
ちよ、近

遊び道具ですか!?
それなら、て、え、あ



じい…

ラッ、
らライオンさん!?

…なんで
急にのしかかって











ちゅらちゅら
もう、ダメ



ほら
いけ

ほら

はやく

いけ

いけ

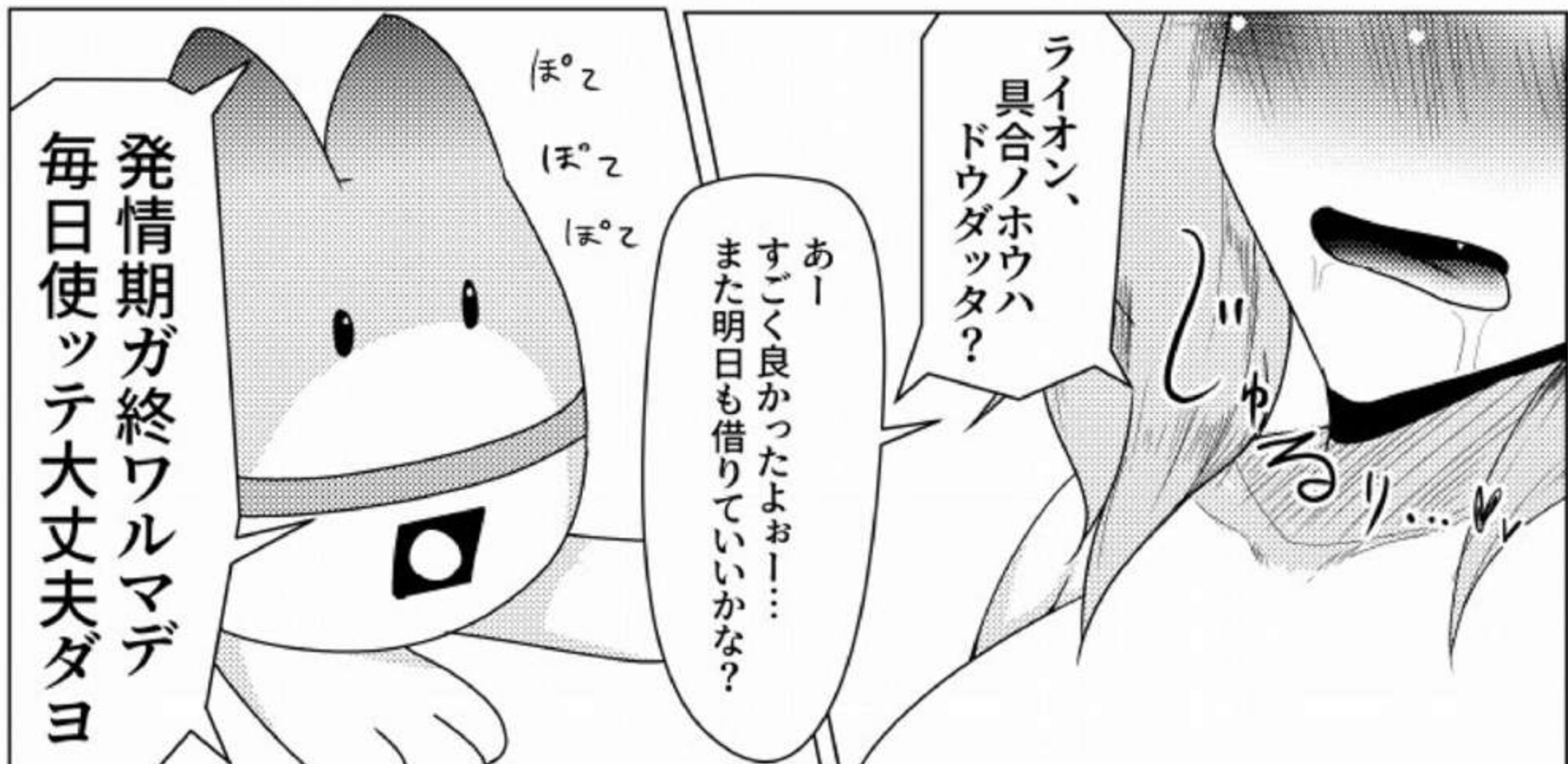


はー

はー

は

へえ?



おおり。



わたしたちに
ヒトの交尾のやり方

教えてくれるんじゃない
なかったのかな？

これを舐めれば
いいのかな？

アニマルガール
発情期対策としての
性教育 課程
実施スケジュール



おちんちん
もつとよく
見せてよ

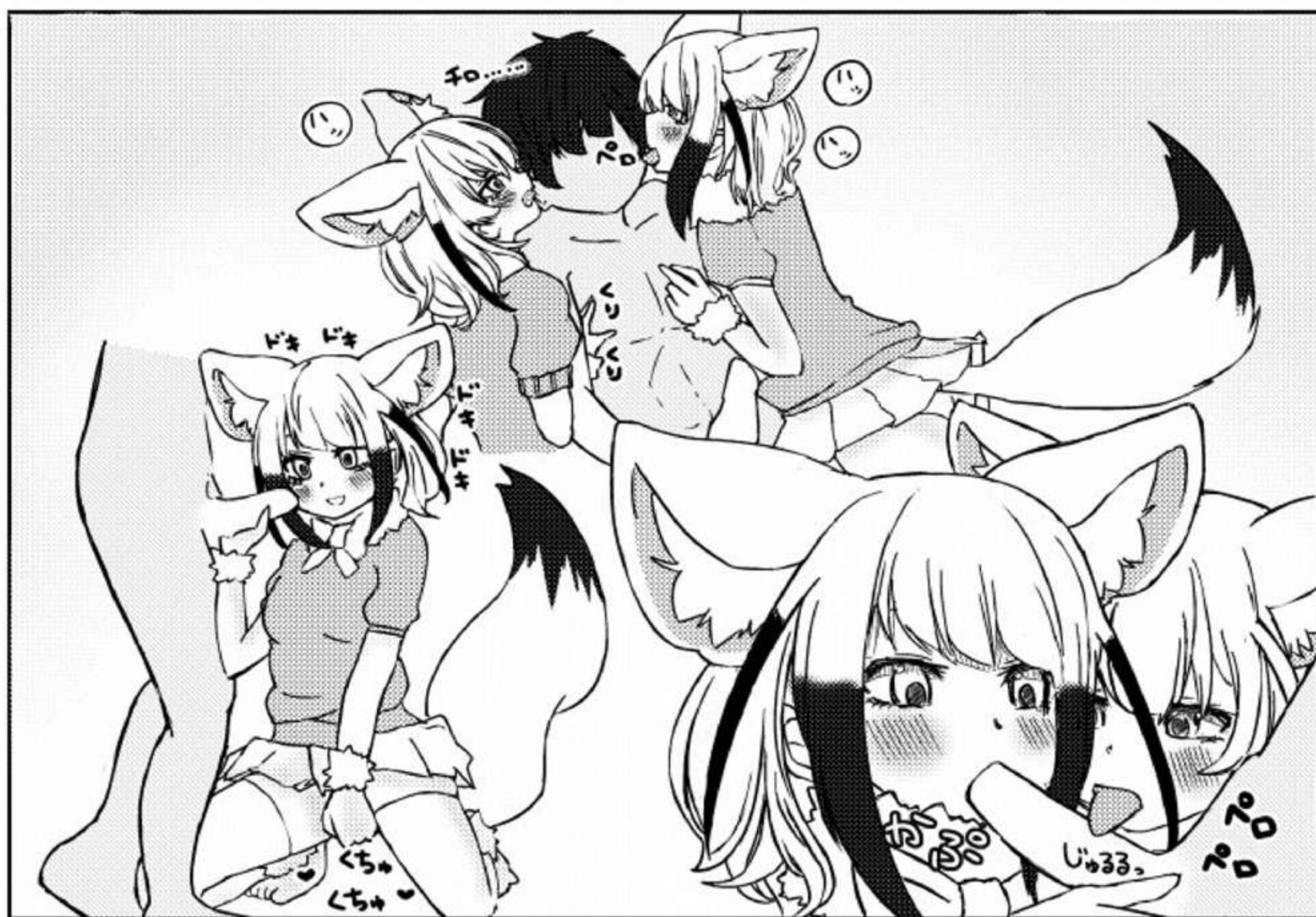
いいでしょ？

オスの子なのに
乳首が
気持ちいいんだ

ふん

いつもそんな風に
ゴジゴジ
してるの？







もうガマン
できないから



わたしたちも



まだまだ
終わりじゃ
ないよね？



わたしたち
フエネツクの
交尾は
長いよ？

いっぴい
気持ちよく
させてね

おー
飼育員さん♡

おしまい

いらっしやうい♪
ここはおちんちん
試験解放区よ♡

わあ!?
カ、カラカル!?

ここに来たら
おちんちんを見せないと
駄目なのよ♡

おちんちん
試験解放区へ
ようこそ!
しこりぱ

ずるっ

お礼に私の
おっぱいも
見せてあげる♪

ぬきっ

じっとしてなさい:
そのかわいいおちんちん
食べてあげるわね♡

ちゅっ♡

って、あらあら、
おっぱい見た瞬間
元気になっちゃったわね…♡

私の得意技で…♡

ぼるん♡

びく! } } }
びくん!



もぐもぐ〜♡

あっ♡
ぬるぽんぽん♡
ぽんぽん♡



ふふふ
食べちゃおう♡

ちゃ♡



キーン♡

キーン♡

キーン♡

おっぱいの奥で
むきむきしちゃったわね…♡
むきたて敏感おちんちんで
ぐりぐりして♡

そうそういら感じよ♡

ぬるぽん♡
ぽんぽん♡



あっ♡

むき
ぽん
ぽん♡



おめでとう♡

おめでとう♡



あっ♡
ああ…♡

あっ!!
おしっこ?!

あはあっ♡
乳首ではじめての
おちんちんミルク
びゅーって
しちゃったわね♡

でちゅ…っ!!

離して
でちゅ…





駄目え〜♡

あんっ♡
いい硬さね♡

ズンズン
ズンズンズン
ギンツ
ギンツ



……合格よ♡

ぽん♡

ふり♡

ズンズン

ズン♡

あぁ!!



気持ちいい？

私は気持ちいいわよ!

ハア♡



早く射精して♡

ゴクゴクしてあげるから…♡

…もう射精そう？

射精そうなの？

射精しなさい!!



何か言いなさいよ!!

じゃ…





私と合体技の練習よ!

レッツ、ジャステイス♡



それじゃあ…♡



腰を振るの!
うまく出来るまで
やめないわよ♡

ワンツ〜♪
ワンツ〜♪
←くりかえし

ほらっ!
私の動きに合わせて…



もうやめて…
離して…!!

そう…
わかったわ♡

えっ!!

うわあ!!



ほおーらっ♡
バザッ

ほら♡
バザッ

ちやんとつかまってないと
落ちて死んじゃうわよ♡
バザッ

アッ
はっ離さないで
カバッ

はい♪
Welcome home♡
(おかえりなさい♡)

ぬるー♡

ゆざ
お、落ちるの...♡

ゆざ
お、落ちるの...♡
ゆざ
お、落ちるの...♡
ゆざ
お、落ちるの...♡

出るう
出ちまう♡

スツキリン♡



逆し合同は
まだまだ続くぞっ!

目が覚めると
暗闇だった

狩りの練習。
by ちैया君





しまししょう

練習を



狩りの



お誕生日
おめでとうりカオン

私が大人の狩りを
教えてあげます

はっ



はっ



何言ってるんですか
キンシコウさ……

うん……
リカオンの成人なりたて
チンポおいひっ

リカオンの臭っさいオス
チンカス味わったら
ガマンできなくなっちゃいました♡

ちょっと早い
ですけどここからが
狩りの本番ですよ♡

リカオンの

初おチンポ
いただきます♪

目の前
まっくらで

おマンコの
事しかわかんないよっ



ふえの
おふひもっ

おはして
あげますっ
あげまふっ

おチンポ
あつくてビクビク
してる…

見込み通り狩りの才能が
ありそうですね♡



アンミン♡

あーん
あーん
あーん

あーん
あーん
あーん

キンシコウさん
ぼくもうっ…

膣内にいっぱい
だしてくださいっ♡♡♡



キンシコウさん
怖かったですよお

ごめん
ごめん
ちやんと誕生日
プレゼントも
ありますから

おじぎん

エロイヌ

作・画 ドリキヤスン





ああ！あつっ
あいのがあい
中熱にいい！

赤ちやんの元、
気持ちいいよお

ハア：
ハア：

イヌ科は3回
はやるのに、

ヒトは、

一回で終わりたい
なんて物足りない
わ

えっ

ド
ド
ド

あと2回だけ
やらせてえー！

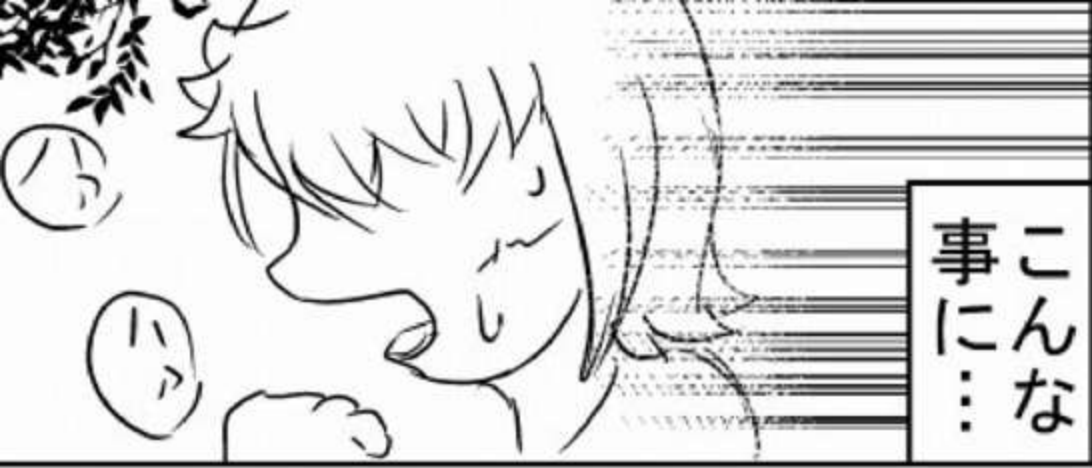
うわああん！一回
だけ、お姉ちゃん
の嘘つきいー！

二十分後、彼は無事に
センターに帰れたが、
イヌ科の異変に気がづ
かされたのは3か月後
の身体検査での事だっ
た

フレンズ逆レイプ合同誌

～アニマルガールによる性的暴行被害記録集～

知らないフレンズにはついていかないようにしましょう。



ホルスタインちゃん
ミルクしぼり体験！ 那魅ちあ希

ホルスタイン
お姉ちゃん…
近っ!!
草っぽい香り…
じやなくて



おねがい…?



…♡

ホルスタインお姉ちゃん…
どうしてボクを
追いかけてきたの?

おんろボクに
おねがいが
あるんですよ



しん

たぶん

うわあっ!?



なっ何してるの!?

ボクのママより
大きい
でしょ?

うん…
っさうじやなくて

はる



すごい：
自分で自分の
おっぱい飲んでるんだ…

おっぱいが大きいから
あんなにたくさん
ミルクを出せるのかな？

あつ顔に
お姉ちゃんの
あつたかい…
ミルクが…



お姉ちゃんの舌が…?!
熱い…!!

あつ、甘い…
ミルクを回移しで
飲まされてるんだ…



私

フレレンズになって
初めて知ったんです

ヒトが私のミルクを
おいしく飲んでる事

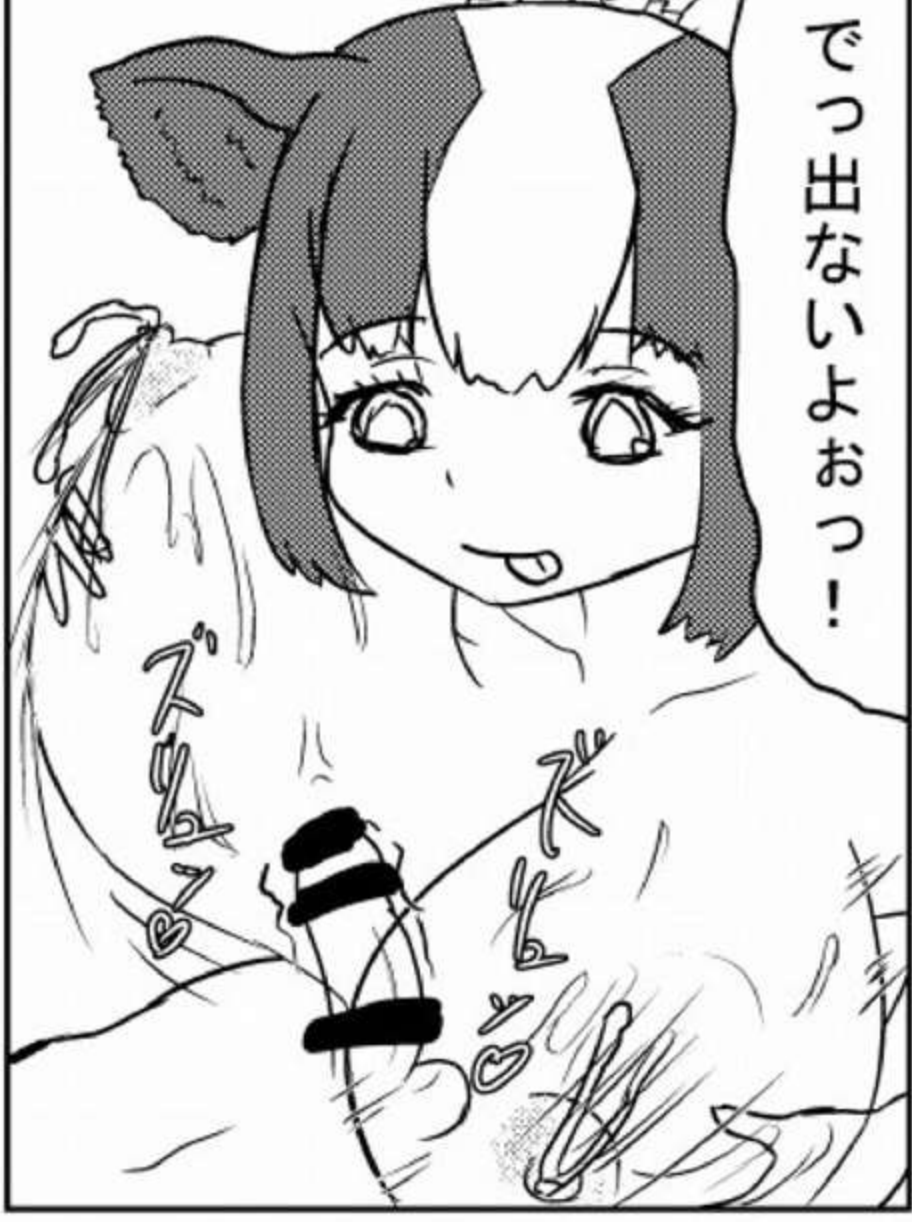
だから…



私も…ヒトのミルクが
飲みたくなつたんです！

ヒトのオスはここから
ミルクが出ると聞きました♪

でっ出ないよおっ！



おっぱいでちんちん
コスられると…
へんな感じ…

ちんちんの奥から
何か…上ってくる
うそっ
おしっこ出ちやうや？

出さう、
おしっこも
出さうぞ

あまあまあまあまあまあま



ごめん…お姉ちゃん
おしっこかけちゃった…

おしっこじゃ
ないですよ？

これはボクの
一番搾り♪

一番搾り…
本当にここから
ミルクが…

スルル！

はい♪そして
最高のミルクを頂く
最後のひと工夫が…

こっちで頂くと



もっとおいしい
らしいです♪

お姉ちゃん
お股びちよびちよ…
どうして？

早くボクのミルクが欲しくて
ヨダレがたれているんですよ♪

うふふ…♪

ボク…お姉ちゃんに
食べられちゃうの…？

お姉ちゃん、お股びちよびちよ…

い・た・だ・き・ま

の・す・た

ス・ア・ア・ー

お股びちよびちよ…

お股びちよびちよ…

すごいっ根元から
しぼられて…
本当にミルク
しぼりみたいっ

お姉ちゃん、また、

ミルクを出さず、お股びちよびちよ…



翌日...少年は
パーク内畜舎で発見された
彼は生涯授乳逆レイプモノ
でしか達せなかったことは
言うまでもないであろう

おわり



「メチャシコじゃないよ！」作・にのじ







交尾気持ちいいでしょ？

交尾？交尾って…あの犬とかがする…？

そうさ君はオオカミに襲われちゃったかわいそうなワンちゃんなんだ♡

あ♡♡

ん♡♡

あ♡♡

ち違うよ！ボクはヒトだよ！

ズチュ
ズポッ
ズチュ

ズポッ
ズチュ



に…にげなきゃ！



それなら僕の名前覚えられるよね？

あえ…







一分間止まらなきゃ……ってなにしてるの!?

あゝ
つかまっちゃった



グー……



とろっ

うわっ



うわああっ



なんでも
いいじゃないですか
あなたは動けないん
だからさっさと
一分間数えてると
いいですよ

そ
そんな……



出るうううっ



なにかくるっ
なにかきちゃうっ

やめてっやめてよっ
おちんちんなんか変になっちゃう……っ



その後も……

うふふ
おっぱいの中に
たっぷり射精てるよ

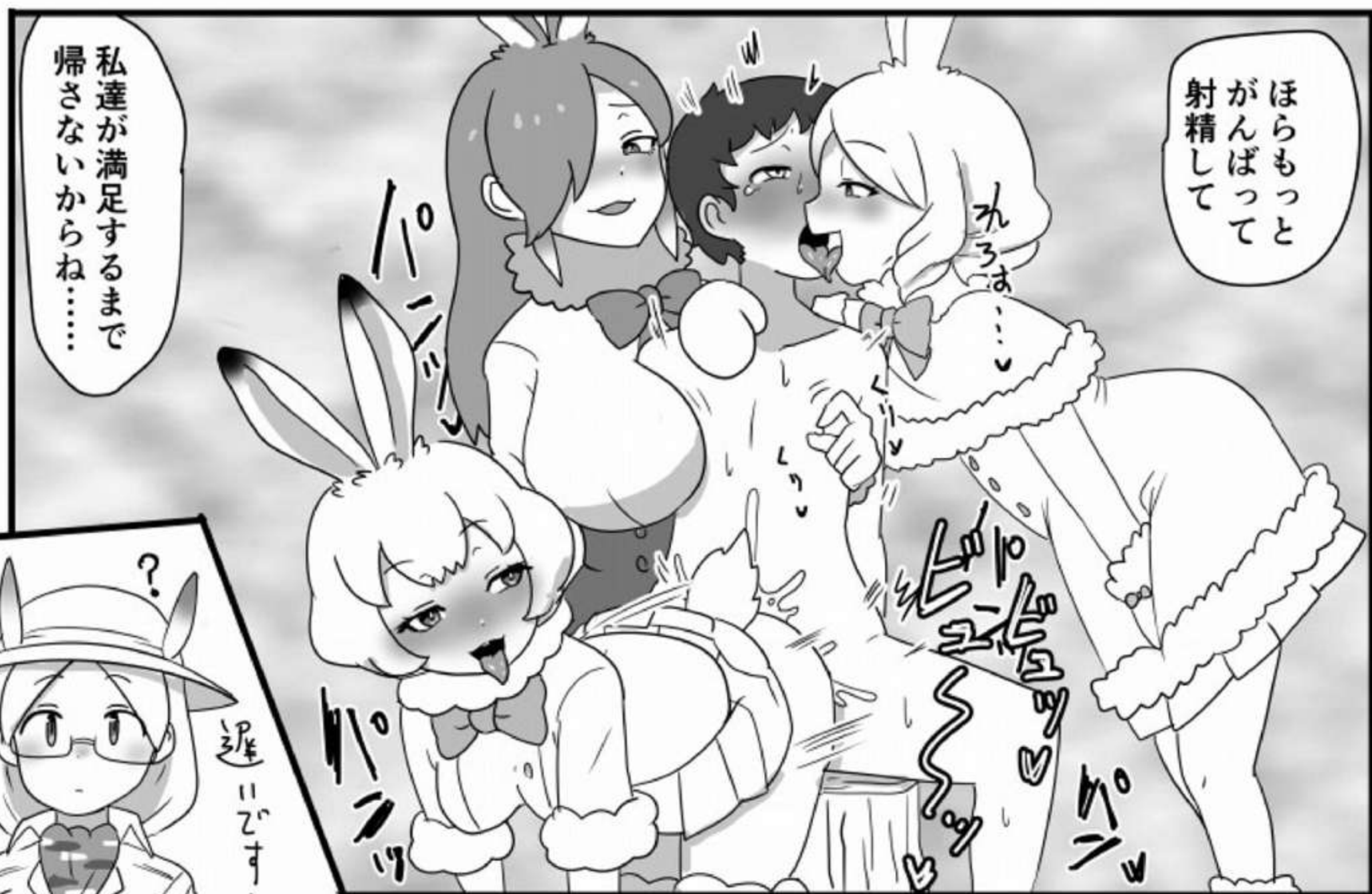
うりうり
足で踏まれて
射精しちゃうなんて
とんだ変態ですね

罰としてもっと
射精するがいいですよ

また射精ましたー

お顔を
女の子のお尻に
敷かれるのが
好きなんですネー





END

くちゅ?

う、うう...
何の音?

うた...
うた...

...って、う、うわあ!
何がどうなってるの
これ!

コモドちゃんの
おとなのけんきゆう
描いた人:ま王

あふあ、目が
ふあめたほね
(あら、目が覚めたのね)

戸惑ってる
ようだけど

無理
ありませんね

ニニはわたしが見つけた

き、君は一体……？

わたしはコモドドラゴンのフレンズなの。

（ほくは）
確かパークの
見学……

パークの外れにある小さなほら穴なの。

あらあ

わたしは特別な毒を自分で作る事が出来るの。

それで色々研究してるわ

にちゃあ

あなたもその毒で眠らせて連れて来たの

毒で作った幾つかの薬を他のフレンズさんに試していたら発情が止まらなくなったので

あ♡

ニニのほら穴を
発散の場に
使ってるわ
すごい所でしょ？

……そして
あなたは
わたしの相手を
してもらおうの

ほく



ほま

ほま

それいゃあ
ただき、まあす♡

せーの

ま、まごてー！
まごてー！
ごち

♡ほま♡

♡ほま♡



はちゅん♡

うああ！

えいっ♡



まだ休んじや
駄目よ?

すぐにおちんぽ
大きくしてあげる♥

も、もう
やめてえ...

はあ...

んん

だ〜め♥

あがあっ!

はあ

図書館で読んだ本に
書いてあった事を
試したけど凄
効果だわ...

ごもかいてるがモだけ...

ぞく

はあ

うあ...

あ

あ

んん

びくびく

んん

びく



ああ！早く！
早くもう一度

イって♥
イって♥
イって♥
イって♥

ぐちゅ！

ぐちゅ！

いよん！

いよん！

いよん！

ちゅぽっ

ぐんぐん

ちゅぽっ

ぐんぐん

ひゅるっ...

うあ...!!
また、で...る...

たくっさんのザーメン、
わたしの膣内に
注ぎなさい！♥♥♥

注ぎなさい！

はっ

はっ



ああ……♡

ピュッ♡

びゅん!

んああ……♡濃いの出てる! いっぱい出されてわたしもイっちやてるう♡!!

びゅん!

びゅん!



……また明日
楽しみましょう♡

完



あら?

気を失った
みたいね
仕方ないわね……



んっ♡
あふれて
きてる……♡

ここは
うまのふれあい
コーナー



今日は
よろしくね



いっばい
あそんでね!

さっさと
さっさと



こんにちは...

馬小屋にて

三三(@osasimilli)



ね

なでて
ほしいな...

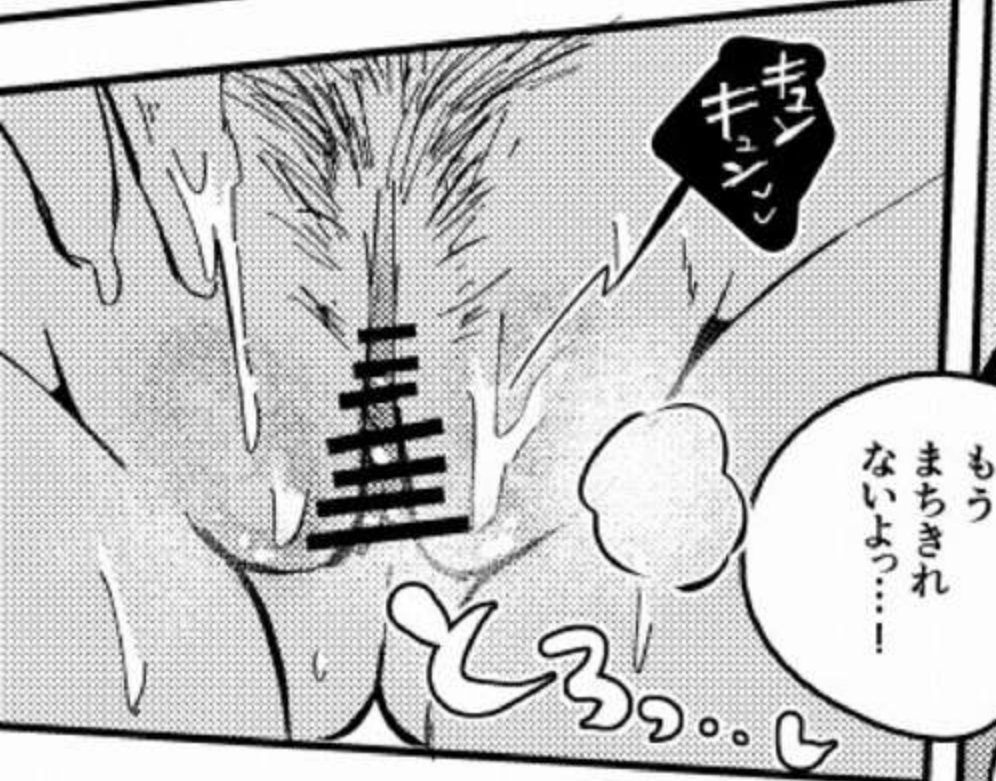


きみ
ひとりで来たの?

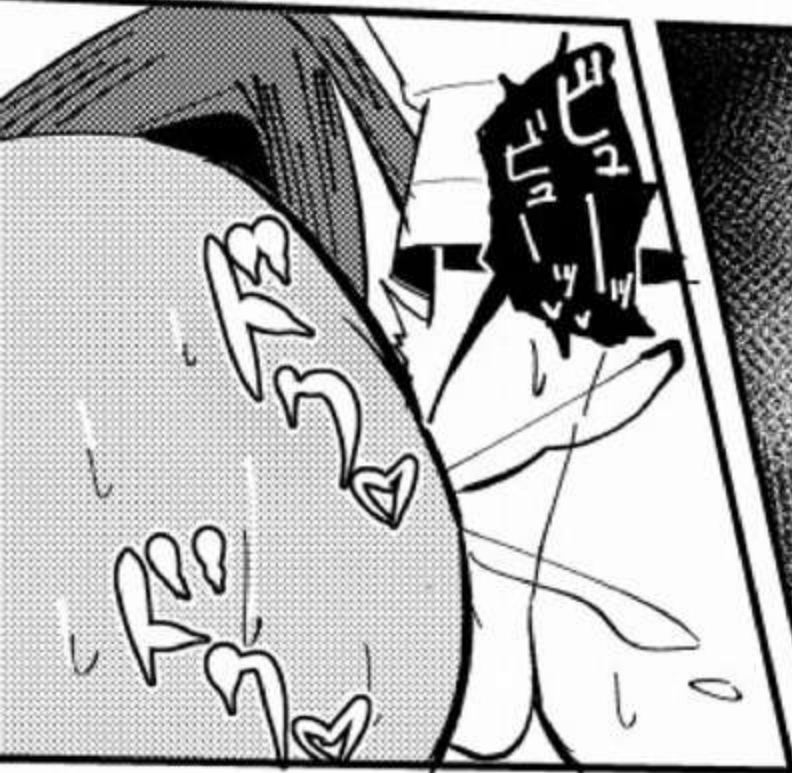
はい!

おきき...











ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ



…うん



もっと
いっぱい
しようよお…

まだまだ
いっぱい
あそぼうね

あのっ
僕もっ…っ

やだよお



まもなく
パーク閉園の時間です

なお
指示に従わない場合
パークの規定により…

Fin

僕はホラー探偵
ギロギロのファン

失礼します

ガチャ

作者のタイリク先生に
ファンレターを
送っていたところ、
なんと先生の作業場に
招待されてしまったのだ
うれしいな

ギロギロ

…あれ

キラリ

居ない？

ドサツ

うおっ!?

……せ……

ずい

先生……？



うおっ!?



な、なんでしよう

はー♡

はー♡



すい



やめましょうよ...

こんな...

おかしいですよ
先生



おっ!

はー♡

はー♡

はー♡

びく
びく



先生…なんで…

ちゅん♡

私ねえ…

このところ
カンヅメで

色々たまってるんだ…
…だから

しばらく
おとなしくしてて…

はははははは
はははははは

わっ？

はははははは
はははははは

うずうず
うずうず

うずうず
うずうず

キム♡
♡♡



ん?

死



...いっぱい
出したねえ...



気を
失ってる...

...ふふっ
それなら♡



夜は長いからね♡

いこうじゃあ
ないか♡

第2ラウンドと

終



お疲れ様！…

おつかれさまでーす

ガチャ



どんより

はあ〜

パーク研究員
(人間動物学)
サオ



あっ
もしかしてまた
偉い人に怒られ
ちゃったんですか？

ぶっ

ゲサン



ン…今日はラッキーデーなのに
暗い顔してますねー

今日のあなたは
ラッキーだよ！
エクイテス



そそんなことより
ケツアール君！
頼んでおいた荷物は
受け取っておいてくれたかな？

それなら

ゴソゴソ



んじゃそつちに持って
いっときますねー

むんず

それぞれ

ブルケハ
リュウゼツランノ
樹液ヲ発酵サセル
事デ出来ルメキシコノ
伝統的ナオ酒ダヨ
白ク濁ッテネバネバ
シテイルオ酒デ
インターネットデハ
謎ノ白イ液体ノ正体
トシテ有名ダネ

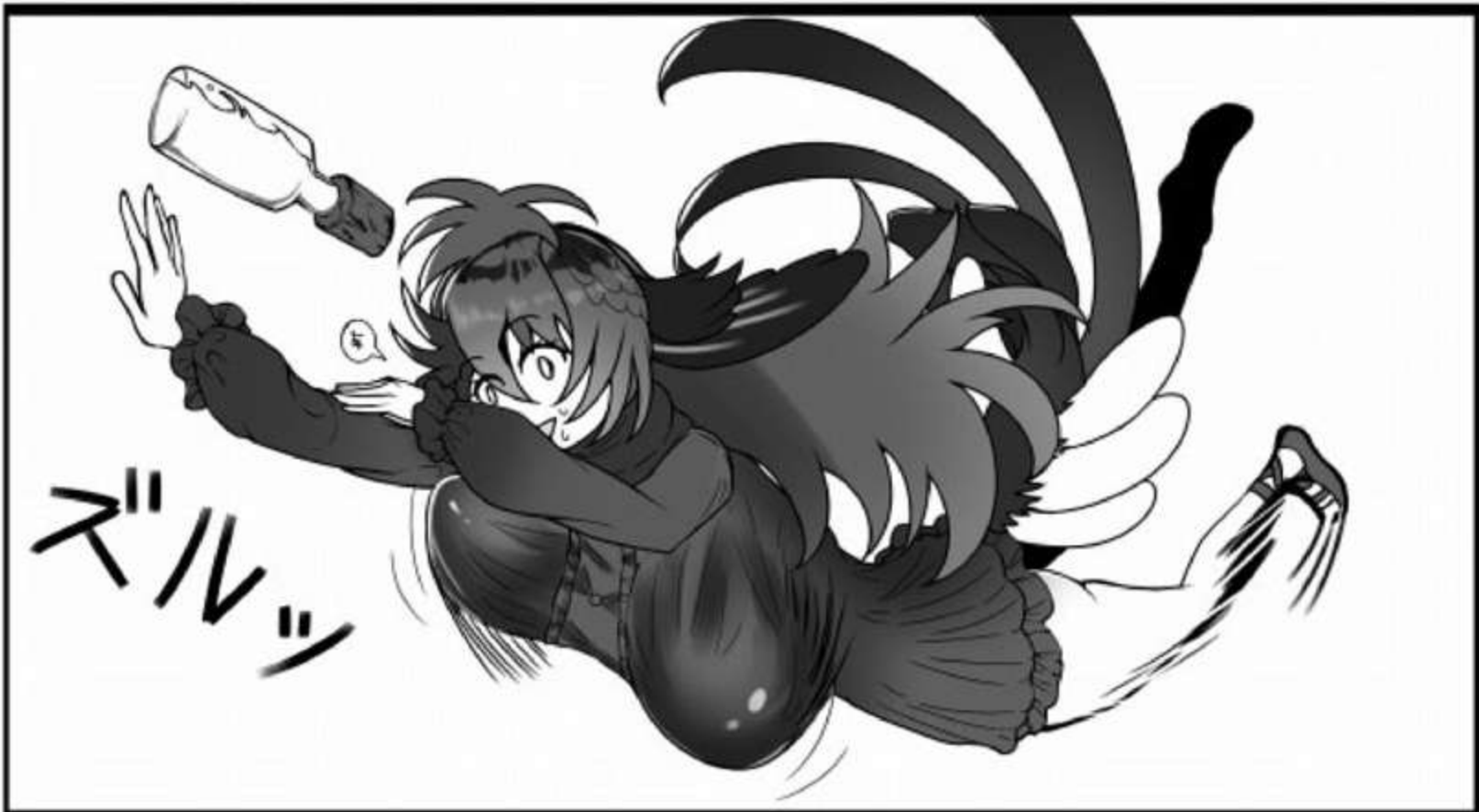


これですよねっ
ブルケ……でしたけ？



ガ
ツシクニ!!!

ビクッ



ズルッ



とっとにかく

何か拭く
ものを…



ドロォ…

なんだ今の音!!
って

ええっ!?



バズッ



バタン…



まだ使ってない奴は…

あった!!

ん…?

なんだ?

手が…

か
ち
ゃ

か
ち
ゃ

動かせない?

というか
ここは一体何処なんだ?
それになんで鎖が

フフ…
憎いぐらいよく
似合ってますよお

ケツァール!

……は?

お前 これはどう
いうことなんだ?
まるで全然わか

5、



はい♡

発言は許可
してませーん

わざ
美麗三色ダーツ



あなたにはワタシの

イケニエになって



もらいまーひゅ♡♡♡



くそっ
このままだと...

これでまだまだ
遊べますね

今日のあなたはラッキーです♡

ワタシの尾羽 ちょうど一本
生え変わったんですよ

ギョウウウウ...





おぼろ

ジュッ

どん

ワタシの愛しい
Nohueltiuh

全部吞んでしまおうと思ったけど
あなた気に入ったわ

これからもよろしくね♡

んんん

終

「それでも、ぼくは」

はづきガレット

さて、
始めるとしますか。

「うん、
ちよいっちよいっ
するのですよ」

ふのふ

わん



まあ口枷ぐらい
外してやるのですよ



暴れるな
なのですよ



っ博士も助手も
急にどっしちやったん
ですかっ!?

「ほっ
「ほ……っ



何時もみたいに勉強に
来てたぼくを捕まえて
「人間のせいえきき?は美味らしいので」
なんてまた訳の分からないことを
いいたしてっ
もうっ、はやくこの手の紐をほどいて
よっ!





ひぐっ

うぐじゅ
じゅぐっ



じゅっ

なかなか
美味なのです

あっああ





あー
うー

あー
あー

あー
あー

どうしてこんなこと……
ほくは……ほくは



はあ……凄いですね
って博士なに最後の
美味しい所
とってるのですっか！
なにを言ってるのですか
早い者勝ちなのですよ
助手
あー
あー

それは、まだ二人にあったばかりのころ



うんうんおはようございます

いつも、一人で勉強しに来て
友達がいないのですか？



また来たのですか？

学校になじめなかったぼくは、一人でいられる場所を探していた



まったくお前には
教えてくれる友達は
いないの……



ほら、
ここが違うですよ

ぼくは、一人でいいと思ってたのに……なのに……

ぼくは二人が
好きだったんだ



困難は群れで
分け合わなくては
ならないですよ



はあ……
仕方ないですね
賢い我々が友達になってやるのですよ

end

経見れい
reikishi





作：いの

あらあら
ほんとだわ

ママ…
大変なの

ポクのこころが
腫れちゃってる
のです……

これは
おかーさんが
慰めてあげないと
………ネ♡♡♡

すずる……

は……
オムツ

は……



何してるの？

シロナガスママと
作：絶対絶命



イツカクちゃん！

マイルカちゃん…



みんな
みんな
みんな





これが
いけないの
かしら？



だめよく
そんな目で
あの娘たちを
見ちゃ

お仕置きして

あ・げ・る♡



あ、だ
だめ……！

だーめ
やめない♡

あ……
でる……！





野生開放♡

ここにも
いっぱい
射精してね♡

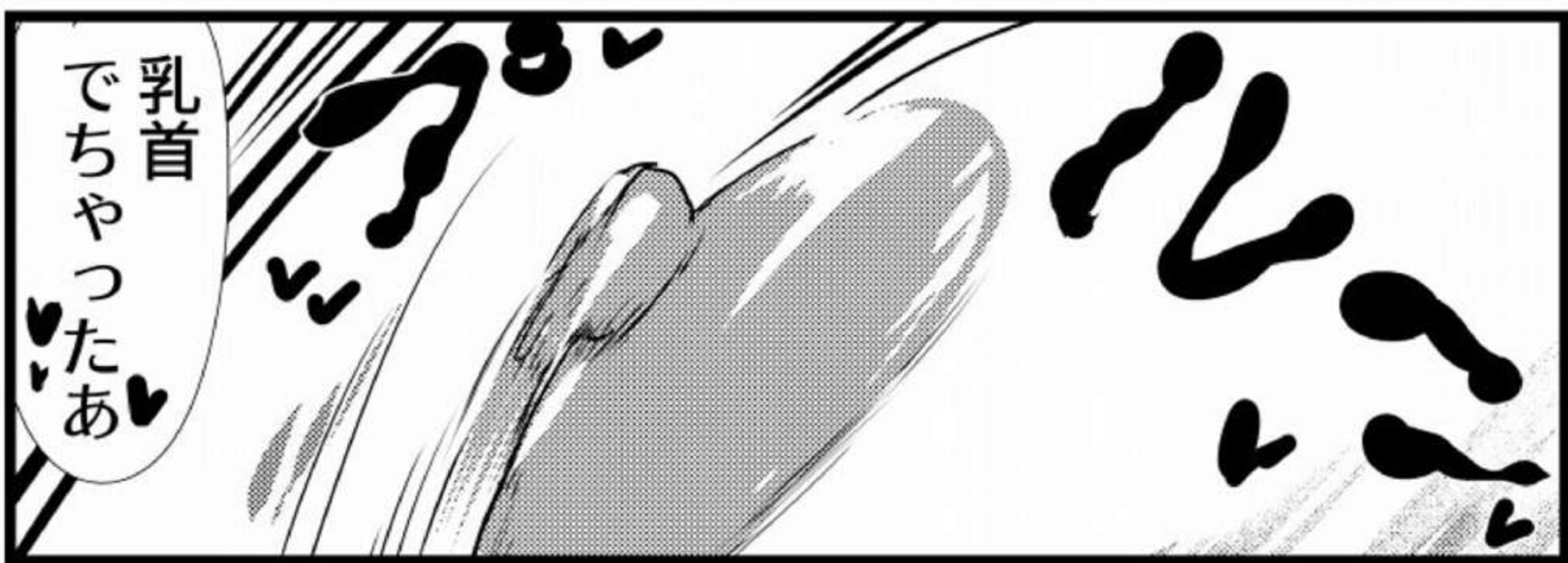


ひっ...!!



あああああああ!!!

CHU♡





あれ
ママどこ行ってたの?

探してたんだよ

ちよつと
あつちで

お掃除を
…ね♡

しんじゃう…

完

おや

あとがとうぐー

あなたって
おもしろいのね

ほ

ほ

うん

私、ちょっと
面白いこと
知ってるよ

おもしろいね



どう？
あなたもたのしい？

あはあ
♡

えへへ…♡



ねえねえ♡
もっとあそびたい



あのね、わたしの
友達を紹介
したいの

…そしたら
友達とも一緒に
あそぼ♡



…それで

その新しい
お友達は
どこにいったの？

…それがさー



海に入って
しばらくしたら

急に潜って
いつちやって
そのまま戻って
こないの…



あーあ。
せっかく
みつけたんだけどなあ

おもしろい
おもちゃ

おわり



なーっ!?

ん……

クミホの逆襲

作:朝倉銀



ふふっ。
驚いたかしら、
園長さん？

ヒトを
食べちゃだめって
言ったでしょ!!

あら、
食べないわよ

今日は

こっち

九尾狐は1000人の人間の男の心臓を
食べるという伝説があるんだよ



悪いわね。
何百、何千年も生きていると
どうしても我慢ができなく
なっちゃうときがあるのよ……

発情期かな……

んっ……！

すい
ぽんぽん

ああっ！

じゅ
ぽんぽん

じゅ
ぽんぽん

じゅ
ぽんぽん

いいわよ、
あなた……！

ズッ



出てくる!!

あはっ

どろ

どろ

☆俺たちの戦いはこれからだー!(あと80回)

あら、何休んでるのよ。私はまだ満足していないわ

ふふ、尻尾の数だけ愛してあげるわ……

ジャパリパーク
火山地帯

うゝむ

暇じゃのう！

ゴゴゴゴ...

巷ではフレんズが
男を襲つとるようじゃが

男どころか生き物
一匹こんわい！

しかしフレんズに
襲われるなど鍛え方が...

セイリユウが
いいわい！

フウフウ

む！

の スザク
Suzaku

むむむむ！



え

暑い...

どこだろう
ここ...

どこだろう
ここ...

ぽわぽわ

ぽん

わっ
ぽん

この暑い中
よく頑張ったのうー!

よく来たのうー!
よく来たのうー!

やあやあー!
我に手土産を
わたすのじゃー!
て...

我に会いに
来たのじゃらう?
そらうじやらう!?

びび
びび



なんじゃあ？
抱かれて
催したのか？

あ…あの
えと…
ごめんなさい



いかんのう…
じゃが

えっ
それなら



む？

びん
びん



手土産は

これで
決まりじゃな♡

うん
なんでも







あーっ
あーっ
あーっ
あーっ
あーっ
あーっ

あーっ

ア
ア
ア
ア
ア
ア

あーっ
あーっ
あーっ

※鳥の羽をむしってはいけません。



熱中症。

子種以外にも土産を...
ってあれ...?
お...起きるんじゃ!

ガッ

おわり



なんというやつじゃ!
説教をしてやるから
そのまま聞くんじゃ♡



うわあ...
きれいだア...

なんで羽
抜くんじゃあ!?

聞けい。

ツチノ子の場合

In the case of Tsuchinoko

せんせいかきゅう

今日も
やってきました
洞窟エリア！



オイオイまだパークが
開園して直ぐだぞ？

真の先にニニニに来たのがキミイマ？





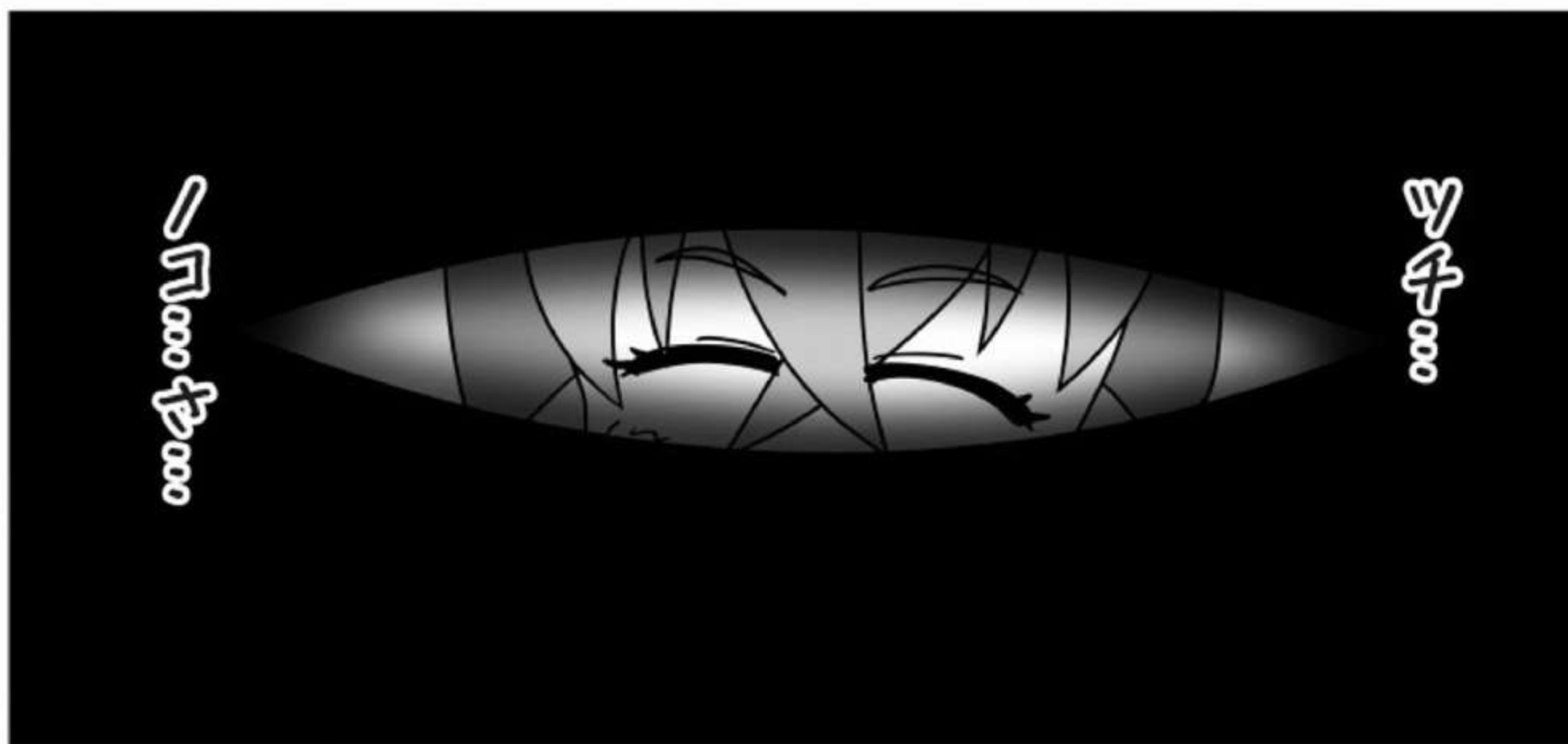
あつそうなんだ
そりゃ有難うな...

はいッー!!
今日も
ツチノコさんに
会いに来ましたッー!



え?
何?!

んいや他に誰も
来ないうちにな!



フゥフゥ

ツチノコ



なななな何で
こんな事に!?

あー詳しくは面倒
なんで省くけど、
一部のフレレンズは
ヒトの精液が
過去の記憶の維持
に必要なんだわ
で、たまにヒトを
さらって精液を
頂いてるってワケ

サラッと色々
凄いや言ってる!?

ま、精液を頂く
だけだから
安心しろヨメ

いやいやいや!

お、奇麗に
してんな...

ちよっと残念

ちゅぽ

...ニミまで走って
来たのか?
汗で湿って良い味

だ...
正に丁度いい塩梅

ってか...
ミスマン

#グッ...



やっぱり若いのは
良いよなア…
一気に
硬くなりやがったの

くちゅ…

くちゅ…



この丁度喉奥に
当たるか
当たらないか
位のサイズが
乙だよなア…

くちゅ…

ぐんぐん
ぐんぐん



くちゅ…
「やめて」とは言わない
のがまた可愛いなア…

くちゅ…
くちゅ…

…んツ…
ん…
ん…

つ、ツチノコさん…
んツ…
くちゅ…
くちゅ…



出ますッー!!

えッッー!!

ちよっちよー!!

おッ...おおお...
こりやまた...

カラむ...カラむなあ...
かりッかりな上に
量もスゲエ...

...若いって...
イイヨナマ...

ズン...

ズン...

ズン...

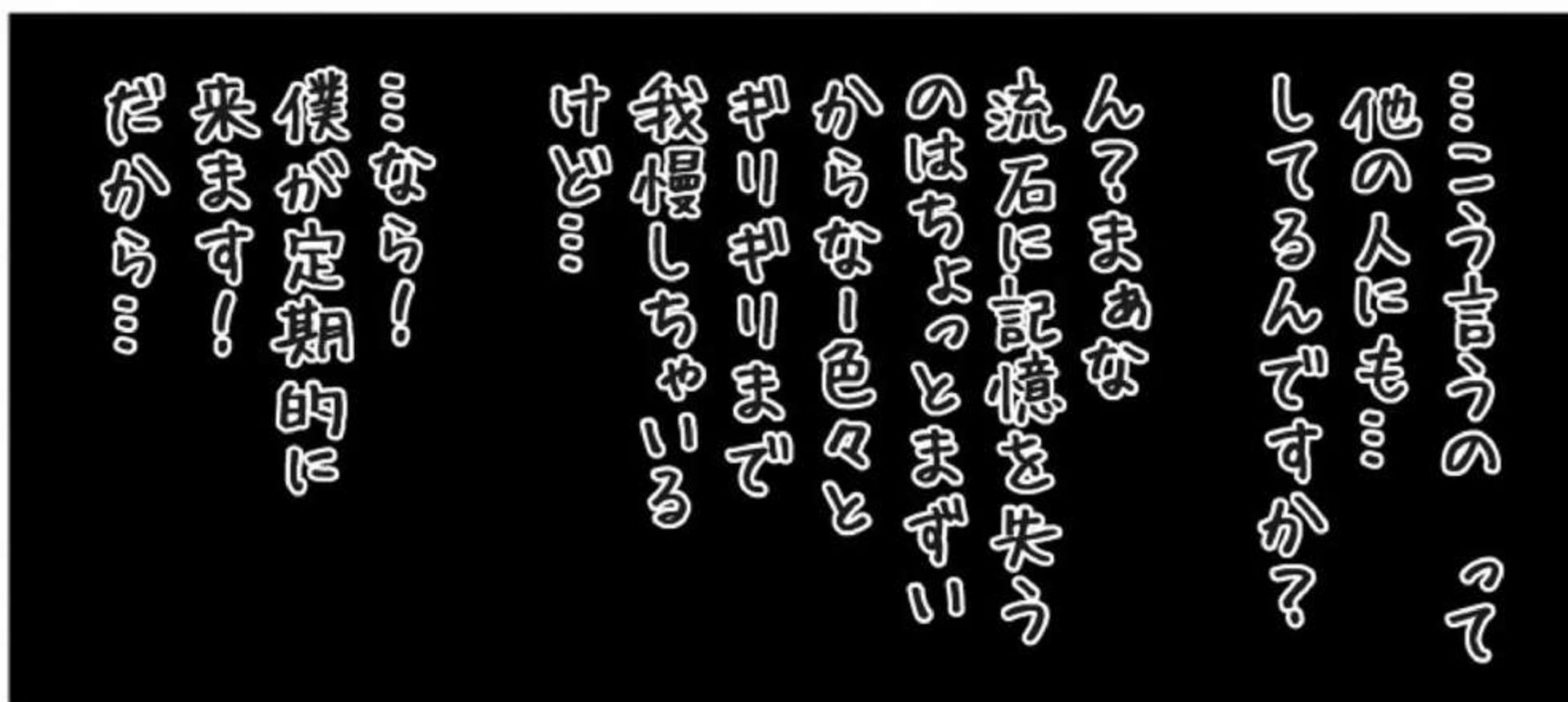


...ごめんなさい...
早くてごめんなさい...
でも...
我慢できなかつた
んです...

き、気にするなよ?
オレ的には助かるぞ?



それはさておき、
ありがと十♪
これだけ飲めりゃ
かなりの間
記憶が維持出来る



…こう言うのって
他の人にも…
してるんですか？

ん？まあな
流石に記憶を失う
のはちよつとまずい
からなー色々と
判り判りまで
我慢しちやいる
けど…

…なら！
僕が定期的に
来ます！
だから…



…ありがとな…
でも残念だけど
…での出来事は

…いつで
忘れてもらって、
記憶をでっち上げ
るんだ

でも僕
年間パス
持ってますし！
何度でも
来れますよ！
…ああ、お陰で
凄く助かってる…
…今回も
濃い的大量に
ありがと+…
…え？
今回…って？



ん…暗え

サボって寝すぎたか？

…って何だこれ!?

ギタイ…

!?

なんで縛られて…!?

やっと目覚めたかこの阿呆め

ザッ

ああ!?!
何だてめえ…

ひま 性欲を捨て余した

かみがみ 四神の
あそび 輪姦

我等は四神

パークを
守護する者なり

描いたひと: チェルノ・をかし



怠惰で乱暴で好色な嫌われ者の清掃員...

パークには

相応しくない男じゃ

ウェイイ君たち、お力貸してあげよう。俺マジで楽しんでいるから、今から見交しなさいやう。

こんな工口い格好して何々君欲求不満なの？ そんなにやりてえなら俺が介介まくってやっからさっつち来いってー！



ぬしが勝手にサボっておったのだからが

四神...って何だよ！お前から人間様をこんな倉庫に監禁して何するつもりだ!?

お前のこと我等はずっと見ておったので



我等も憎ぞ... 淫欲に身体が支配されて敵わん...

この甘い火照りを発散したくてたまらんだ...!

しゅる...



皆の為にもぬしは始末することにしたのだが...

...しかし、ぬしにも使い道があると思ってたな

なっ...始末!?



折角だからぬしの魔羅、我等で使ってやろう

気張れよ 途中で萎えようものなら刻み殺してやるからの♡

ぬん...





ふふ…ピヤッコめ
派手に達したな

びくっ

あーっ

びくっ

びくっ

びくっ

びくっ



あッ
熱ッ
あッ
熱ッ
あッ
熱ッ

びくっ
びくっ

ぐおお…ッ!!

びくっ

びくっ



わしが果てるまで
使わせてもらおうぞ…

次はわしだ

ぬちゅ

うおッ!?



さあ…

さっ



こぶくろ
子宮口まで
届く……♡

ほらもつと
滾らせろ！
死にたいのか？

腰が止まらなく
なりそうだ……っ

パン
パン

ぐう……ッ！

グアッ

グアッ
グアッ
グアッ

グアッ
グアッ
グアッ



グアッ♡

うああ……ッ！！
もうやめてくれ！

グアッ♡

グアッ♡

グアッ♡



我はまだ満足
してはいないぞ！

ほら怠るでない
もっと腰を振るのじゃ！

我がイクまで……♡



ああー！
イワッ！



萎えたら殺すと言ったぞ
早く勃たせてみせい
もっと楽しませろ！

情け無い男だな
尻の穴を抉れば
また勃つか？

おっ……
射ねえ……

そっ無理だ……

ハアッ♡
ハア♡

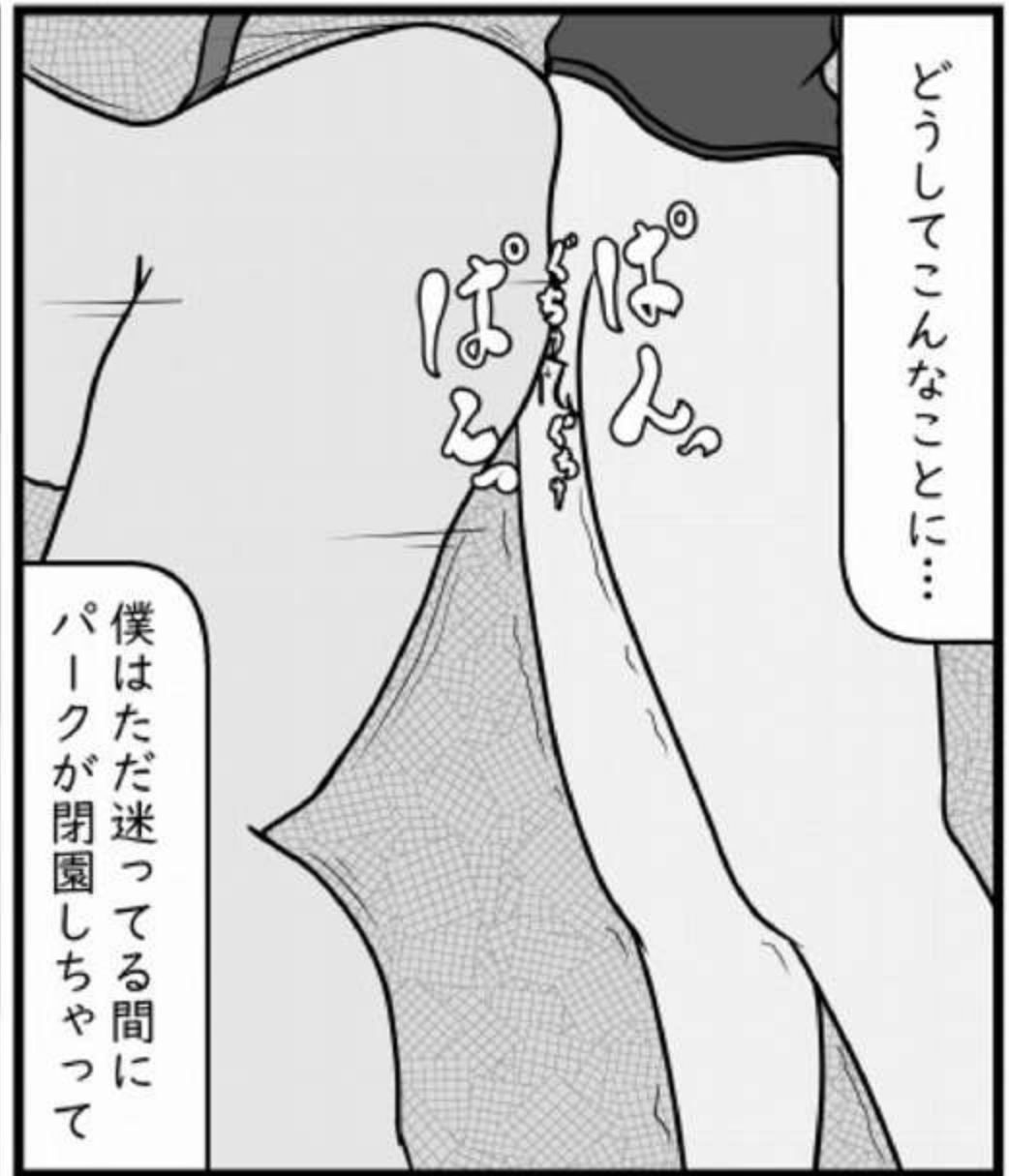






「頼むうっす!! お前の中でイカせてくれえ!!」
罪人の懇願は少女の耳には届かない。
ここは生前、動物を不当に虐げた者が
来る地獄「ジャパリヘル」。

彼が味わうは決して絶頂できない極上の快樂。
彼が生前弄んだ命の数だけ
射精を封じられたのち、
地獄を舞う煤の一片となるのだ。



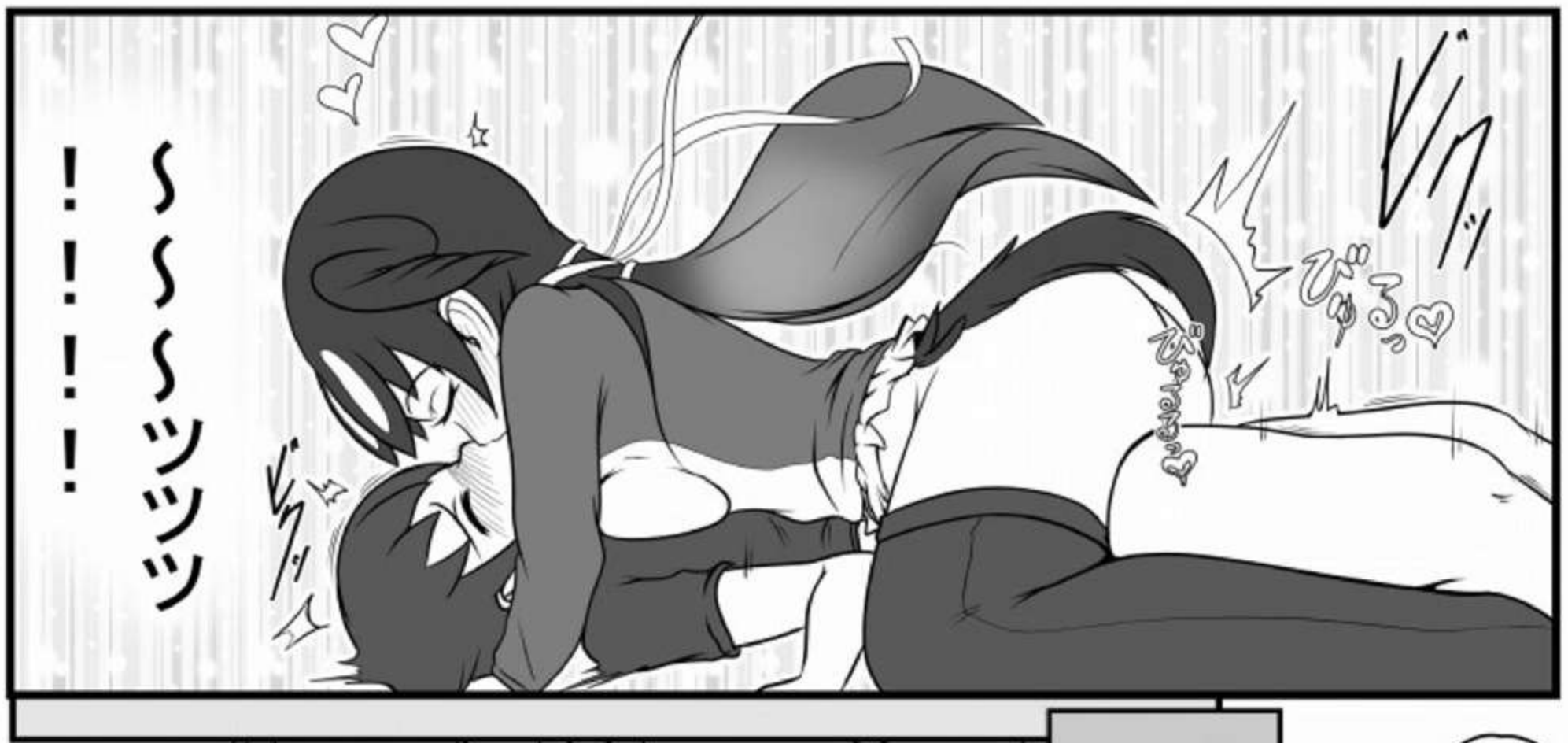












おわ…り？

『オオウミガラスさんに絞め殺されたい』
おささみ

お兄さん
こんにちはー♥

元気にしてた？

なーんて

手足縛られて
身動き封じられて
元気なわけないよね♥

ここに閉じ込められて
今日で何日目だったかな

どうせこんな
パークの外れには
誰も助けになんて来ないし

今日もお兄さんで
いっぱい
遊んであげるね♥



お兄さん
どう？

苦しいでしょ♡

あら♡

顔の上に乗っかられて
興奮するなんて

やっぱり
変態さんなんだ♡

たぶん♡

じゃあもっと
苦しませてあげる♡



窒息寸前の
首絞めプレイで

膣内射精まで
頑張ってみようか♡





ほら頑張って♡

さっさと射精しないと
死んじゃうからね♡



はい

おちんちん
食べちゃった♡



すごい♡

強く引つ張ると
おちんちん
ビクビクするっ♡



ほらっ♡

限界まで
絞めてあげるから
人生最後の
射精しちやえっ♡

首絞められて
死にかけてるのに♡
気持ちいいことしか
考えてないのね♡



あはっ♡



いっぱい射精たあ♡



あら♡
いつもよりたくさん
射精したね！♡

やっぱり
変態さんには
首絞めは
効果抜群ね♡

明日も
いっぱい射精そうね♡

終わり

こんなこと...

絶対ダメだって
わかっているのに...

ハア ハア

でももう限界...

もうどうするしか...

ザザ...

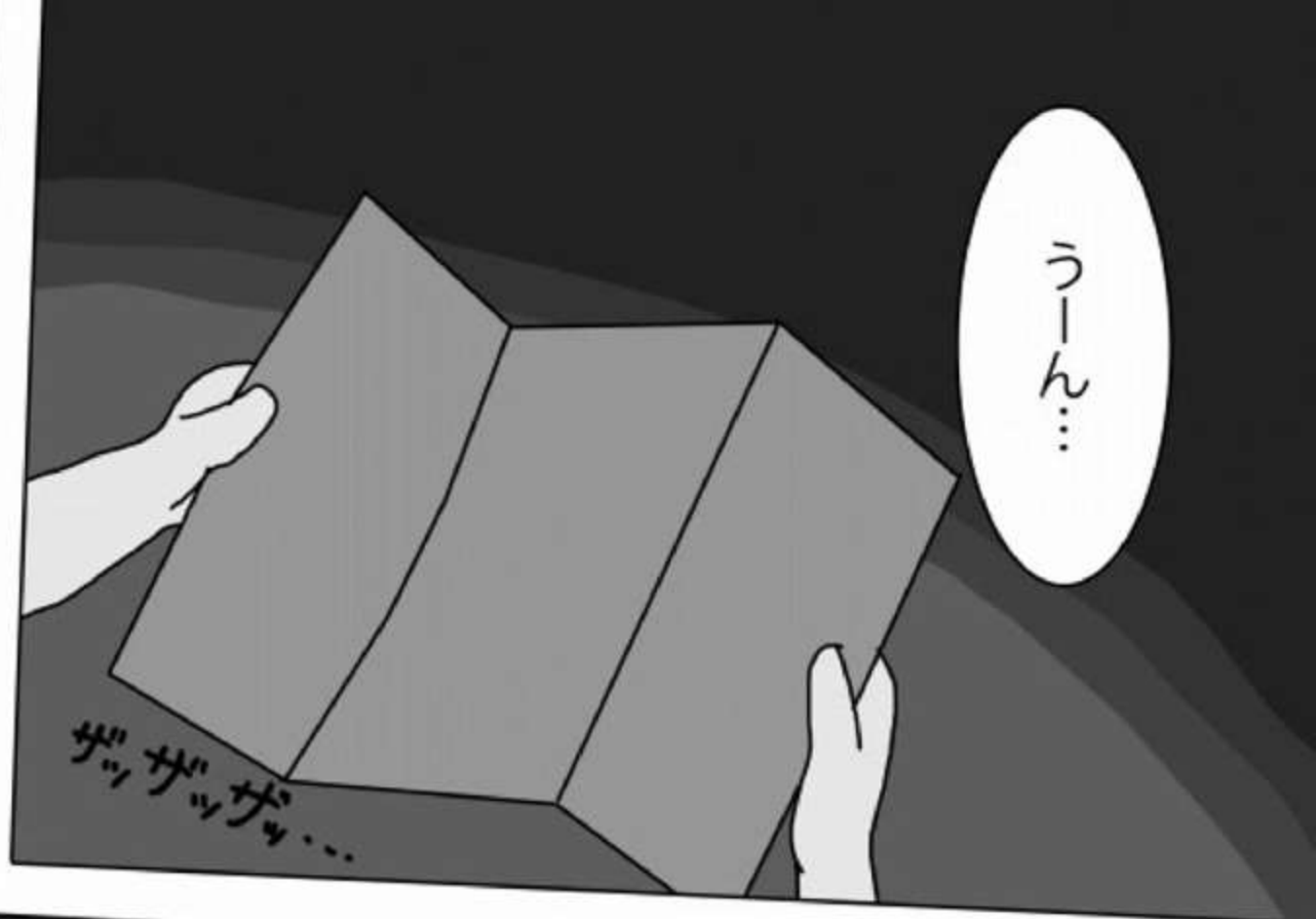
Ambush コカ茶

誰か来てくれますように...

いや誰も来ませんように...

らちちち...
ごきごき...

!





のサーベルタイガー



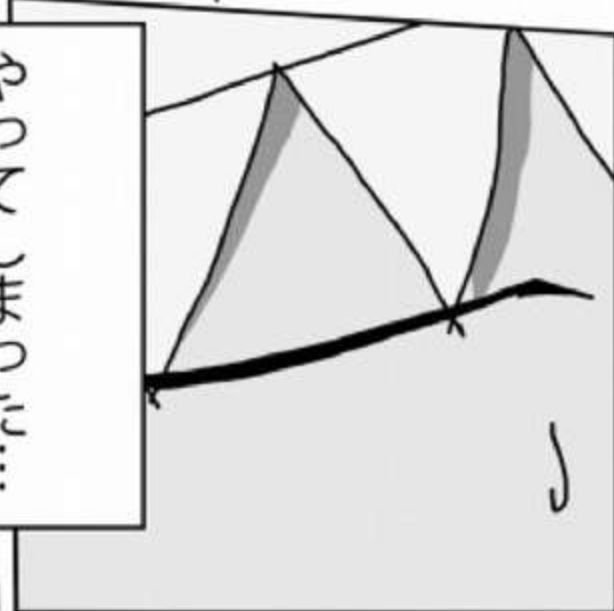
…もじもじにでもなれ

え…?

ごめんなさい
仕方がないの…



自分の欲求のために
他人を傷つけるなんて…



やってしまった…



ちゅぽ♡

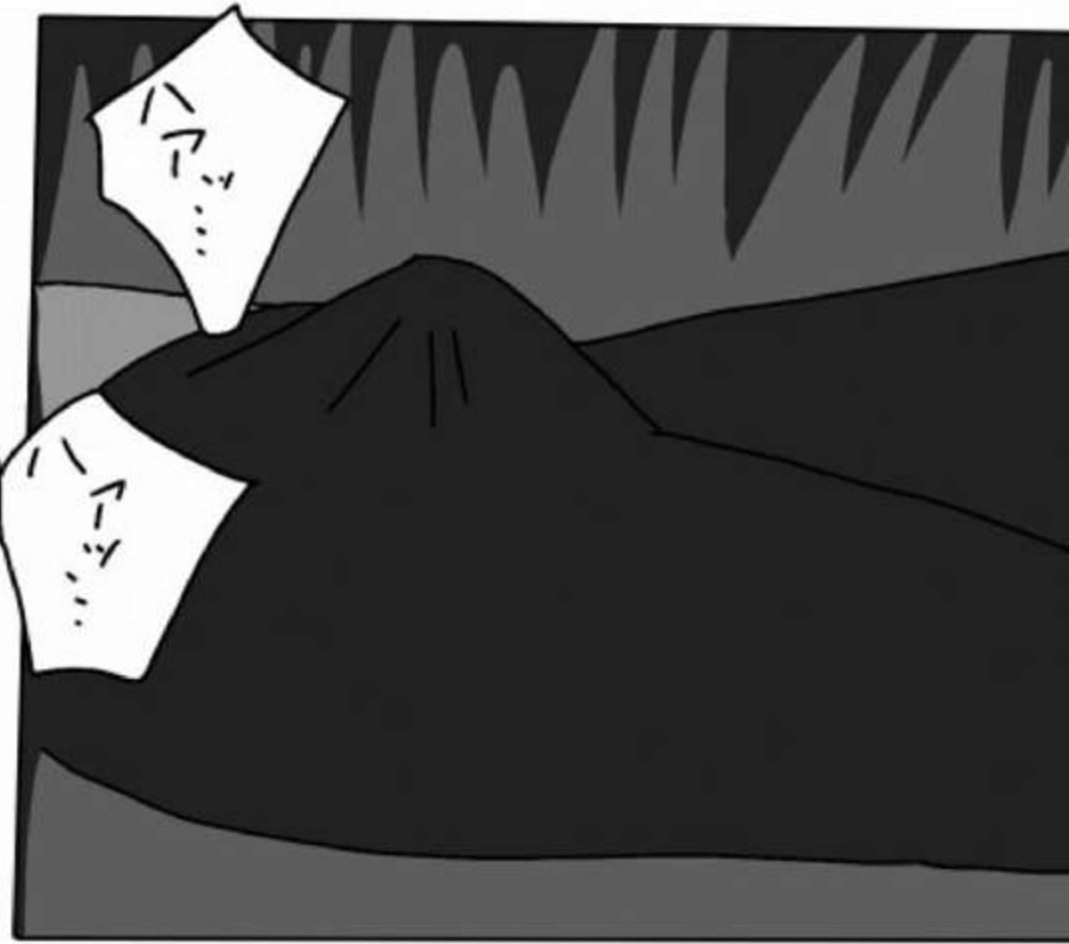
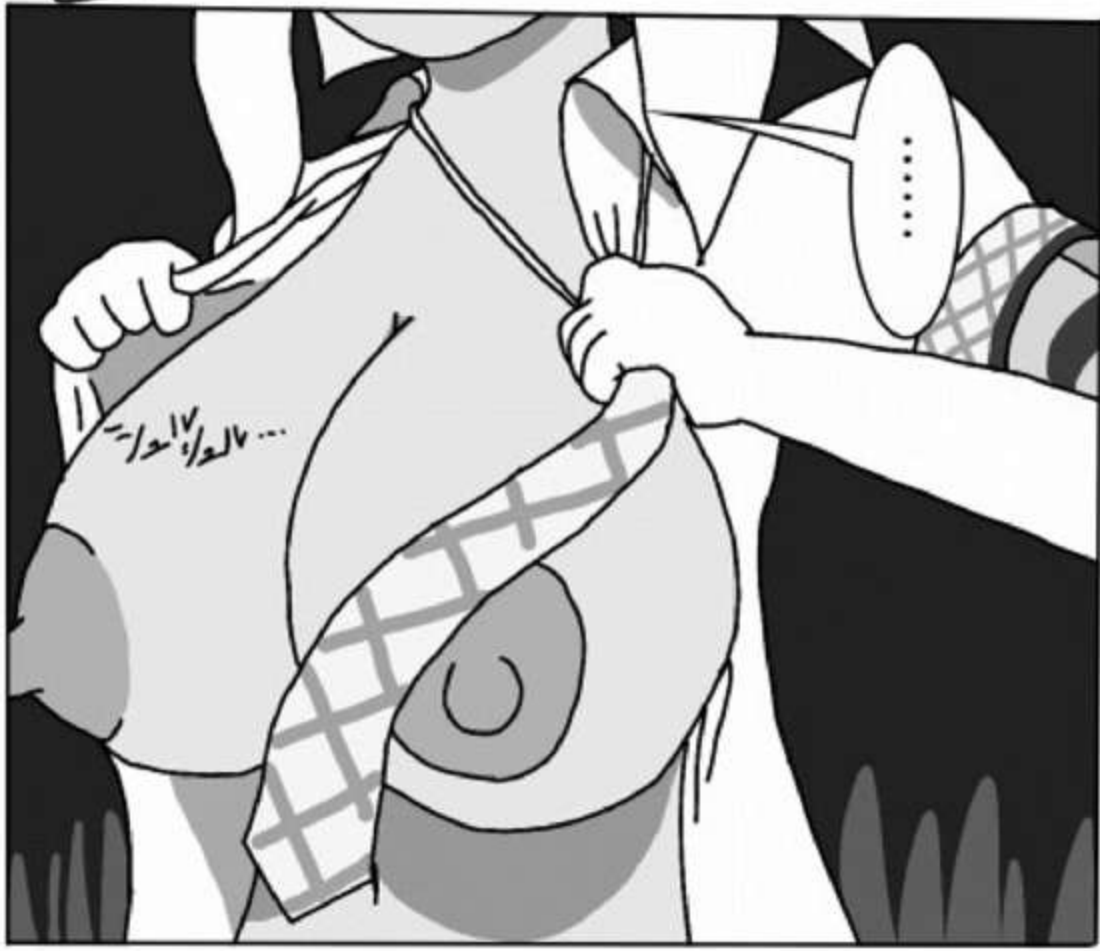
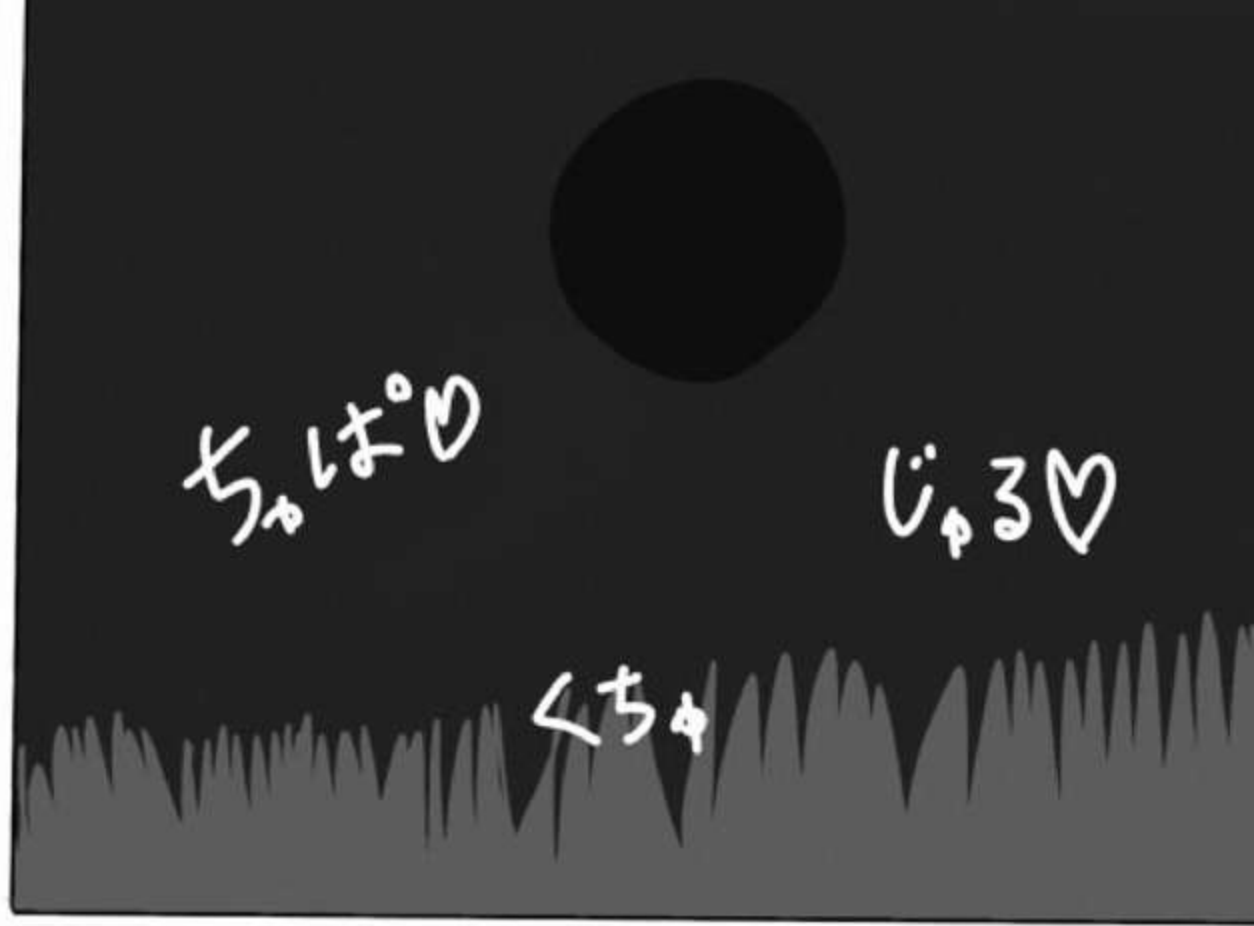
ちゅぽ♡

ちゅぽ♡



ちゅぽ♡

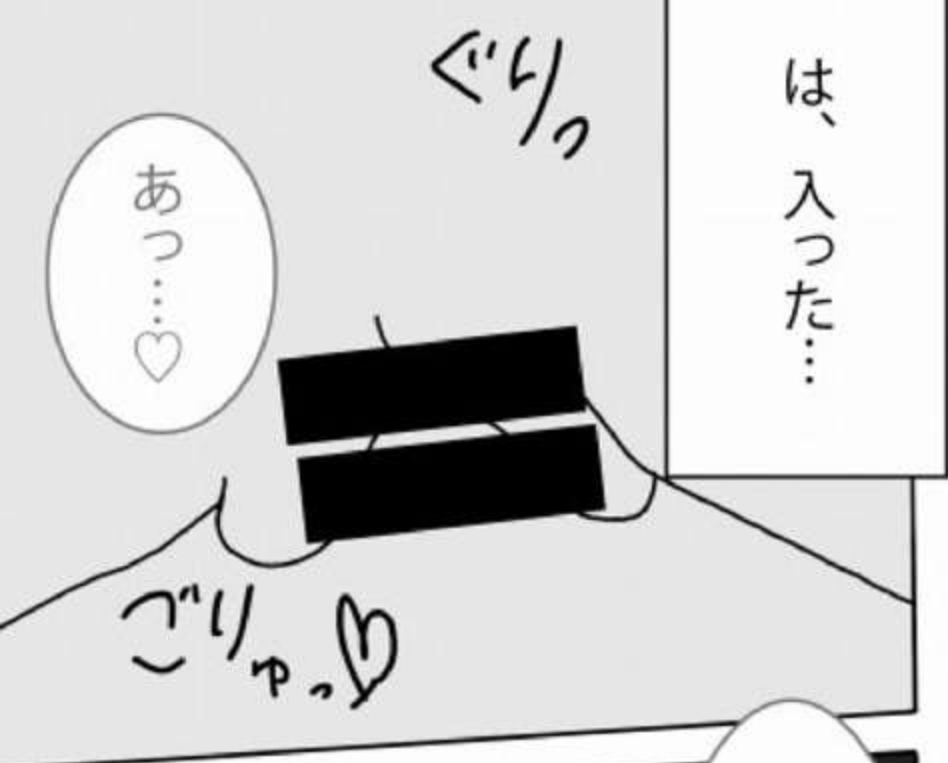
!?



この子と交尾する……！

今更迷うことはない……

せーの……



は、入った...



すごく幸せな気持ち...♡



なぜなのかしら...



本当はいけないことなのに...



もう少し...あと少し...



あ
これそろそろ来るやつかしら...



ごめんなさい…
本当にごめんなさい…

あ、あの…そんな
怒っていませんから
落ち着いて…

せめて何か償わせて…
一生かかるようなので…

え、ええ…

え、えっと、じゃあ…
僕、家族がいなくて
施設暮らしなんです

だから、その…か、
家族になってももらえたら…

ありがとうございます…
この生涯、貴方に捧げるわ…♡

むいっ♡
おっか!?

お姉さん
素敵ですし…

なんて…
お姉さん…

完



カコ博士…こんなもの
見つけちゃいました

ど、どうして
それを…

マンモスラブ 作:トトキチ



サンドスターと
セルリウムの力で
亡くなった両親を
蘇らせる研究なんて…
バレたら大変なこと
になりますよね？

…私を脅して…
何が望み…なの…

まさか、フレンズが
こんな事するなんて…



愛が欲しいんです
私の「ヒト」に
なってください…

ん、ん…

ん…
ダ…ダメ…
こんなムリヤリ…

うふふ…でも体は
正直なんですね

母

↓漫画版マーゲイ

マンモスの強引な
ガールズラブ
アリだな…



ボクの名前は○○

巨大総合動物園

「ジャパリパーク」の
パーククルーとして
勤め始めてから二カ月が
経とうとしていた

絶滅したフレンズ
～ダイヤウルフ編～
作・マメゾウ



こーび♡

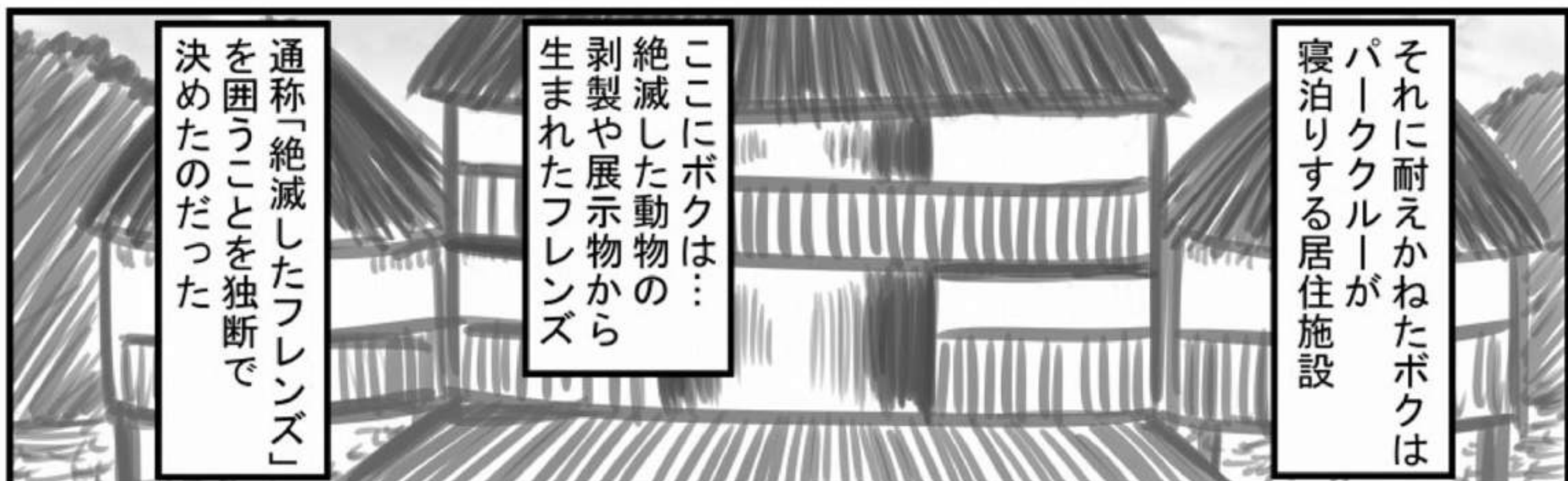
こーび♡

サーバルちゃん……!

ボクの仕事は主に「フレンズ」と
呼ばれるサンドスターの影響で
動物から女の子に変身(?)した
コのお世話をする係だ……が

サーバルキヤット

彼女らフレンズは
ボク達男性パーククルーに
発情し、求愛行動・繁殖行為を
迫るようになっていた……



それに耐えかねたボクは
パーククルーが
寝泊りする居住施設

ここにボクは……
絶滅した動物の
剥製や展示物から
生まれたフレンズ

通称「絶滅したフレンズ」
を困うことを独断で
決めたのだった



他のフレンズさん
達のお世話を
していて…



随分遅かったじゃないか
しいくいん君…
待ちわびたぞ…♡

あ、あの…

ダイアウルブ



何？他の
フレンズだと？

フン…確かに他の
フレンズの臭いが
するな…



私の臭いで
かき消してやると
しよう…♡

ああ…♡

ア…♡



気に入らん…

あっ…

ボク



なんだ？もうこんな
ふくらませて♡私との
交尾がそんなに楽しみ
だったのか…？



ほうっ♡



よおしお前の好きなこの胸で
たっぷりしぼってやるからな♡



は、はい…♡

くるし…♡



どうだ？
すごいだろう♡

フン♡フン♡
フン♡フン♡





挿入ったぞ...♡
さあ交わり明かそうぞ♡



どうだ？
気持ちいいか♡
私の腰使いも
中々のものだろう♡



聞こえるぞ！お前の鼓動
感じるぞ！お前の息吹♡



ああ…♥
気持ちいいです♥

そうだろう♥
そうだろう♥
何故なら私は…

はつきり言ってる
交尾が上手い♥

へっへっへっ

はっくん

はっくん

はっくん



またイクのか?!
そうか♡

よおしいケ♡
私もイクぞ♡

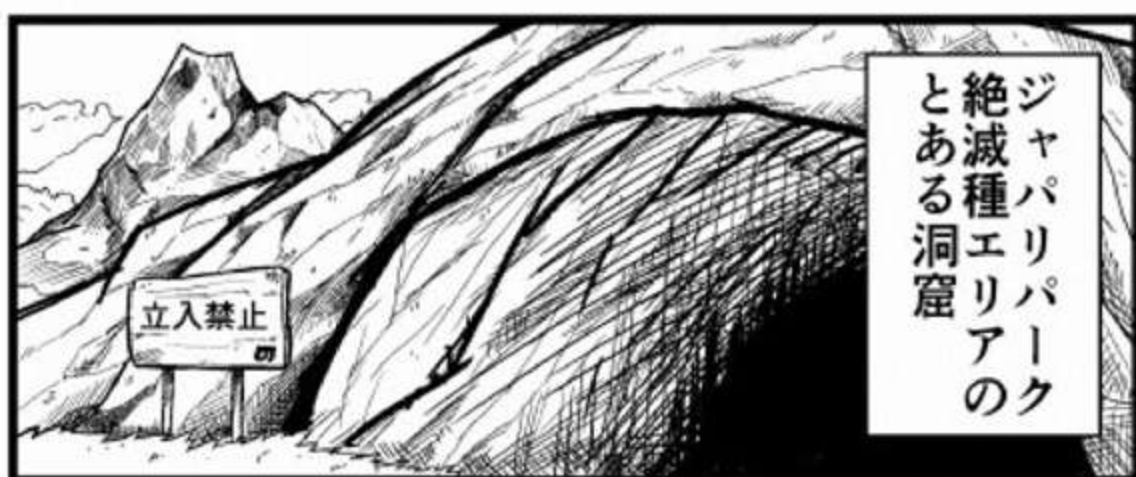


動きを合わせる♡
しいくいん君…♡



あああ…♡
イキます…♡





ジャパリパーク
絶滅種エリアの
とある洞窟

マンモスさん 対 密猟者!

モリマサカズ



こいつが…

おお…
ついに
見つけた!



マンモスの
フレンズか!!

立派な
長い牙に…

美しい
毛並み…!

素晴らしい!





な
なんて力だ
獵銃を
へし曲げやがった



ニハ



クソツ
バケモノめ!



あのおもちやと
同じように
しちやいましょうか



ひろりー!



失礼ですね
バケモノだなんて

そんなひどいこと
言うなら...







ホロロ



なにを休んでいるのですか

まだまだ
これからですよ…♡



パン

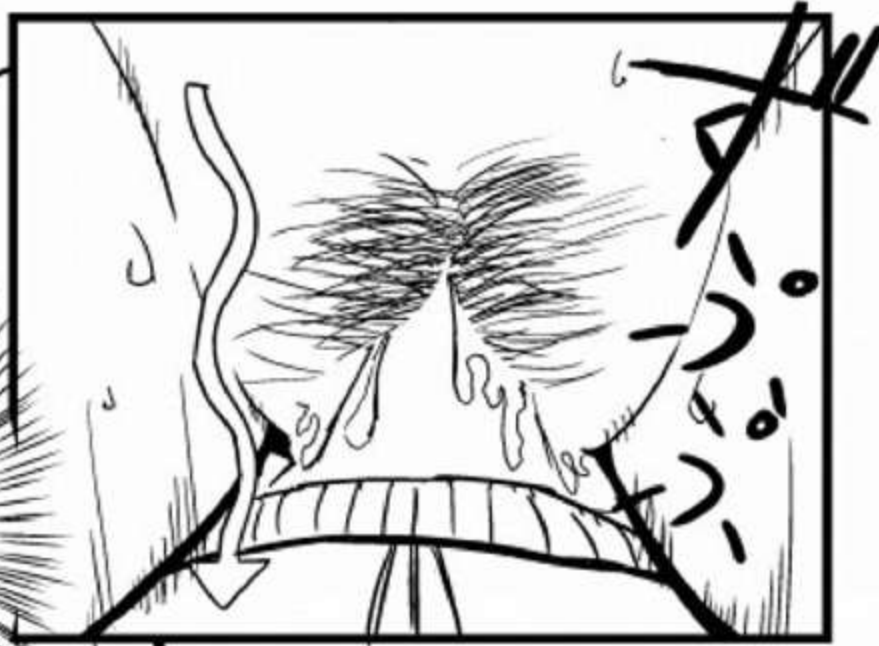
あはっ♡
これこれ♡

パン



それでは…

いただきます♡



ズッ

ぐっ
妻まじい
締めつけたッ!

ほらっ♡
もっともっと
腰ふって♡



END

フレンズ逆レイプ合同誌

～アニマルガールによる性的暴行被害記録集～

知ってるフレンズでも、変だなと思ったらついていかないようにしましょう。

飼育員失格

エロニアート

……僕は飼育員失格だ。

体の自由を奪われながら、唯一自由に働く頭に築き上げた後悔の防波堤は、下腹部から込み上がってくる快感の波を、理性が飲み込まれるギリギリの所で打ち消した。まだ耐えられる、だが、このまま続けば……

状況は最悪だ。目を閉じていても、彼女の愛液の匂いと、汗のぬめりと、生暖かい吐息と、激しい喘ぎ声が、感覚を驚掴みにして、諦めの境地へと引きずり込もうとしている。でも、僕は絶対に耐えきらなくちゃいけない。

今更何を言おうと後の祭りだけど、言い訳が許されるならば。

こんな事になった理由の一つは、僕の担当動物であるチーターは、発情期を見切るのが非常に難しい動物だったこと。

チーターの発情期は“期”とは名ばかりの偶然的なものだ。その上、鳴き声や体の変化などの外面的な兆候も一切見られない。過去、多くの動物園や保護施設がチーターの繁殖に失敗してきたのはこうした生理的な理由が大きい。だから他のアニマルガールにするように、予め彼女を僕から隔離する事は不可能だった。

だが、もう一つ思い当たる理由がある。チーターの繁殖が困難なもう一つの理由だ。

スペースの限られる動物園では一つの空間にチーターをつがいで入れてしまいがちだ、お互いが親密になれば交尾に至りやすくなるという思惑もあったのかもしれない。だが、その結果として、チーターがお互いを親友や兄弟のように思い込んでしまい、発情しても交尾に至らないケースが多発したのだ。単独行動が基本のチーターにとって、交尾相手はいつもそばにいる身近な存在なんかじゃない。

でも、皮肉な事に僕は……交尾を全く意図していないにもかかわらず、彼女を交尾へと導きかねないような振る舞いをしていた。

担当飼育員という立場でありながら、僕は彼女のそばにいつもいる身近な存在なんかでは決して無かった、むしろ、その逆だ。

元々の動物の性格故なのだろうか、チーターは僕に対して心を開いてくれなかった。僕が会いに来る度に「あんたなんて居なくても平気よ」「あんまり私に関わらないでちょうだい」と、高慢不遜な態度で冷たい言葉を言い放つ。サバンナエリアの一軒家で一人暮らしの気ままな生活を送る彼女は、おせっかい焼きが多い飼育員に対してあまりいい印象を抱いていなかったのかもしれない。

……。だけど、そうとは知らずに突然配属された僕は、チーターの言葉に深く傷ついてしまった。

フレンズに頼りにされて、フレンズと友好的関係を築く。そんな一流の飼育員に憧れていた——でも、僕は彼女に頼りになんてされてないんだ……。そう思い込んだ僕は、いつのまにかチーターと距離を置くようになってしまった。

本来ならば週一で健康診断をしなければいけないのに、僕は二週間に一度しか彼女の家を訪れなかった。食料品や消耗品を届けに行く事でさえ、面倒な雑務を肩代わりするという交換条件で同僚に頼みがちになっていた。

そんな僕の元に突然ヘルプコールが来た。向こうから連絡を入れてくる事なんて、これまで一度たりともなかったのに。本当にチーターなのか？ 半信半疑ながらも通話を繋ぐと、息苦しいくぐもった声が聞こえてくる。

「……なんだか……ハアッ……苦しい……落ち着かない……」
聞き取り辛かったものの、向こうから聞こえてくるのは間違いなくチーターの声だった。

「安静にして待ってて、すぐに行くから」
僕は寝間着として着ていた古ジャージ姿のまま急いで車に飛び乗り、彼女の住む家へ全速力で向かった。

車を停めて降りると、彼女のカラフルで陽気な家には全く似つかわしくない、激しい唸り声と深い息切れが途切れ途切れに聞こえてくる。

ただならぬ雰囲気気圧され、自分ひとりでは対処できるかどうか不安になった僕は、メガネ型のウェアラブルデバイスでパークの医療チームへ連絡を取りながら、静かに中へと入っていく。「もしもし……チーターの担当です……はい、ヘルプが入って……」

けた太ももの間から足を引き抜こうとした……だが、彼女の行動は僕の予想を上回る。

「ハア……ハア……ツツ……まだっ……奥が苦しい……っ！」
足はフェイントだった、左手を押さえつけていた彼女の右手が離れる、その予想外の解放に一瞬の油断が生じた。

ズシャアツツ！
呆然としている僕の左肩から右足まで、四本の平行線が一直線に走る。野生の爪はジャージを紙同然に切り裂き、下着を貫き、皮膚にまで至っていた。

「……ひっ……ひぎゃああっ！」

刻まれた溝を伝って赤い血が流れ出す。傷はそれほど深くなかったにせよ、その衝撃的な光景に僕は硬直した。着せ替え人形にされた僕は、彼女の長くてしなやかな手で乱暴に服を引き剥がされていく……上から下まで……マズい……僕の理性の預かり知らぬところで、彼女の求めている僕のそれは……しっかり勃ってしまった。

彼女の愛液の成分のせいなのか、激しい股間への刺激のせいなのか、それとも命の危険を感じた故の本能的なものなのか。それは分からない。

だが、一つだけ確かなのは、心のどこかで、僕を必要としないと言った彼女がこうして僕を求めているという事実。心地よさを感じているという事。

飼育員になって、フレンズの役に立ちたい。フレンズに頼られる立派な飼育員になりたい。そう思っていた自分を冷たく突き放したチーターが、他ならぬそのチーターが、こんな形で僕を求めてくれている……理性と裏腹に屹立するそれは、チーターに求められるためのモノだと、心の何処かでささやく声が聞こえた。

ヴェールを剥いて現れた、粘液まみれになってぬらぬらと月明かりを溶かす肉棒に、彼女は一瞬息を飲み、顔を真っ赤に染め、すぐにすらりとした体を絡ませながら僕の体に再び乗り掛かりはじめた。長い足は両足を抑え込むように絡み、両手は僕の腕を胴体に密着させる。そのまま少し腰を浮かせ、亀頭を自分の膣口に手を使う事無く押し付けた。僕の体中の全血液と全神経がその先端に向かって一刻を争うように集中し、その勢いで僕の陰茎はビクンと跳ねる。だが、充分に解されて柔軟になった小陰唇

はそれをやさしく受け止め、膣へ入っていく動きに変えてしまう。
「ハッ……ハッ……フ……ッ」

息を思いっきり吹き出した同時に、とうとう彼女の腰は重力に任されるがままに落ちてきて、僕自身をその中に受け入れていく。じゅぶっ……亀頭から広がっていく……ずりゅっ……雁首を包み込み……その形の変化を味わうように、ニチニチと膣口は変形する……

しかし、そのまま陰茎が飲み込まれると思った瞬間に彼女の体が再び痙攣した。なされるがままだった僕も、思わず彼女の顔を見た。止められない情動に顔は紅潮しきっているけれども、その額に浮き出ている汗は一瞬にして引いていき、耳は恐怖に倒れ、歯が擦り切れるほどに歯ぎしりをしながら、何かを抑え込むように、耐え忍ぶように

「い……痛い……っ……」

小さな声が漏れ出た。固く固く閉ざされた眼の端から、粘り気の全く無い体液がこぼれた。破瓜の痛みだ。きつとあそこからは鮮血が滴っているのだろうか。

「くっ……いっ……んっ……」

怯みながらも、彼女はなんとか無理やり腰を進め、僕のペニスは根本まで彼女の鞞に収まった。

「はあっ……はあっ……はあっ」

だが、何の達成感も喜びも、幸福も快楽も無かった。

ただ、彼女が痛みを感じた。それだけだった。

彼女の担当飼育員なのに、彼女から逃げて。

彼女の発情を見逃して。

コール一つで自分を頼ってくれているなどと思いがあって。

彼女に求められているなんて自分を正当化して。

彼女を苦しめた、彼女を傷つけた、彼女を泣かせた。



痛みに慣れてきたのか、それとも、痛みを紛らわそうとしているのか、チーターは腰を縦横無尽に動かし、僕の肉棒で膣壁を叩く、ヌチュツ！ズチュツ！ジュルツ！何度も何度も、快感を最も感じる部分を探り当てようと試行錯誤を繰り返す。

時折、処女膜の傷に染みるのか、喘ぎ声の間に眉と耳がピクピクと痺れたように痙攣する。それを確認する度に、この快楽が彼女の苦しみの上に成り立っている事を突き付けられる。

……自分は、飼育員失格だ、喜んでその烙印を受け入れよう。だけども……これでおしまいだとしても、最後まで僕はチーターの飼育員でありたい。こんな事になってしまったくせに、今更ながら、そう思った。

今、僕がチーターに出来ることは、彼女がこれ以上無駄に苦しまないようにするため、絶対に彼女の膈内に射精しないようにする事、それを置いて他はない。

アニマルガールとヒトとの間で子供が出来るのかどうかは分からない。だが、それが望まれないものであるのは間違いない。その上、子供に遺伝的な問題が起こる可能性が大いにある。彼女は自分の意思とは関係なく、破瓜とは比べ物にならない痛みに耐えて、お腹の子を墮す道しかない。

そもそも、欲求不満を本能的に快楽で埋めているだけの彼女が、この行為の結果を考えているとは思えない。

だから、この後の不安を、苦しみを、悲しみを取り除くために、どんなに苦しくても、どれほどの快楽が襲いかかろうとも、彼女の体の中に一滴たりとも精を入れてはならない。それが出来なければ、僕と彼女はもう二度と、飼育員とフレンズの関係には戻れないだろう。

落ち着いて深く息を吸い込み、脳に十分な酸素を送り込む。理性自体が十分に生きていなければ抑えが効かなくなる。覚悟を決めた。

「あっっ！ ……あんっ！ ……んんっ！ ……んんっ！ ……んんっ！ ……んんっ！」

チーターはとうとう一番感じるポイントを探り当てたようだ。腰をゆっくりと一回上下させるだけで、電撃が足の爪の先まで駆け巡り、唾液の溜まった口から驚きと喜びが混ざりあった声が飛び出る。

チーターは十秒ほどトロロンとした目でその余韻に浸っていたが、次の瞬間、その瞳は闇夜に煌々と光り、真剣そのものになった。本能のままにオスから精を搾り取る、そのための準備が整ったのだ。僕は乾いた口で息を飲む。

腰が動きだした。行為の最中でも接合部からはトロトロの汁が滔々と流れ出している。生まれてから今まで、この時のために貯蔵していたかのように。それ故、一回腰を動かす毎にスピードは加速していく。

「あんっ、あっ！んあん！あっ、あっ！ああああっ、ふあっ！ふあああっ！ふあああん！んあああんっ！」

快感と快感の間隔が短くなればなるほど、体は次から次へと津波のように襲い来る快感に翻弄される。それはチーターだけではなく僕も同じだ。

下の口が亀頭に吸い付いてくる快感。外気に冷やされた陰茎が、温かい膈へ再び入れられる時の温度差の快感。凸凹した膈壁にグリグリと押し付けられる尿道への刺激の快感。そして、引き抜かれる時のカリ裏が連続してひっかかる時の快感。四つの快感のロケーションが、彼女のピストンと共に回転数を増す。だが、まだそれらを理性的に理解しているうちは大丈夫だ。快感が来る前に心の準備が出来る。

彼女の本気の搾精運動が始まってから三分が経過した。一瞬でも気を許せば危ういが、勝機はある。パークの捕獲チームが集まり、ここに到着するまで十数分程度、僕とチーターの行為はもう十分以上続いている。残り二分弱を耐え忍べば……そう思った矢先、自分の太ももに違和感を覚えた。柔らかくてくすぐったい。敏感なデリケートゾーンを刺激するのは彼女の長い尻尾だった。くすぐられながらカリ裏に刺激が来る。撫でられながら亀頭を覆うような刺激が襲う。油断した瞬間に快感が来れば……おしまいだ。

僕は必死の抵抗をする。がちちりと固められた四肢はほとんど動かないが、かろうじて動くかかとと拳で床を打ち鳴らした、五感の鋭い動物にとって大きな音はストレス。この作戦は功を奏して、尻尾責めは収まった。

一安心したのも束の間、持久力に乏しいチーターはこれ以上の長期戦は敵しいと、最後の勝負に出た。彼女の大きな胸がムチツ……と押し付けられ、彼女の体がゆっくりと僕の体を包み込む。顔と顔が触れてしまいそうなるほど近づいて……端正な顔に赤く染まった頬、月明かりにきらめく金髪の下から覗く、困ったような瞳が劣情を誘った。ピストンは止まり、重なり合った体からチ

「ターの高い体温が伝わってきて僕を溶かす。性器に集中しすぎたあまりに体が油断していた。彼女の手が背中をさわさわさすつて僕をかき混ぜていく。ターもピンピンに勃起した乳首を僕の胸板になすり付けて、可愛らしい甘い声を漏らしている。僕とターの境界がどんどん曖昧になっていく。つながっているのは性器だけじゃなかった、肌が触れ合っている所すべてが繋がっていた。さっきまで敵しい表情で耐え忍んでいた僕も、いつのまにか口をぼかんと開けて、寝起きのような間の抜けた顔になっていた。そこに彼女の顔が近づいてくる。唾液を垂らしながら僕の口を、塞いだ。」

「ピチャッ。舌と舌が重なった。お互いの息が籠もって口の中を温める。ターのエッチな唾液がドロドロと流れ込んでくる。甘くて苦くて、とても興奮している事が分かる。ターも僕の唾液を掬い上げて飲み込む、ペチャ……ペチャ……ネコ科の器用な舌使用で。お互いの唾液を交換して飲み込むと、体の中もターと繋がってしまったような気がする。とても、とても心地いい。そう思った瞬間、彼女の膣がキュッと締め付けられて子宮が降りてきた。膣の中でも愛液とカウパーがグチョグチョに混ざり合っている。皮膚でも汗と汗がピチャピチャに混ざり合っている。ターのすべてが入り込んできても、僕がターに何を入れた精液を、溢れるほどいっぱい注ぎ込んであげても……きつと……だいじょうぶ……」

「パアン！」

部屋中に銃声が響いて、淫らな空気が切断された。

数秒置いて、彼女が僕から離れていく。

膣から陰茎が抜ける時のカリ裏への刺激で、僕は射精した。

「びゅっ！どびゅっっ！ぶびゅっっ！びゅるるっ！びゅっ！びゅっ！びゅっ！！」

「パンパンに膨れた竿から湧き出る噴水のように、真っ白な液体がそこらじゅうに巻き散らかされる。」

「う……っ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

力が完全に抜けた膣口が僕の亀頭に吸い付かなかつたのが幸いだった。もし、そうであつたならば、僕はターの中にありつたあの濃厚な精液をどくどくと注ぎ込んでしまつていただろう。

精液を出し尽くした僕は失神しかけていた。淫乱な二つの香りが混ざり合って立ち込める部屋に医療チームはドカドカと踏み込んで来て、僕の顔を覗き込む。

「……生きてますか？」

その言葉に反応する力もなかった。僕はそばで倒れたままぴくりとも動かなくなったターの背中を目の端に捉えると、粘り気の全く無い体液を流す事しか出来なかった。

★

★

★

あれから、一週間が過ぎた。

パークの病院に担ぎ込まれた僕は二、三日ほど昏睡していたらしいが、体の傷もすぐにふさがつたし、特に後遺症もなかった。で、今日、めでたく退院許可が降りることになった。

現場検証や鑑定結果から、今回の事態は“生理的特徴を考慮していないチェックリストで健康診断を行っていた”故の事故であるとの結論が出て、管理センターの健康診断作成担当部署が減給処分になった。一応ガワだけはしっかりと飼育員の義務を果たしていた僕の責任は問われなかった。

「……だけ……僕はこのまま飼育員を続けるべきなのだろうか……」

病院を後にして、自問自答しながら職員寮へと向かおうとしたその時、僕の前に音もなく飛び出した人影が立ちふさがった。長い金髪の背の高い彼女は、僕と目が会うなり少し頬を染めて、おどおどした様子で言葉を絞り出した。

「その……退院……おめでと……」

「あ……ありがとう。そっちも麻酔銃が効きすぎたって……体はもう大丈夫……？」

「そう僕が言うのと、ターは斑模様の手袋で真っ赤になった顔を隠しながら、尻尾を立てて怒る。」

「あ……もう！ 見れば分かるでしょ！ これ以上体の事は言わ」

ないでちょうだい！ 禁止！ 禁止！」

参ったな。と思いながらも、彼女が僕を気にかけてくれた事に、僕は少し救われた。下を向いた彼女はそのまま黙り込んでしまふかに思えたが、目を伏せながら。

「……それで……その……私の部屋。まだ……に……臭いが残ってるから……その……掃除しに来なさい……そのための飼育員……でしよっ！」

ただたどしく紡いだ言葉を言い切ると、チーターはすぐに踵を返して走り去る。その後姿を見ながら、まだこの仕事を続けてもいいのかもしれない。そう思った。

くおわりく

快速アンイン乗車記

ジャパリトロッコの人

プロローグ

こんな店を選ぶなんてサーバルには無理な芸当ね、なんて思
いながら真正面に置かれた特大フレンズサイズパフェをつつ
く。「しつかりものあんたが相談なんて珍しいわよね。正直、面
食らったわよ？」

特大フレンズサイズパフェを隔てて見えるタイリクオオカミの
顔はいつもと違って余裕がなさそうだった。ぎこちない世間話
に飽きた私は思わずそう言ってしまった。

「そうだね。どちらかというと、私もカラカルと一緒に相談を
受ける側だから。でもたまにはいいじゃないか、私が悩んだっ
て」

「なに、またイタリアオオカミのストーカー行為が酷くなって
るとか？」

「うーん、今のところは大丈夫かな」

「なによ、はっきりしないわねえ」

「カラカルは気づかないかあ」

一体何に気づいて欲しいのかとオオカミをじっと見てみると服
装に違和感がある。

あれ、この娘ってブラウスなんて着ていたかしら？ オオカ
ミのフレンズってどういうわけか露出の多い服のことが多いの
になんて、タテガミオオカミやホッキョクオオカミ、インドオ
オカミのフレンズを思い浮かべる。

「ブラウスのこと？ 似合っていると思うわよ、私は」

「正解。園長がプレゼントしてくれたんだ」

「あらあ、良かったじゃない。園長から服をもらった子なんて
聞いたこと無いわよ」

「うん、似合っているって言うてもらえたし、とっでもうれし
いんだけどね」

「なにか問題があるの？」

「その……園長の視線が変わっちゃったなって」
そう言ってオオカミは生々しい話を始めた。

「私、メスとしての自信を無くしちゃったんだ」

「どういうことよそれ」

「この体になってから、園長を含めいろんなヒトのオス
から熱い視線を向けられていたんだよね。だから私はメ
スとして割と自信があったんだ」

たしかにあなたには私よりも立派なものをお持ちだし、
見せつけるような恰好だったものね、と思わず煽りそう
になるがぐつとこらえる。

「でもブラウスを着るようになってからそういう視線を
向けられることがかなり減ってね。特に園長は私にだけ
ああい視線を向けてくれたのに、他の子と同じ園長とし
ての視線しか向けてくれなくなっちゃったんだ」

「そもそもなんだけど、私たちってそう言う目線で見ら
れていないような気がするのよね。園長との出会いって
ドラマチックというよりは冒険譚だし、そのなんという
か冒険の仲間として認識されていて、恋愛対象には入っ
てないんじゃないかなって。そうすると、園長が性的な
視線を向けるのに嫌悪感を抱いていたのも、ブラウスを
プレゼントしたのも納得が行く気がするのよね」

「じゃあそもそも私たちは土俵にも上がれていなかった
ってこと……？」

オオカミの耳と尻尾は力なく垂れ、打ちのめされたの
がはつきりと分かった。まあそりゃあそうよね、自分が
好意を抱いているのに相手にすらされてなかったなんて
ってオオカミにさらなる打撃を与えている場合じゃない
わ。何とかしないと。

「そうなるわね。でも希望を捨てるにはまだ早いわ。最
近じゃパークの職員の中にフレンズといい感じになって
る人がいるなんて話を聞くと、研究員のナイトなんてニ
ホンオオカミに手をだしたそうじゃない。なんでも酒の
席で同僚から煽られたときに『ああ、俺はホン（ニホン
オオカミ）を抱いたさ、何が悪い。今度結婚式を開いて
やるから祝ってくれよ』なんてぶちまけたそうだから。
まあこのカラカル様に任せなさい。なんとかして園長と
いい雰囲気になれる機会を作ってあげるわ。男なんてこ

つちから押し倒してキセイジジツ？ を作ってしまったえば
楽勝よ」

「うん、じゃあよろしく頼むよ」

うん、任せなさいといったもののどうしようかしら。
確か園長は今月末にキョウシュウちほいの視察があった
はず。視察のあとにサプライズで慰安旅行ということに
して……イリシマ温泉なんていいかもしれないわね。帰
りは快速アンインでも取ればいいかしら。とりあえず、
ミライさんに連絡を取ってどうにかスケジュールを調整
してもらわないとね。



ミライさんの取り計らいで唐突に始まった慰安旅行も、
あとはパークセントラルに帰るだけ。夕暮れ時、寂れた
駅舎で列車を待っている。何処か遠くから甲高い汽笛の
音が聞こえてきた。古ぼけた発車案内器が回転をはじめ、
快速アンイン、セントラル行きの表示で止まる。

そろそろ行くかなと、隣で船をこいでいるオオカミの頬
をつつく。

「起きてオオカミ。そろそろ列車が来るからホームに出
るよ」

「えっ？ あっ私ったら寝ていたのか」

オオカミの顔がポツと赤くなったのは寒さばかりではあ
るまい。ホームに上がると遠くにえんじ色の機関車が紺
の客車を従えてやって来た。

「あれは大丈夫なのかい？」

オオカミが指差す先は列車の最後尾。もくもくと白煙が
立ち上り後ろが見えないほどだった。

「あれは暖房用のスチームが噴き出しているだけだから
大丈夫だよ。もうスチームが必要なのは前の一両だけだ
から余ってしまったらいいんだらうね」

SLの忘れ形見ともいえるスチーム暖房も近頃ではめっ
きり見なくなってしまうものだなと思う。そして最後

尾の車両から勢いよく噴き出すスチームをみると寂しさ
を感じる。列車の編成が短くなり、後方の座席車がスチ
ームを必要としない新型車に代替わりした何よりの証拠
だったから。そう言えば私がここに来たときはまだ後ろ
の座席車も旧式で、冬場になると効きすぎたスチーム暖
房が暑かったなあと思いついた。回想に耽っているとホ
ームに列車が滑り込みキーという甲高いブレイキ音
をたてて停車した。

さて、一号車に乗ろうかとドアに向けて歩くとオオカ
ミが、本当にこれに乗るのかい、なんて言ってくる。色
褪せたボディは所々錆が浮いていて、車体の裾や窓の周
囲はシワがよってベコベコになっている。とても現役と
は思えない姿はまるで幽霊列車。後ろの座席車がピカピ
カの新型であるのも相まって確かに乗車は躊躇われる。
おまけに後ろの新型車両はドアが開いて蛍光灯の光がも
れているにもかかわらず、一号車のドアは閉ざされ薄暗
い。

「寝台車はこの一両だけだからね、さあいくよ」

A寝台という表示を出した薄暗い行灯の下にあるドアを
手で開けて車内へ入る。中は赤い絨毯が敷かれ、並んだ
座席には真っ白な枕カバーがかけられており、外観とは
裏腹にきちんと手入れされていることが窺えた。

思ったよりもきれいなんだね、と橙色の座席に座った
オオカミも驚いている。

「さすがは走るホテルか」

ブルートレインの走りであった20系客車と、ほぼ同じ設
計と言われるオロネフ10は違うなあとしみじみ思う。

「座席しかないし、これじゃあ走るロビーなんじゃない
かい？」

どうやらオオカミは寝台車に乗ったことがないらしい。

「あとでわかるから、お楽しみだよ」

納得がいけないというオオカミの顔を見てみると短く汽
笛がなって力強いディーゼルの音が聞こえてきた。わず
かな衝動と共に列車は加速を始め、温泉街をあとにした。

「本日はパーク鉄道、快速アンインをご利用いただきありがとうございます。車掌はセントラル車掌区、大神が勤めます。終点パークセントラルまでご案内いたします。列車は先頭から……」

変わった名前の車掌がいるものだなあと若い女性の声を聞き流す。駅を出て数分だというのに車窓から建物は消え、黄金色の大地と遠くには色づいた山並みが見えた。

列車はすっかり日の暮れた田園風景を駆け抜ける。

「只今、十九時を回りました。これより係りのものが寝具のセットに参ります。ご協力をお願い致します。」

いよいよか、先程の若い女性の声で案内があったので荷物を片付ける。戸惑っているオオカミの手を引き空いている隣の区画へと移るとちょうど車掌が現れた。

「車掌の大神と申します、切符を拝見しても宜しいですか？」

「あれ、ニホンオオカミ!?」

現れた人影にオオカミがひどく驚いた声をあげる。

たしかにやって来た車掌をよくよくみると怪しげに光る眼はヒトのそれではない。耳や尻尾も見当たらないし車掌の制服に身を包んでいるが、オオカミの言うようにどうもフレンズのようだった。

「切符はこれで。寝台のセットをお願いします」

はい、承知しましたとフレンズ車掌がきばきと寝台の組み立てを行っていく。

「ニホンオオカミったら車掌になつていたの？」

「そういうお姉さまだつて売れっ子漫画家でしょ？」

ヒトにとつてはわりと重労働と言われる寝台の展開もなんのその、手際よく座面が引き出されて下段の寝台を作ると、屋根の肩部に折り畳まれた上段の寝台をばたんと開き、リネン室から運んできた布団とシーツを敷いたらほぼ完成。仕上げに枕と掛け布団、スリッパ、浴衣を並べて遮光カーテンをつければ今宵の宿の完成である。

「はい、これでお仕舞い」

私たちの区画が終ると隣の区画の作業に取りかかる。

「私たち以外に乗っている人いないのに作業するの？」

「一応そういう規則なのかなあ？」

確かにパークの寝台列車は利用率がそれほど高くないけどいつもセットはしてあるなあと前の視察旅行で乗った寝台特急ほっかいを思い出す。あるときも車内は数組しかいなかったが、すべての座席がベットメイキングされた状態でホームに入ってきたなあと思う。

「まさかニホンオオカミが車掌だなんて驚いたよ」

そう言えば昨年辺りから希望するフレンズに就業させてみてはどうかという議論があつたなあと思い出す。

要件は

1、本人に十分な意欲があること。

2、十分な知識と技能を備えていること。

3、耳や尻尾を隠し毛皮を着替えてヒトに擬態することができること、だったと思う。

パーク外から来るお客様のなかにはフレンズに対する不信感、とまではいかないものの不安を抱いている人もいるのでやむを得ないことだった。いつか彼女たちが胸を張って職務に取り組めるような場所にしたい、ニホンオオカミをみて思わずそう思った。

「園長ったら聞いてるのかい？ まったく君はそうやって物思いに耽つたりして……なんだい？ 彼女に気があるのかい？」

なんていいながらオオカミがすり寄ってくる。

「そういう訳じゃないさ。ただ、ちよつとね」

そういうふうんと言つてつまらなそうにオオカミは離れた。左腕に押し付けられた柔らかなふくらみの感覚がしばらく消えずに残っていた。

そうこうするうちに端の区画まで寝台のセットが終わつたらしくニホンオオカミが戻ってきた。

「えつとお客様、只今より明朝のイシマ駅到着の十五分

前まで隣の車両との間を締め切らせていただいてもよろしいでしょうか」

「施錠とは珍しいですね」

寝台によく乗るんだなんていっていただけで園長でも初めてなのだろうか、園長は少しいぶかしげな顔をしていた。

「最近、寝台券をお持ちでないのにこちらの車両に移ってくださる方がいます……仕方がないので寝台セット後に締め切りとさせていただきます」

「はい、わかりました」

園長がそういった瞬間、車掌のニホンオオカミが一瞬私の方を見てニヤツと笑みを浮かべた。

ああ、カラカルが言っていた最後の策とはこれのことかと妙に納得した。

「お手洗いの設備と洗面台は車両の前後にそれぞれ一カ所ずつ、喫煙室はこの車両の前方にございますのでお使いください。それでは良い旅を」

車掌のニホンオオカミが出ていくと車内は再び二人だけの世界となった。

◇

◇

◇

鋼製の重たい貫通扉に施錠をして後方の車両へ戻ると、デッキに追いかけて組のメンツが勢ぞろいしていた。

「ニホンオオカミ、今日に限ってわざわざ施錠するなんてどういう見ですの!? これではタイリクお姉さまがああ男の毒牙につ!!」

「園長さんがオオカミに食べられちゃうよ」

「しーっ。みんな静かに。一応は施錠することになってるのよ。普段はかぎが壊れていてかけられないだけだ。

そもそも施錠するようになったのはあなたたち追っかけ組が園長の寝顔を見ようと侵入してくるからなんだからね。反省してなさい」

寝台車への扉が閉ざされ、車掌のニホンオオカミが後方の車両へ消えると、二号車の車内はすっかりお通夜ムードとなった。

「園長がオオカミのものに」

「もう僕、一緒にゲームできないのかな」

「ああ、お姉さまがけがされてしまう」

「うっ、園長さん……ずっと一緒にいるって約束したのに」

あまりにもどんよりとした空気に同情しそうになったけど、職務だからと強い意志をもって後方の車両へと向かった。

●

●

●

二人だけなんだし、せっかくだから浴衣に着替えて乾杯でもしようかというところ、オオカミはいきなり毛皮というか服を脱ごうとした。慌てて外に出ると至極残念そうに、園長なら見てもいいのになんていっているような気がしたが無視することにした。着替えが終わったら呼んでくれ、そうぶつきらぼうに言って上段寝台に上り私も浴衣へ着替えた。

着替え終わったから戻ってきて、とオオカミに呼ばれたので下段へ戻るといつの間に出してきたのか酒瓶とお猪口を持ったオオカミがいた。

「白いお猪口は園長の分、青いほうが私のさ。一杯やろう」

トクトクツと小気味良い音がして透明な液体がそれぞれのお猪口に注がれた。

「お猪口にしては随分と大きいね」

渡されたお猪口は小さな湯飲みといった方がよいぐらいの大きさがあつた。八分目までしか注がれていないとはいえ結構な量だつた。

「園長は日本酒が好きで結構強いと聞いていたからね。つまみはこれね」

オオカミが指さす先には貝紐やチータラの乗った紙皿があつた。

「じゃあ、この旅に乾杯」

口に含むとほのかな甘みと苦味の混ざった複雑な味わいがいっぱい広がるが、ちよつと葉臭いような気がする。かすかな違和感を抱いたが、そういうお酒なのだろうとさして気に留めなかった。しかしお猪口の半分を飲み干したころ異変が訪れた。急に眠くなってきたなあ。このお酒まわるの早すぎやしないか？

「オオカミ、いったいどれだけ強いお酒を……」

「効いていないのかとびっくりしたよ。ようやく効いてきたみたいだね。いまはおやすみ、園長」

嬉しそうにそう言ったオオカミの顔はまさに捕食者のそれだった。

♡

♡

♡

倦怠感と全身が熱くなる感覚のなかあそこがムクムクと大きくなっていくのを感じる。目を覚ますとどういかわけか勃起した皮かぶりのペニスにさらされていた。

園長、めざめはどうだい？消灯された闇の中に浮かぶ目にハッとする。耀く両の眼はまさに獲物を狙う肉食獣の目だった。

「オオカミ、一体何を……」

「夜のかりごっこさ。私はオオカミ、園長は獲物のシカ」なるほどマウントを取られ、あられもない姿を晒す様は確かに狩られた獲物のようだ。なんて余計なことを考えている場合ではない。目覚めてから手足はしびれ、わずかにしか動かないのだ。

「レンズを怖いと思ったのは初めてのことだった。」

「そんな顔をしないでくれよ」

おどけたようにオオカミが言う。きつと捕食者の眼差しに怯えた私はひどい顔をしていたのだろう。

「こうでもしないと園長は逃げてしまうだろう？ だからコブラに協力してもらったんだ」

体が動かさないのはそのせいかな。少しだけホッとす。あの娘なら人を傷つけるようなものを渡したりはしない

だろう。

「さて、続きをさせてもらおうよ」

「続きって、まさか」

「私は園長との子供がほしいんだ。それにここは満更でもないみたいじゃないか」

ガチガチに勃起していることを指摘されるとなんとも虚しいが、園長という立場からレンズに手を出すというのは避けたかった。

「落ち着こう、オオカミ。君はただ発情しているだけだ。」

本能が雄を求めて、たまたま近くに居たのが私だったというだけだ。だから考え直そうな、ほら」

必死すぎて何を言っているのか自分でも怪しい気がしたが、ともかくオオカミを説得しないと、と焦っていた。

「園長ったら面白いことを言うね。私はけものさ。本能にしたがって何が悪いんだい？迷ったら本能に従う。当たり前のことさ」

ああ、これはもう説得は諦めた方が良さそうだ。いくらオオカミは頭がよくて弁がたつとはいえ、レンズに論破されるなんて余裕がない証拠だなと自嘲気味に思う。

甘ったるい発情した雌の匂いについて私の理性も降参した。

「降参だよ。ただ……オオカミ、こんな場所で初めてを

迎えていいのかい？ それに私は体がうまく動かせないから最高の夜になるとは思えないのだけど」

「みんなが用意してくれた最高の場所だからね。あと園長の体のことは折り込み済みだよ」

「なら仕方ない」

すこしでも説得材料にならないかと思っではみたものの全くの無駄だった。彼女の仲間は優秀だ。

「さて、これから園長は私に食べられて、私のものになるわけだが、なにか言い残すことはあるかい？」

「オオカミ、君に言わないといけないことがある。セントラルで助けてもらったあの日からずっと……」

私のことばは急接近してきたオオカミの唇に遮られた。「園長、気持ちはとてもうれしいけど、君がそれを言っ

てはいけない。園長は私に襲われて仕方なく関係を持つてしまったんだ。後ろ指を指されるのは私一人で充分なんだよ」

「どうしてそこまで」

「どうしてって、まあ私が君にできる数少ないことのひとつだからだよ。園長という立場上、何かしら重大なきっかけがなければ誰かをひいきにしたりしてはいけないだろう？」

オオカミの言うことは最もであったが、それでも納得はできなかった。

「納得できないって顔だね。園長が関わったフレンズは大抵君に好意を寄せているんだ。それはわかるだろう？なかでもキタキツネ、たぬき、コモドドラゴン、サーバル、オイナリサマ、それから私……抱いていたのはlikeじゃなくてloveだったんだ。最も園長がイヌ科、もつと言えばキツネ属とイヌ属が好みだなんてことはフレンズ界限だと周知の事実だったけど。こんな話はお仕舞いにしよう。私がいながら別のメスのことをかんがえるなんて悪い子にはお仕置きだよ」

ニヤリと笑ったオオカミはたつぷりと唾液で濡らした手でペニスを扱きながら乳首をチロチロと舐め始めた。

「普通、ヒトのオスは乳首では感じないそうだけど、こう言うことをすると乳首でも感じる変態さんになってしまいうらいね。これで園長も変態さんの仲間入りかな？」

「おっオオカミももうっ」

「おっと、まだ出してはダメだよ。勿体無いからね」
そういうとオオカミは手の動きを止めて起き上がり、見せつける様に自分の秘所を弄り始めた。クチャクチャという卑猥な水音とバサバサと音がしそうなぐらい激しく振られた尻尾がオオカミの興奮度合いの高さを物語っていた。

そろそろ頃合いかな、そういうとオオカミは自慰に耽っていた右手の人差し指を割れ目から抜き、ガバツと覆い被さるような姿勢をとった。顔のすぐ横につかれた右

手からは甘い匂いが漂ってくる。そしてオオカミはトロトロになった秘所をピタリとあてがった。裸にされて少し寒いぐらいなのに亀頭にはねっとりとした熱が伝わってくる。まだ素股状態なのに興奮が収まらない。思わずペニスからビクツビクツと反応し、亀頭がこすれてはオオカミから甘い吐息が漏れる。

「さあ、これから園長のここを頂いてしまおうよ。ほら、ガブリっ！」

ひくつく膣に私のペニスが呑み込まれていくのを感じた。

「うっ、これは、なかなかっ」
よく引き締まった下半身のなせる技か、オオカミのマンコは熱く、子種を搾り取らんとギュウギュウと締め付けてくる。

「オオカミ、大丈夫かい？きついなら休んでも」

私の言葉を遮るようにオオカミはいきなりガンガンと打ち付けるように腰を振り始めた。はじめこそぎこちなく無理に体を動かしているという風だったが、徐々に感じてきているのか動きがなめらかに、そして大胆になってきた。

「園長、園長っ！君も気持ちいいだろっ？顔をこんな風にとろけさせて私の奥を突いているんだから気持ちよくないわけがない！そうだろっ！」

髪を振り乱しながら言うオオカミは淫らで、美しかった。奥に達する度に亀頭が強く吸われているのかと錯覚を受ける。あまりの気持ちよさに昇天しそうになるがゴムもない今、さすがにこのまま中に出すのは避けたかった。

「オオカミ、考え直そう、中に出すのはっ！」

「えっ、園長は私の夫になるんだ。だから何の問題もないっ！」

オオカミはいっそう激しく腰を振り、とうとう限界が訪れた。

「うっ、もうっ！」

「園長っ、一緒にっ！」

オオカミがガクガクと震え、奥がギュッと締まるなかドピュツドピュツと勢いよく精が放たれていく。

ああ。とうとうやってしまった。形はどうであれフレンズに手を出し、避妊もしなかったのだ。辞職は避けられないだろう。

「浮かない顔をしているね、ちよつと傷つくよ」

正気に戻ったらしいオオカミは不機嫌そうに言いながら、すっかり硬さを失ったペニスを引き抜いた。膣口からは白濁液が垂れ自らの罪を見せつけられているようだった。「いや、こんなことをしてしまったからには園長という立場ではもういられないなって」

「そんなことを心配していたのかい？」

「そんなことって」

もしもスキヤンダルにでもなったらせつかく復興したパークのイメーჯダウンに繋がるし、どこかの遊園地は経営者の不祥事がきっかけで閉園に追い込まれたなど悪い想像ばかりが広がっていく。

「パーク復興の立役者にそんな無下な扱いはしないさ。

それにフレンズと出来ちゃってる職員は君が思っているよりも多いんだよ。園長がフレンズとカップルになって何が悪いんだい？」

「ありがたい、ちゃんと考えてくれたんだね」

「当然さ。君のパートナーだからね。ところで、その…：わるいんだけど、まだやれるよね？」

「えっ？」

「おとといの晩も昨日の晩も園長は疲れているだろうと、思っただけで我慢していたんだ。だから」

「わかったよ。まあ起つかどうかはオオカミの腕次第だけだね」

この動かない体ではどのみち選択肢なんてないじゃないか。ならせめて楽しまないと、とオオカミを煽ることにした。

「ついさっきまで童貞だった園長が一体どこまで耐えられるんだい？まあいいさ。はじめよう」

唾液の多い口がへなへなにしぼんだペニスに襲い掛かる。

「ぶはあ。あんなに硬くて狂暴だったのにこんなにかわいらしくなっちゃってしまっただね。でもこれではらちが明かないなあ」

そういうとオオカミは唾液でべしよべしよにした右手の人差し指を私の肛門にあてがい、つんつんと侵入を試み始めた。

「うっ、そんなところまで攻めてくるなんて容赦ないね」

「煽ってきた園長がいけないんだからね。おっ、すこし膨らんできたかな。感じてくれているの、うれしいよ」力を失ったはずの男根は徐々に元の硬さを取り戻していた。夜のかりごっこはまだまだ終わらない。

…

…

…

エピローグ

さて、二人はどうなったのかしらね。そろそろニホンオオカミも乗務が終わって明けてしょうから、かけてみようかしらと電話を手を取った。

「おっ繋がったわね。お疲れ様、ニホンオオカミ」

「カラカルもお疲れ様」

「全くよ。あの意気地無しのために宿と切符の手配までしてあげたんだから。懐は寂しいし、ちよつとは感謝してほしいものね」

「あはは、あれ、パークの経費にしておいたから安心して」

「えっ、本当に？」

「園長の慰安旅行の費用を立て替えているって申請しておいたから多分平気。キャンセルした寝台車の払い戻し手数料もバカにならないだろうからそれもつけといたよ」

「恩に着るわ、ニホンオオカミ。二十六席ともなると払い戻し手数料も笑えないから」

「三千九百ジャパリコインだもんね」

「まったく、出発直前だと額面の三割だなんて聞いてなかったから胆が冷えたわよ…。ところでこんな無茶ぶ

りをした甲斐は有ったのかしら？」

「ああ……えーっと、うん」

「何よ、歯切れが悪いわね」

「寝具の汚損料金が発生するぐらいには、かな」

「いったい何があったのよ？」

「深夜に見回りに行ったんだけどね……」

◇ ◇ ◇

さすがに座席車の子達も寝てるんだね。まあ寝台車に入れない以上起きていても仕方ないからね。毛布ぐらひはサービスしてあげるから良い夢を。JPRの文字を崩したデザインマークがプリントされた毛布を一人一人に掛ける。さて問題は寝台車の二人だけど、いったいどうなっているのかな？さすがにいたして最中にだつたらどうしようかと思うけど車掌だから見回りしないと一号車へ向かう。

音をたてないように静に忍び錠を開け隣の車に移る。そーっと客室とデッキを隔てるドアを開けてみたけど嬌声や座席のスプリングが軋む音が聞こえてくるなんてことはなくて拍子抜け。耳を澄ませてもグオーという発電機の低いなり声とリズムカルな轍の音が小さく聞こえるだけだった。

あれれ、カラカルの努力は無駄になっちゃったのかな？なんて思いながら客室を進むと、なんとも言えない雄の匂いと甘ったるい発情した雌の匂いが漂ってきたの。タイリクお姉さま、おめでとうございます、思わずそう思って園長たちのいるはずの二段寝台を覗くと、そこには汗やらナニやらでグショグショになった寝具だけがあつた。えっ？二人はどこに思つて耳を澄ませてみれば穏やかな寝息が二つ上段の方から聞こえた。そーっとカーテンを開けてみると園長に抱き寄せられて幸せそうな寝顔をしているタイリクお姉さまの姿が見えたの。作戦はこれにて終了というわけでそつとカーテンを閉めて、一号車の貫通扉を施錠した後最後尾の車掌室に戻ったわ。

翌朝、車内放送を入れた後に寝台の解体のために一号車へ向かったけど、その時は二人ともきちんとしていて、どうやったのか匂いもごまかしていたね。えっ二人はどこに座っていたのかつて？夜に汚した寝具はたんで上段へのせてしまつて、勝手に下段の椅子を戻していてね。園長は寝台の乗車歴が長いから割と勝手に寝台を解体しちゃうんだよね。まあおかげで私の作業が上段寝台をたたむだけで済んだからいいんだけど。

◆ ◆ ◆

ニホンオオカミの話を知っているとどういうわけか胸がざわついて、受話器をきつく握りしめていた。

「そつ、そつか。私の努力は無駄にならなかつたわけね」

「カラカル？」

「あれっ、おかしいわね。何だか目がショボショボしちゃつて……」

「カラカル、こんなときぐらい自分に素直になつたら？

悔しいなら、寂しいなら泣いたつていいんだよ？」

電話越しだけどカラカルの気持ちは充分に伝わってきた。

「わたしたつたらなにやつてるんだろ。いいこぶつてお姉様ぶつて……私だつて園長と一緒にいたかつたはずなのに」

「私はカラカルのそう言うところ、嫌いじゃないよ」

「ありがとうね、ニホンオオカミ」

終

二匹と一人

スカールレッドG

白い吐息、肌を突き抜けるような寒さを帯びて身に染みる。今日この頃。私は外に出るのが億劫になりつつも、予め電気自動車のエンジンを始動させると一旦外に出る。まだこの時点では車の内部が温かくならないので、車を発進させても冷たさが身に染みてしまう。寒がりの私は車内が凍てつくのがとても苦手なのでヒーターで車の中を十分間ほど温めてから車に乗り込むようにしている。荷台に荷物を携えて今日もジャパリパークを駆け巡るパーク職員：正確には施設保安要員として働いている。

今現在働いているジャパリパーク：かつて隕石群によってもたらされた世界規模の自然災害から数十年が経過した後、国家再生プロジェクトの一つとして建設された遊園地などの娯楽施設と、生物学を中心とする研究機関を兼ね備えた島全体の事を示す。

お気に入りの洋楽をセツトして車を運転しながら隕石の事について思い出す：嫌でも忘れられない記憶だ。あの隕石落下による災害は世界各地に大きな傷跡を世界中に残した。成層圏でも燃え尽きずに地表に降下した隕石群の中でも大都市圏に落下した隕石は、一世紀近く前にヒロシマ・ナガサキに投下された原爆と同規模の破壊力を兼ね備えていた。

その破壊力を持った隕石が世界中の都市部だけで八十箇所以上に膨れ上がり、中には政府首脳が隕石によって丸ごと壊滅して国家相続が不可能になった国まであった。この日本も例外ではなかった。首都の一角だったシナガワに隕石の一部が落下、高層ビル群が軒並み隕石の衝撃によって押し倒され、街は爆風と粉塵によって地獄と化した。隕石が落下した日：私の両親はシナガワの会社に勤めていた。隕石が落ちてから両親は未だに見つかっていない。

い。今では両親の想いでアルバムと断片的な記憶しか思い出せない。

ただあの日以来、スーパーの食品棚は空になり、配給制度が復活したことまでは覚えていた。経済的、政治的にも隕石の落下によって治安が回復するまでに数年を要した。そして隕石被害からの復興の最中驚くべきニュースが飛び込んできた。

列島の片隅にあるキョウシュウ地方を中心に動物が人の姿に変身するアニマルガールズ現象が発生、地球に降下した隕石群の中から、サンドスターなる物質が化石や生きていた動物に付着すると、その動物が人間：それも女性の姿に変わる現象のことをアニマルガールズ現象といっからか呼ぶようになった。

隕石災害被災者向けの奨学金制度を利用して大学を卒業した私は、今年から国家公務員としてジャパリパークの施設保安要員として働いて現在に至る：というわけだ。

ここはサンドスターの影響もあってか、六月初旬だというのに気温が7度以下と寒い気候となっている。仕事を早く終えてから温暖な地域に行きたいものだ。愚痴りながら施設に向かっていくと、突然車の電気系統のメーターが赤く点滅し始めた。

寒さを堪えて車の外に出てボンネットを開けてみると、電気自動車のエンジンの配線が故障してしまったのだ。車の荷台に積んでいる荷物の中から工具を使ってエンジンを見てみるが、配線が特殊な部品を使っているのだからここで直すのは無理のようだ。部品があるのはこの場所から十数キロ離れた場所にある自動車整備所だ。運が悪いか、ここに、スマートフォンで電源は充電切れで雨が降り始めて休む。自動車整備所の日程表を確認してみても、今日には休みだ。つまり現在自動車整備所に行っても誰もいないのだ。

八方塞がりになってしまい頭を抱えていると、どこからか視線を感じるようになる。辺りを見回すと視線の正体が判明する。ハシビロコウとチベットスナギツネ：私

たちの間ではハシビロとチベスナの愛称で呼ばれている。フレンズが二人揃って、私を見つめていたのだ。私がエンジンの配線に苦戦しているとハシビロが心配そうな顔をして声を掛けてきた。

「どうしたの？何かあったの？」

「ああ、ちよっと車が故障してしまっただけ。この辺で休憩できる場所はないかな？」

「それなら、すぐそこに仮設休憩所があるよ……」
チベスナが指さす先にはプレハブの休憩所が設置されていた。あそこなら電話線が敷かれていて、巡回予定だった施設に連絡を入れることができる。もう夕暮れだし雨足も強まっている……どのみち引き返すにしても長い距離になってしまっているので、今日はここで寝泊まりするしかないようだ。

私はプレハブの仮設休憩所の電話機から巡回先の事務の人に連絡を取って、今日はこの仮設休憩所で一晩明かすことになった。

「えっ？君たちもここで泊まりたいのかい？」

仮設休憩所に備蓄されているカッププラーメンにお湯を入れようとした時に、ハシビロとチベスナがこの仮設休憩所で寝泊まりしたいと申し出たのだ。聞けば、ハシビロが寒い場所が苦手なようで、屋外で寝泊まりするのは無理のようだ。

チベスナは寒い場所でも平気なようだが、それでも友人であるハシビロが寒がっているのが忍びないと感じたのか、私に仮設休憩所で寝泊まりしてもいいかと言ってきたのだ。

「ハシビロちゃんも寒がっているの……今日だけでもいいからこの場所に泊めさせてもらえない？」

殆ど人間の少女と変わらない姿をしている彼女達がこうして申し出ているのだ、フレンズを助けるのはパークに勤務している職員の務めだ。私はチベスナの申し出を快諾して仮設休憩所で寝泊まりすることをパーク職員の権限を使って許可したのだ。

別にやましい事なんて考えていない。以前、フレンズに対して性的な行為をした様子を動画共有サイトに投稿した職員が極めて不適切な行為をしたとして懲戒免職処分となった事が起きた。

その事件以来、パーク職員全員に対してフレンズ化した動物との性的な関係を持つことを固く禁じる規則が出来上がった。

ただ、フレンズ化した動物は果たして“人間”と同じ扱いになるのかはまだ法整備が進められていないので、法的観点からしたらグレーゾーンである。

なので、懲戒免職処分になった職員は、それ以上の罪に問われることは無かったのだ。社会的制裁は十分に受けたのだろうが、いずれにせよ……フレンズとの性的関係はタブーとなっている。それを肝に銘じて職員として行動しなければならぬ。

それに今は雨が強く降っている、このまま外に出しておくのも可哀想だ。今日ぐらい仮設休憩所で泊めさせてもバチは当たらないさ。

仮設休憩所に設置されているポッドに水を入れる、ポッドを無機質な電気コードに差し込む、太陽光発電で充電された電力を使って沸かしてからカッププラーメンにお湯を入れて待つこと三分でチキン風味の香りが部屋に立ち込める。

蓋を開けて私はカッププラーメンを食べようとしたが、ハシビロとチベスナにまじまじと視線を浴びることになる。もしかしたらじゃばりまんだけではお腹が空くかもしれない、私は二人にカッププラーメンを食べたいか尋ねた。

「ハシビロとチベスナ……良かったらちよっと食べてみるか？」

「えっ……いいの？」

「うん、今日は寒いし……一口だけなら特別に良いよ。あ、勿論、他のフレンズには内緒だよ？」

「それじゃあ……一口……」

最初にハシビロにカップラーメンを渡す、箸の使い方が分からないようだったので、箸を私が持って彼女の口の中に麺をゆつくりと移す。熱々の麺をフーツ、フーツと冷ましてから口の中に麺が入っていく、口に入った麺を何度も噛みしめてからゴクンと飲み込んだ。

「お、美味しい！」

嬉しそうにハシビロが呟いた。普段はじゃぱりまんを食べているので、普段食べている物よりも変わった味のカップラーメンを食べることに対して少し心配したが、どうやら大丈夫そうだ。

「それはよかった：次はチベスナだね」

「うん、じゃあ：一口頂くね」

チベスナはカップラーメンの淵に口を付けて麺とスープを一口食した。麺とスープが美味しかったのだろう、ハシビロと同じように笑みを浮かべてカップラーメンを一口いただいて喜んだ。

「美味しい：普段食べているじゃぱりまんとは変わった味：また食べてみたい！」

「そうだね、ただこれを食べ続けていたら身体に悪いからね、ほどほどに食べるのが一番だよ」

残りのカップラーメンを啜りながら私は二人が喜んでるのを見て、安心した。実の所、あまりフレンズとは喋る機会が無いので、二人の反応が拒絶していたらどうしようかと思っていたが、想像していたよりも彼女達はフレンジリーな性格のようだ。ジッと見つめている感じなので、少しだけ怖いと思ってしまったが、話を進めてみたらそんなことは無かった。私の杞憂で済んでよかった。

さて、腹ごしらえも済んだことだし、私はシャワー室でゆつくり温水を浴びてくることにしよう。ハシビロとチベスナは部屋で温かい紅茶を堪能している。その間にシャワー室を借りて疲れを少しでも癒そう。

◇：

私は今：シャワー室で温かい湯を浴びる。一日の労働の火照りが温水と共に流れ出ていくようだ。今日は最後の最後で色々不運が重なってしまった。あのようなたラブルが連続して起きることは御免だ。数日前に誰かが使っていたと思われるシャンプーがあったので、お借りしてシャンプーを泡立てて髪の毛に絡ませる。このシャンプーのように、汚れを何もかも洗い流してくれたら苦労しない。

：が、そんな便利な道具なんてありはしない。シャンプーでしっかり髪の毛を洗い流してから次はボディソープを付けて身体周りを洗おうとした時だった。

ガチャ：

シャワー室のドアが開いたのだ。ドアが開いた音で振り返ると、ハシビロとチベスナの二人が私のほうに近づいてくる：それ以上はいけない！二人ともシャワーで私が遊んでいるのかと思っているのかもしれない。慌てて私は片手で股間をタオルで隠して二人に言った。

「ハシビロ、チベスナ！今は来ちゃだめだよ！」

優しく、制止しようと言ったのだが、二人とも歩くのを止めない。そればかりか、私がシャワーを浴びている最中に堂々と私の目と鼻の先まで近寄ってきたのだ。ハシビロとチベスナ：二人は顔からお腹の辺りまで一通り鼻で嗅ぐと、ゆつくりと身体を密着させてきたのだ。

「お、おいおい二人とも！そ、そんなにくっついちゃだめだ！」

「でも：この臭いを嗅ぐと：なんだか身体が熱くなっちゃうの：分かってくれませんか？」

「私：あなたともっと仲良くなりたいの：だから：もっとくっつかせて！」

二人とも発情期になっていたのか？発情期を迎えたフレンズは人に対して攻撃的になるか、誘惑をしてくる場合があるか？聞いたことがあるが：まさか：私の場合は：後者なのか？

フレンズは人よりも力がある：今、下手に抵抗したら本気になったハシビロとチベスナに襲われてしまうだろう。

だから、無暗に抵抗してはいけない……。二人の気が済むまで身体を密着させるしかないのだ。

ハシビロとチベスナは服を着たまま身体を密着させてくる、流れ出るシャワーの粒が彼女達の服を濡らして身体ラインを映しだしていく……。発情期ということも相まってか、二人の豊満な胸から乳首が浮かび上がってきている。

ブラジャーを身に付けていない女性は小数点以下だろう、そう……。これが現実という事を忘れない。逃げたいと思うが、二人の身体の温かさが服に密着して動けないのだ。

シャワーで濡れていく服……。そして豊満な胸まで身体に押し付けられてしまうと、身体の生理的現象によって下半身の主砲がゆっくと起き上がってしまう。主砲の傾斜角度を戻そうと試みるも、甘い吐息をかけてくる二人には叶わなかった。

「あつ……」

「ねえ……ここ……どんどん大きくなってきているよ……」
ハシビロが興味深く下半身のほうを見つめている。そしてゆっくと私の下半身から突起しはじめているペニスをゆっくと握り始める。

「は、ハシビロ！お願い！止めて！お願いだから……！」
「でも……こうして私の手で握るだけで……握っているこの部分がこんなにも大きくなるの？……何か隠している……チベスナちゃん、後ろからもっとぎゅっぎゅっ……っしてあげて、私はこの部分がどうなるかもっと知りたいな……」

ハシビロの黒い手袋がゆっくと私のペニスを弄りまわしはじめる。亀頭の部分をなぞるようにゆっくと触れながら、それでも強すぎず、優しくなぞるようにペニス全体に行き届いていく、身体の血液が沸騰するように、バクバクとこみ上げてくる。

性行為をやるつもりではない筈だ。だが、すでに私のペニスはガチガチに硬くなっており、性感も敏感になり始めている。そして、後ろで私を拘束しているチベスナは、ゆっくと顔を近づけて私とキスをし始めた。

「はうっ……んちゅっ……んんっちゅ……」

「あつ、チベスナ……んん……」
舌と舌が擦れ合う、恋人でもない……相手はフレンズだ、だけど、強く抱き着かれていた拘束を解くのは無理だ。フレンズは人間の何倍もの力を持っている。しつかりときつく抱き着かれていたので強引にこの場から逃げるのは無理だ。

チベスナの熱烈なキスが口の中で蕩けていく。ゾクゾクと全身から沸き上がる興奮……。こんなにも震えあがる興奮は一体……？ハシビロの黒い手袋がしゅこしゅこ音を立てながら勃起してしまっているペニスを弄られている。

興奮したハシビロによって手袋を使った手コキプレイでペニスを彼女に奪われていく……。そして、後ろからは胸を密着させたチベスナが耳元で甘い吐息をしながら腹のあたりを両手で後ろから抱きしめていく。

「あつ、二人とも……あつ……だめだ……よお……」

「ここ……どんどん大きくなっていくよ……ハシビロちゃん、なんだか興奮してきているみたいだよ」
「そうね……じゃあ、もっとここを調べてみるね……」

ハシビロはさらに手袋を使って私のペニスを強く弄り始める。さつきよりも亀頭と裏筋を強く刺激していくので、私のペニスが完全に勃起してしまった。だめだ……二人の攻勢には耐えられない……我慢できない……。チベスナが甘く接吻をしながら身体を押し付けてくる。

「あつ、で……で……うっ……！」
最初の興奮が絶頂に達した時、抑え込んでいたモノが一気に下半身の野砲から一斉に放たれた。白くて、イカのような臭いでベタベタする白濁液がハシビロの服に思いつ切り飛び散った。情けないことだが、ギンギンに硬くなっていたペニスからはオナ禁をしていたこともあってか、予想よりも多くの精液が塊のようにどくどくとハシビロのグレーの服の上に拡散している。

「すっごい……これが……オスの臭い……んっ……」

手に握っていたペニスから垂れている精液をハシビロは掬って舐め始める。黒の手袋は精液で白く染め上がっているというのに、その臭いに興奮しているのか、何度も何度もしゃぶるように手袋に付いていた精液を舐めて、さらに服に飛び散った精液をかき集めて舐め終えると、鋭い目つきのまま興奮した状態で語った。

「苦いけど：どろどろしていて：すごく：心が燃え上がるような気持ちになる：チベスナちゃんもやってみる？」

「：うん、やってみよう！」

「それじゃあ：今度は私がぎゅっぎゅっしているから、チベスナちゃんも好きにやってみていいよ！」

チベスナと入れ替わるように、ハシビロが私の身体を強く抱きついてきた。チベスナよりも豊満な身体をしているハシビロはシャワーから流れ出ている水を口に含んで、その水を飲み込むと、私の身体を嗅ぎまわって臭いを堪能し始める。それと同時に、チベスナは私のペニスをゆっくりとしやぶり始めた。

「じゅるるうん：んんん：：：こんなには、ガチガチに硬くなっていてるから：：：もつと、硬くしてあげるね……」

チベスナの舌触りを龟头部分で感じながら、私は先程までチベスナの熱烈なディープキスを受けてきた、そしてハシビロにペニスをしごかれて：ああ、私はどうすることもできないままに二人に犯されていく。

チベスナは淫靡な音を立てながら竿を舌で磨き始める。指先でネイルを塗るように器用に舌を使って私の野砲を舐めているのだ。チベスナの口腔粘膜まで行き届いていくらしく、分泌されていく唾液でペニス全体をすっぼりと覆っていく。

じゅぶっ：じゅぶっ：と竿を思いっきり締め上げて、根元から吸い出そうとしている、哺乳瓶にしゃぶりつく赤ん坊のように音は次第に大きくなってシャワー室全体に反響する。

じゅぶぶぶぶぶぶぶぶ！じゅぶぶぶぶぶぶぶぶぶ！まるで搾乳機で搾り取られるかと思うぐらいに、チベ

スナはしゃぶるのをやめない。第二射目の射精がくるまで彼女はペニスを口でいたぶるのをやめないだろう。その間にもハシビロは私の顔を舐め始めていく、まるで恋人がじゃれ合うように、私が犯されていくのを楽しんでるように、鋭い目つきのまま私の肌の味を堪能する。

そして、チベスナの舌ざわりが熱くなってきた際に二度目の射精を迎えた。チベスナの顔を見て、私は何とも言えない興奮とドキドキと高鳴る心臓の音を聞きながら、チベスナの喉の奥に突き刺すぐらいに：精巣から作りだされた二射目の精液が口の暖かい口腔内に放出されている。

エロゲーのような派手な効果音なんて鳴りはしない、自分の頭の中で響き渡る射精時の何とも言えない高揚感と、尿道を通過するあのドクドクとした感触がペニスの先端から放出されてチベスナの口の中を白濁液となって汚していく：チベスナが受け止めきれなかった白濁液が、口の外へと零れ出て行く。

私は二人を汚してしまったのか：いや、二人が私の性器を弄りだしたのが始まりだろう。現に、呆然としている私を置いていきぼりにして、今度はセックスをやりはじめようとしているのだから。ハシビロとチベスナの二人は愛に飢えているのかもしれない。

その証拠に、私の身体を食るように身体を舐めまわしてから彼女達が着ている服を脱ぎ始めたのだ。

身体のありのままの姿、二人とも身に纏っていた服を自分自身の毛皮だと思いついてきたようにだが、私が服を脱いでいるのを見て、これが着脱できるものだと認識したらしい。

人の交尾を真似ているのか定かたではないが、私の身体の上に二人がお尻を押し付けるようにのしかかってきた。

「どう？これが本来の姿なのでしょう？私の身体：変かな？」

「いや、変ではないけど：その、なんだ：何で服を脱い

「だの？」

「だって：こうしたほうが：さっきのどろどろしたものが出やすいのかなって：ほら、また大きくなってきていますよ：」

二人の裸体は見事なものだ、それは間違いなく保障できる。

ハシビロは豊満な胸が特徴的で、チベスナもまたハシビロに負けないぐらいの胸とお尻が特徴的な彼女の身体が着衣時よりもきつくなってきた。

ハシビロはゆっくりと顔の方に身体を寄せてから、私の顔の上もゆっくりとのしかかるように、私とハシビロの顔が見えるように顔面騎乗をしてきたのだ。

目から下の部分がハシビロの股にすっぽりと覆われて、彼女のホンワカとした体臭が鼻の粘膜を通して気管に入り込む。その臭いは決して酷く臭うわけじゃない、甘酸っぱい臭いであり、洋梨にレモンを振りかけたような臭いだ。

ハシビロはさつきフェラをしてきたように、今度は私がハシビロの股を舐めながら彼女の性器を慰めなくてはいけないようだ。

「私の：ここを：気持ちよくしてくれませんか？」

ハシビロの言葉に従うように、私はハシビロの性器を舐め始めた。

舌をゆっくりと淫裂と恥肉をまさぐるように舐め始める、酸味と塩を混ぜたような味が口の中に広がっていく、彼女達は動物がヒト化した生き物だ：だからこの膻の味は人間の女性に近い味なのだろう。

多少息苦しさもあるが、ハシビロは甘い声を出しながら感じているようだ。

「あああ：っ：：：うん：：：っ！」

脳がとろけそうな優しい声で囁き始める。

私の顔を真上から見つめながら、ハシビロの純情な好奇心と身体から溢れ出る性欲の波に私は飲み込まれていく。ハシビロの気持ちいを例えるなら、やってはいけない

事かもしれないが、その性欲を抑えることができな御不能な状況なのだろう。だから私はこうして二匹のフレンズに犯されているのだ。

淫肉から少しずつ零れ出ているのはハシビロの愛液なのだろうか、私で感じていたのか：。

「もっとな、あなたが：欲しい：だから：もっとな激しく：」

そう言って身体をどんと降下してお尻全体が呼吸できないギリギリの力によって加えられていく。

力が加えられていき、ハシビロの淫蜜な愛液と恥肉が口腔内に容赦なく入り込んでくる。愛液は口の中に入っていくと同時に、その液の一部が気管の中に入り込んできた。

苦しい：快感と同時に気管が詰まってハシビロのお尻にゲホゲホと咳きこむ。次の瞬間にハシビロはひくひくと腰を振るわせて、目を瞑り：女性特有のオーガズムへの突破口が開かれると同時に、私の口の中に潮を思いつきり噴き出した。

「あああああ！でるっ！何かが身体から出てくるう！あああ！あああ！あああ！」

熱を帯びた液が私の口の中に入り込んでいく、水の出ているシャワーを突然全開にしたぐらいの勢いで口の中を満たしていく。

塩とほのかな酸味を混ぜた愛液が口の中を覆い尽くし、口に飲み込みきれない程に零れていき、私はその淫液を吐き出した。

むせながら淫液がドバドバと吐き出すが、気管にまで入ってきている淫液は容赦なく私の身体を苦しめる。三分ほどゲホゲホと咳いて気管に入った淫液を吐き出してから顔を正面に向けると、淫液を出し切ったハシビロは顔を赤くしながら、私の顔に両手を当てて微笑んでいる。

そして、ハシビロはゆっくりと呼吸を整えてから、私の目線をじっと見つめながら私に告白をするように、呼吸を整えて囁くように話を始めた。

「ごめんね：無理にあなたにこんなことをしてしまっ

：私もチベスナちゃんも：人が好きなの：でも、みんな最近私達を避けるようになってきているの：多分、私が怖いからだと思う：だけど、あなたは私達に怖がらずに接してくれた：私もチベスナちゃんも嬉しかった：だから、私はあなたのことが好きなの：他の誰よりも：オスとして：私達の気持ち：：受け取ってくれる？」

「そうよ、だからこうしてハシビロちゃんも私も：オスとして：あなたの温かいものが欲しいの：ここからそばえ立つモノが欲しいの：まだまだ大きくなっているから：」

チベスナはゆっくりと私の逸物を左手でゆっくりと淫裂の中に入れてこもうとしている。止めようとするも、もう体力と心が二人手中に握られており、それすらままならない。

ハシビロは淫液で汚れた私の口の周りを舐めながら、私の口に何度も何度も接吻をせがんでくる。

口の中にハシビロの舌先が入っていくのと同時に、チベスナの膣内へと肉棒が入り込んでいく。同時に、チベスナの口内でも、膣内の膣壁がぬめりと共に私の肉棒を優しく迎え入れてくれているのだ。

ぐちゅっ：ぐちゅっ：と淫音が奏ではじめる、無慈悲に私の肉棒などお構いなしに腰を振り始めるチベスナ、二人によって開始される快楽と性欲の海原に私は放り出される。今までの行為などこれから始まるセックスの前哨戦に過ぎなかったのだ。

チベスナは腰をストーンと落とすように膣内の奥まで一気に入れてきた。膣とペニスが結合している箇所から愛液が零れていき、その愛液が着火したかのように、熱く：激しく腰にパンパンと音を立てて動き出す。断片的な記憶の彼方で両親と一緒に見たことがある：ガソリン燃料で走るターボエンジンを搭載したスポーツカーのよう

にチベスナは動き出した。

乗っかっているチベスナは進んで腰を動かして私の精巢を空にするつもりのようなのだ。ハシビロによって口が塞がれてその顔までは見えないが、甘く愉悦と快楽を感じているリズムミカルな淫音と共に声を出している。

「もっと：：：もっと：：：もっと！奥に：：奥に来てえっ！」

その言葉と共に腰を振る速度もどんどん加速していく、のしかかる彼女の重みと共に、亀頭の先端部分が膣奥にある子宮口に突き当たったのだらうか：グチュン、グチュン：と重みのある音に変化していき、淫壁に締め付けられて上にある亀頭部分が何度も何度もぶつかる音がシヤワー室に響き渡る。

その音は例えるなら白熱するストリートレースを一番前の観客席から観戦しているような気分：とつても気持ちちがよくなる。

私がチベスナによって童貞の初めてを奪われるのだ。チベスナは興奮して腰を盛んに振って肉棒の奥まで呑み込んでいく、もうすぐにでも三発目を出してしまいたいそう

だ：。

「チベスナ：：ツ！ああっ、ああっ：！」

「はあっ、はあっ、ほら、もっときて、もっときてえっ！どんだん、気持ちよくなってくるから：！」

「チベスナツ：！」

『でるう：！』：という言葉よりも先に私の亀頭の先端から三発目の射精がチベスナの膣内へと飛び出していった。子宮口を突き破るかもしれないくらいに：チベスナの淫肉の熱によってピンピンに固くなっていき、そしてハシビロが喉の奥まで舌を舐めまわした結果、私は一発目、二発目よりも沢山の精液をチベスナの膣内へと放出したのだ。

沢山の精液：。小刻みに震える膣内にはチベスナの愛液と私の精液が混じり合い、混合物となって淫壁に染み込むぐらいに搾り取られた。

チベスナはイクと同時に腰をべたんと付いた状態だったが、ゆっくりと腰を上げる。三発目だというのに、べたたりと淫裂からペニスを引き抜こうとすると、淫壁が

ゴリゴリと亀頭部分に擦れて精巢に残り切った精液が零れていく。大きく、赤く膨れ上がった肉棒はそそり立ったまま、チベスナの淫裂からドクドクと愛液と精液が混じり合った液体が落ちていく。三発も二人によって搾り取られた私は腰を抜かしてしまい、身動きは取れない……。ハシビロとチベスナが私の顔に近づいて微笑んでいる。二人によって私は朝まで搾り取られるのだろう。二人によつて私は狩られるのだ、既に：身動きが取れない私は二人の快楽を発散する道具となつていゝのだ、なのに私はペニスには萎れることは無い。

小刻みに震える身体、しかし心は二人の事を求めてしまつてゐる、どうすることもできない性欲を弄ぶのではなく、フレンズであるハシビロとチベスナが私の性欲のケモノであることを見抜いて発散させてくれるのだろうか？

心の奥深くで：異性に対して支配されたいというマゾヒズムのようなものがこみ上げてきてゐる証拠なのかもしれない。二人にされるがまま、身体の隅々まで舐めまわされて、私は性欲を剥き出しにしている獣で、その獣から吸い上げられていく精気が二人の肥やしとなつていくのだ。シャワー室で一匹の性獣になつた男が二人のフレンズによつて身体の隅々まで犯されていく。ハシビロがチベスナのようにコンドームを身に付けずに、直接膈内へと肉棒を誘つてくる。チベスナが私の身体をガツチリと押されてゐるので離れない、いや：私の方でも離れないで欲しいと願つてゐるのだ。「さあ：次は私の番だよ：これからもっと、もっと気持ちいい事をしよう：」

そう言つてハシビロは淫裂の中にある膈へとペニスをグイグイと押し込んでいった。何度でも何度でも彼女たちの悪意のない欲望に嵌り込んでいく、深く、深く：それはまるで沼のように身体が沈んでいくように感じる。逆レイプ：この犯されてゐる状況の中で辛うじて一瞬だけ：理性というものが私の中にあつたのはこの時まで

だつた。私はハシビロとチベスナに犯されてゐる、それも精液が枯れるのではないかと思うぐらいに、アダルトビデオでも体験したことのない程の淫音がシャワー室で鳴り止むことは一向にないだろう。ハシビロは私の事が好きなのだ、それはチベスナも同じだろう。

しかし、好きというのは恋愛感情によつて基づくものではない。ハシビロとチベスナは発情期によつて私を犯してゐるのだ。

どれだけ足掻こうとも、決して抜けることができない沼に入り込んでしまつたのだ。もう、この快感を覚えてしまつたら戻れないのだ、フレンズ達の誘惑に直ぐに貪る狼のように：フレンズ達の性欲発散の為に犯されていくのだ。精液を出すために、それだけで彼女たちはじゃばりまんをあげるよりも喜んでくれるのだ。

この快感は人間では味わえない、チベスナの舌が口の中に入り込んでザラザラとした舌触りと共に、ハシビロの膈内で締め付けられていく淫棒は萎える気配などない。ギョツ、ギョツと締め付けられていくうちにハシビロとチベスナは微笑ましい笑顔で言つた。

「オスの臭いがどんどん身体に染み込んでいくね：これで、あなたは私とチベスナちゃんと一緒に：事を：もっと好きになつてくれる？」

「：ハシビロちゃん、私：これからもどんどんオスとして、私たちを癒して：お願い」

「あつ、あああつ：！」

私は情けないような声を出しながら、ハシビロの膈内でペニスを掻きまわされてゐる。何度も射精したはずなのに、ギンギンにそそり立っており、ハシビロの淫蜜が肉棒に混じり合つて、スムーズに接合部の根元に合致するまで行き来を繰り返してゐる、ハシビロが私の身体に馬乗りになつてパンパンと腰を振りながらチベスナの時よりも激しく音を立ててゐる。

ハシビロの目を見てみると、彼女は微笑んでゐた。私の隅々まで知りたがつてゐるように、好奇心：そしてセックスの単語や性行為の用語を知らない彼女達フレンズ

は己の本能のままに犯していくのだ。

何度も何度も淫壁によってペニスが締め付けられており、まるで精巢に残っている精液の全てを出すように命令しているようだ。

それを根元がすっぽりと入ったかと思えば亀頭が出ないギリギリの位置まで腰を上げての動作を繰り返していき、その興奮とエクスタシーによって私は完全にハシビロの意のままにされているのだ。もう、私は彼女たち無しでは生きていけない。

「はあっ：はあっ：ねえ：さっきのオスの臭いがするのを出して：私のこの身体の中に：出して：」

「あああっ：！ハシビロ！ハシビロ！」

「出して：！っばい、出して！オスの臭いを：私に擦りつけて：！」

「あああっ、あああああ！いくっ！いくううううう！」

「出してえ！！！私の中に：！出してえええええええええ！！！」

私はハシビロにリードされるまま、彼女の膈内の奥深くにある子宮口の入り口を埋め尽くすぐらいの量を出した。もう射精しすぎたのにも関わらず、射精の勢いは衰えるどころかむしろ勢いが増している。

そして私の白い精液はハシビロの膈内で泳ぎまわっているように感じる。ハシビロも射精と同時に潮を噴いて、辺りにはおしっこのような塩辛い臭いがドクドクと精液と一緒に半透明の液体となって接合部から滲みだしていき。

暫くハシビロの甘い息の音がシャワー室に聞こえる、自分の心臓の音が爆音になって聞こえてくる。ハシビロがゆっくりと姿勢を直して膈内から肉棒が露わになると、チベスナと一緒にペニスを舐め始めたのだ。苦くて塩辛い精液と愛液が混じり合ったものがこびり付いた肉棒をかじりつく勢いで頬を紅く染め上げて舐めていく。

「んはあっ：オスの：んんんっ、気持ちいい！」

「ふふふ：まだまだ眠らないよね：朝がくるまで：もっ

ともっとオスの臭いを私たちにかけて続けてくれる？」

その甘い誘惑に私は頷いてハシビロとチベスナによって朝が来るまで犯される事が確定した。

フレンズとの交わり、性の喜び：それを知ってしまった私はこれから大勢のフレンズ達とセックスすることに喜びを感じていくだろう、いずれこの事が発覚してしまつたら社会的にも生きてはいけなくなるかもしれない、それでも私はフレンズ達が喜んでくれるのであれば、それでもいいと思っている。

彼女達の流動的で気まぐれな行為によって、私は身体中の至る所を貪られるように、舐められ、犯され、そして精液が枯れるまでじつくりと時間を掛けて快楽の沼地へと私を引きずり込んでいく。その沼地は一度入ってしまったと抜け出せない底なし沼だ、だが私はその沼の中に潜っていくと同時に、フレンズ達によって搾り取られていく快楽と快感が脳内を埋め尽くし、もう正常に判断することも出来ない。

どの道もう戻れないのだ。これから朝になるまで私はハシビロとチベスナの膈内を交互に入れ替えながら二人の膈内が満タンになるまでセックスを繰り返し何度も射精を行うだろう。そして、精巢が空になる頃には、もう二人の為に：いや、性処理に困っているフレンズ達の道具になるのだろう。フレンズ達に愛玩動物のように、可愛がられながら、終わりのなき性欲の発散場として私は進んで犯されていくのだろう。二人の微笑んでいる顔を見て、私はフレンズ達の性処理道具になる事を選んだのであった。

終

朱の雀、孔の雀に種を蒔く

せがれきんぐ

「ふーむ、どうしたもののかのう……」

ジャパリパーク南方、火山地帯の近くにある森を女性が歩いていた。髪は燃えるような朱色で白い肌によく映え、誰もが振り向くような美しい顔立ちをしていた。しかし、その頭の左右には金色の翼軸と赤と薄い朱色の二色の羽根を持つ小さな翼が生えており、腰からは折り畳まれた朱色の飾り羽が生えていた。

「まさかこんなことが起ころうとは、南方守護神である我でもこれは初めてじゃ……」

ジャパリパークの守護をするアニマルガール『四神獣』の一人であるスザクは独り言を呟きつつ森の中を歩いていった。鳥のアニマルガールでもある彼女は空を飛べるはずなのだが、彼女にとっても想定外すぎる悩みを聞いてくれる相手が思いつかないため、歩きながら考えることにしたのだ。その悩みとは……

「しかし、まさか男根が生えるとはの……」

スカートの中で揺れるそれを感じながらスザクは呟いた。そう、突如襲来したサンドスターがスザクに当たり、女性の体はそのままに男性器が生える『ふたなり』になってしまったのだ。パークの歴史をコノハ博士やミミちゃん助手に語り、『灼熱の化身』を自称する彼女にも全く初めてのことであり、相談相手を探していたのだ。

「やはりビヤッコの奴に相談すべきか、胸が無いから男と変わらんじやろうし。いや、もしくはゲンブの奴にするか、何せ『亀頭』と言うしのう……くふふふ」

スザクは同じく『四神獣』の西方守護者ビヤッコと北方守護者ゲンブに対してとても失礼なことを言いつつ森の中を進んでいたが、スザクも良く知るアニマルガールと出会った。

「あら、スザクさんじゃないですか、珍しいですね」

これまた美しい鳥のアニマルガール、クジャクである。

少し前に開催された『第一回ジャパリパークミス・フェザークンテスト』で色々あってクジャクはスザクに会い、そしてスザクの飾り羽を奪ったのだが、その話は各自で調べてほし

い。

それはさておき、クジャクは四神の一角たるスザクがなぜこんな森の中に居るのか知りたそうにしていたが、スザクは真実を言うわけにはいかなかったため、嘘をつくことにした。

「い、いや、ちょっと散歩をしようと思つての……」

しかし、一つ問題が発生する。

（うう、すごく美しいの……こんな感情は初めてじゃ……やはりの男根が原因かの……）

クジャクの美しさに魅了されたのか、スザクの男性器が意思に反して大きくなり、それを気取られたくないスザクは少し前屈みになってしまう。

「どうかされましたか？」

しかし、前屈みになったことに気付いたクジャクはスザクに近づく。

（こやつ、良い匂いがする！ このままではいかん！）

クジャクの香りに反応したスザクの男根はスカートを押し上げんばかりに勃起してしまい、スザクは慌ててその剛直を押しさえつけ、更に前屈みになる。

「あ、もしかしてお腹を下してしまつたのですか!? すぐ近くにおトイレがありますので行きましょう！」

そんなスザクの様子を見たクジャクはそんな勘違いをしてスザクの手を取り、駆け出そうとした。

「え!? ちょっと！ 待つのがじゃあ！」

咄嗟のことに剛直を抑えていた手が離れ、跳ね上がった剛直がスカートを押し上げ、スザクの声に振り向いたクジャクがその存在に気付いてしまう。

「スザクさん……それ……」

「み、見るでない……」

スザクは知られてしまった恥ずかしさで真っ赤に染めた顔をそらす。

「コレを何とかしようと思つて歩きながら考えていたのじゃ……我は他の四神の所へ行くからこれで……」

そう言うスザクはその場を離れようと歩を進めるが、

「待ってください」

クジャクがスザクの前に出て進路を塞ぎ、その場にしゃがん

でスカートの中に入り、その剛直をしゃぶり始めた。

「んなっ！ 何をするんじや、お前はっ！」

クジャクの急な行為にスザクは狼狽える。

「何ってフェラチオですよ♥こんなにくるしそんなおちんちん♥放っておけるわけないじゃないですか♥」

スザクの問いにクジャクは剛直を舐めながら答える。

「そんなことせんでもあぁっ♥」

スザクはクジャクの止めようと声を上げるが、クジャクは

それに構わずまたスザクの剛直をしゃぶる。

「おちんちんの他にも立派なものがありますね♥」

クジャクはそう言ってピンポン玉サイズの金玉をさすり始め

る。

「そんなっ♥物をっ♥触るでない……っ♥」

スザクの抗議に耳を貸さず、クジャクは剛直を口に咥えたま

ま玉を優しく揉み始めた。

「あぁあぁっ♥そんなっ♥そんなっ♥ことをっ♥」

スザクは初めての感覚に戸惑い、そしてその快楽に溺れてい

く。

「あぁっ♥出てしまっ♥出てしまっ♥のじゃあ！♥」

スザクは無意識のうちにクジャクの頭をつかみ、喉の奥にま

でその剛直を挿し込んだ。

「あぁあぁっ♥あぁっ♥」

「んうっ！♥んっ♥んっ♥」

スザクが体を震わせ、クジャクの口内に射精する。飲みきれ

なかった精液が口の端からこぼれる。

「ぶはぁ♥……はぁっ♥はぁ♥スザクさんのすごく熱くて……

♥まるで溶岩のようでしたよ……♥」

クジャクはそう言うって立ち上がり、スザクの肩を掴む。

「ほら♥見てくださいよ……♥私の口の中がこんなにドロドロ

ですよ♥」

そしてスザクの眼前でニチャア……と音を立てて口を開き、口

内を見せつける。スザクの精液がクジャクの口内を白く染めて

いる。

「そんなものを見せつけるでない……」

スザクはそう言うが、クジャクの口内から目を離せないでい

た。

「……♥」

そんなスザクの様子を見てクジャクは口を閉じ、スザクに口

づけをした。

「んうっ!?」

クジャクはスザクの口内に唾液と精液が混ざったものを流し

込む。不意打ちを防ぐこともできず、スザクはクジャクのなす

がままにされてしまう。

（こやつは唾液と私の精液が……このままではおかしくなっ

た……♥）

スザクの理性は受け入れることを拒もうとするが、それに反

してスザクはその液体を受け入れ、飲んでしまう。

「あはっ♥飲んでくれたんですね♥それにこれも元気になりま

したし……」

クジャクはそう言うって再び固くなったスザクの剛直に触れる。

「そんな所を触るでない！」

スザクは剛直を触るクジャクの手を払いのける。

「じゃあこつちで気持ち良くしますね♥」

クジャクはそんなスザクに物怖じせず尻を向け、クジャクの

特徴である閉じた上尾筒でスザクの剛直を包み込んだ。

「あぁっ♥柔らかい羽根に包み込まれてえっ♥」

クジャクの柔らかい上尾筒に包まれ、スザクは気持ちよさそ

うな声を上げる。クジャクはスザクの剛直を完全に包み込むと

尻を左右に振り上尾筒の絨毛でスザクの剛直を優しく刺激した。

「どうですか♥スザクさん♥私の羽は♥いっぱい出していいで

すからね♥」

クジャクはスザクの剛直に刺激を与えながら言った。

「あぁっ♥限界じゃあ♥また出てしまっ♥のじゃあ♥」

クジャクの畳まれた上尾筒の中でスザクの剛直が暴れ、熱い

精液が出される。

スザクが出した後クジャクは上尾筒を開き、白くドロドロし

た精液が華麗さを誇る飾り羽をベッタリと汚しているのをスザ

クに見せつけた。

（こやつは飾り羽が私の精液で……♥）

スザクはそれを見て興奮し、その剛直を無意識のうちに再び

硬くしていた。

「まだまだいけそうですね♥」

クジヤクはそんなスザクの剛直を見て、そう言うとも服を脱ぎ始めた。

「なっ！こんなところで何をしてるのじゃ!?」

「脱いだ方が燃えませんか？ ほーら♥スザクさんも♥」

クジヤクはそう言うともスザクのスカートと脱がした。スザクは逃げようとするが、中途半端に脱がされたスカートで転んでしまった。

「スザクさん、大丈夫ですか？ 怪我が無いか見ますね♥」

全裸のクジヤクは怪しい笑みを浮かべてスザクに迫り服に手をかける。

「お前はそう言うて脱がせたいだけじゃろうが！」

クジヤクに対して怒りをあらわにするスザクであるが、クジヤクは意に介さずスザクの服を脱がせる。

「スザクさんの肌、すごく白くて綺麗ですよ♥ピンクの乳首もすっごくエロいです♥」

クジヤクはそう言うともスザクのへその辺りに舌を這わせ始め、ピンと勃った乳首を弄り始める。

「ひやうっ！ くすぐったいからやめ！」

スザクが身を振り、手でクジヤクの顔を遠ざける。クジヤクはそれにおとなしく従い顔を離す。

「そうですね♥もう本番行きましょうか♥」

クジヤクは天に向かって直立するスザクの剛直に自らの割れ目をあてがう。

「だから何故そうなるんじやと言うておる！」

スザクは抗議するが、クジヤクは構わず腰をおろし スザクの剛直を呑み込んだ。

「うにやうっ♥スザクさんのすごく熱くて火傷しちゃいそうですっ♥」

「くうっ♥中が冷たくてっ…気持ちいいっ♥」

普段より高いはずのクジヤクの体温ですらスザクにとっては冷たく、その冷たさもスザクの剛直に刺激となって襲っていた。

「うにやっ♥にやっ♥にやうう♥」

クジヤクは腰を上下に動かし、その度にネコの鳴き声のよう

な声を上げ、貪るように快楽を享受する。

「くっ♥ふっ♥」

スザクにとっても剛直が冷たいものに出し入れされるといふこれまでにない感覚に言葉が出せないほどの快感を得て息を継ぐのが精々であった。

(そろそろ…また出てしまう…♥)

スザクが果てるかという所でクジヤクは見計らったかのように割れ目から剛直を抜いてしまう。

「『何でやめてしまうのか』っていう顔です♥」

クジヤクはスザクをいたずらっぽいや表情で見下ろす。スザクは『しまった！』と思ったが、そんなスザクを意に介さず近くにあった岩に座り股を開いた。

「ほらっ♥スザクさん♥いつまでもそんな所で寝ていないで私の中に入れてください♥」

クジヤクは濡れぼそった割れ目を開いてスザクを誘った。スザクにとってもその誘いに乗るのは四神としてのプライドが許さなはずであるが、立ち上がったスザクはその剛直をクジヤクの割れ目に自ら当てがっていた。

「誘ったのはお前じゃからなっ…♥」

スザクはそう言うともクジヤクの膣内に一気に入れた。

「うにやっ♥さつきよりすっごく熱い♥」

クジヤクは悲鳴のような嬌声を上げるがクジヤクは構わず腰を動かし始めた。

「うにやうう♥にやうっ♥みやっ♥」

薄暗い森の中に白い肌と赤と青の尾羽が躍る神秘的で美しく激しいセックスが繰り広げられる。

「ふっ♥これはっ♥中々の名器じゃっ♥」

クジヤクの冷たい膣内をそう評価する。クジヤクはそれに対して何も言わなかったが嬉しそうに笑った。

「そろそろ出そうじゃ…♥」

「うにやっ♥いいですよっ♥沢山出してくださいっ♥」

クジヤクがそう言い終わるとスザクは腰を激しく打ち付け、クジヤクの奥に精液を吐き出した。

「くっ♥」

「うにやううっ♥♥あつついのが私の中に♥♥♥」

スザクの精液を膣内で受け止めたクジャクはそう言っただけで身を振る。スザクの剛直がクジャクの膣内でピクンッピクンッと跳ねるたびにクジャクは鳴き声を漏らす。

「ふーっ♥ふーっ♥
「はーっ♥はーっ♥」

しばらく2人は互いの体に腕を回し、抱き合ったまま休んでいた。スザクの男根は柔らかくはなったものの今だクジャクの割れ目に刺さっていた。

「スザクさんの……すごく熱くて激しくて……よかったですよ♥」

「そ、そうか、それは良かったの……」

クジャクはスザクに対して感想を述べるが、スザクは歯切れの悪い返事をする。

「スザクさんはどうでしたか？」

「ん……ん、どうかの……」

クジャクはスザクに対して問うが、元々男性器を無くすために出かけたスザクにとってその快楽に流されるわけにはいかず、返事を濁した。

「私では気持ち良くなかったですか……？」

その返事を聞いたクジャクは今にも泣きそうな顔でスザクを見つめそう言った。

「い、いや！ 気持ち良かったぞ！ 最高の名器じゃと我はそ

う思っておるぞ！」

そんなクジャクを見て驚いたスザクは後ろに退き、慌ててそう言った。

「そうですか！ それは良かったです！」

それを聞いたクジャクは笑顔になり、嬉しそうにそう言った。

「お前……役者じゃの……」

すぐに立ち直ったクジャクを見てスザクは苦い顔してそう言った。

「さあ、どうでしょう？」

クジャクはスザクに対して笑いながらそう答え、立ち上がってスザクに尻を向け。

「まあとにかく、また我慢できなくなったら私を使ってください

いね♥」

精液が溢れ出る割れ目を開きつつ、顔を後ろに向けてスザクにそう言うと、スザクの男根が再び大きくなっていった。

「あら♥また元気になってきましたね♥第二回戦と行きますか？」

それを見たクジャクは臆することなくそう言っただけで尻を振り、スザクを誘う。

「望むところじゃ♥覚悟しておれ♥」

スザクもそれに応じ、男根をクジャクの中に挿入し、またその快楽に溺れ、夜が更けるまで交り合った。

それからしばらくして、スザクは火山地帯で新たな 悩みに頭を抱えていた。

「うーむ、快楽に流されるとは四神の名折れじゃ……」

男根が生え、クジャクと激しい交尾をしてしまったこと、それを他の四神にも伝えられず悩んでいたのである。

しかし、突然の呼びかけて思考が中断される。

「スーザークさんっ」

「うおっ！ お前！ どうしてこんなところに!?」

急な来訪者、悩みの種であるクジャクに呼びかけられたスザクは驚いて叫ぶ。

「報告したいことがありまして来ましたっ！ これ見てくださ

い！」

「これは……何じゃ？」

クジャクは丸い棒の中に紫色の線が浮き出ている白いプラスチック製の棒のようなものをスザクに見せた。

「妊娠検査薬です！」

「にんしん……けんさやく……」

クジャクから放たれた言葉にスザクはオウム返しする。クジャクの様子からするに最悪の結果になっているのは予想できたが、見方が分からないスザクはそれが外れてほしいと願っていた。

「私、スザクさんの子を授かったんですよ！」

「……………なんとということじゃ」

スザクは予想が当たってしまったことに呆然とする。

「これからよろしくお願いしますね、アナタ♥」

クジャクはそんなスザクの手を取り、新たな命の宿る自らの腹をさすらせて笑顔でそう言った。

灼熱の火山の中であつても分かる腹の熱を感じ取つたスザクは、新たな悩みに空を仰ぎ見る他なかった。

完

ヒト化したらこうやって交尾する

たなか

森の中で迷子になっていた。死ぬ気で貯めたお金で旅行でも行こうかと勇んで、ありふれた観光というのが嫌だといういつもの悪い癖が炸裂して、どうせなら誰も行かないような所へ行ってみようと思つて適当に歩いていたら、これだ。

土地勘が全く無いのに見切り発車をするからこうなるんだ。森の中だと方角も分からず、手当たり次第に歩いてみるけど、余計に分からなくなる。さて、いよいよどうしたものかと考えあぐね、陽も落ちてきていよいよ翌日の一面記事も覚悟した、その時。

僕の目の前を、一つの物体が横切るのが見えた。なんだか影の様な……一瞬の事だったからびっくりしてよく分からなかった。とりあえずその物体が現れた方へ行ってみると……そこには川があった。こんな所で思わぬチャンス。とりあえずそれに沿つて下つてみよう。何か手掛かりがあるかもしれない。

しかし神様はちやんと見てくれるもんだ、善良な市民を何の前触れも無く殺しはしない。遭難してもちやんと助けてくれる。とりあえずこの川を下つて行けば何とかなるだろう、と思つてずつと歩いていく。

すると、人影が見えた。どこか見覚えのあるような……灰色のショートヘアに灰色の服を身に纏つた、多分女の子。人に会つた事で興奮した僕は、そのまま近付いた。すると、あと数メートルという所で、その子は突然僕の方を振り向いて、
「ニンゲン！」
と叫んだ。

次に目を覚ますと、僕は洞穴の中にいた。一体何があつたのか……思い出してみる。確か、さっきの女の子が謎の一言を叫んだ後、僕の方に飛び掛かつて来たんだ。いきなり来られたから何も抵抗出来なくて、そのまま仰向けに押し倒された勢いで、近くの岩に頭を打ち付けて……
で、気絶した僕はここに連れて来られたと……こりゃあ面白い

事になったぞ。ちよつと思つていたのとは違うけど、旅はこうでなくちゃ。ちよつと怖いけど、こういうスパイスの効いたトラブルなら大歓迎だ。

と、人の気配がした。振り向いてみるとそこには、灰色のショートヘアに灰色の服、灰色の長手袋を着けて、そして革靴に灰色のニーソ。多分、僕をここまで攫つた女の子だ。よくよく見てみると、普通の人間とは違う様相だ……よく見たら尻尾とか生えてるし。何故こんな女の子がこんな所に一人で居るのか。何か話しかけようとしたら、

「やつと起きた！」
あつちから話しかけて来た。

そういえば、ニュースで見た事がある。大きな動物園「ジャパリパーク」の動物達が何らかの理由で人間化——政府はフレンズ化と呼んでいた——して、何匹かは脱走したらしい。この子の、どう見てもこんな秘境でいいとは思えない恰好と、その尻尾……この子はもしかしたら、「それ」なんじゃないかと、ふと思つた。でもいきなりあなたはフレンズですかと聞くのも、それはそれで失礼だ。さてどうしたものかと考えていたら、その子が近付いて来た。

「んもー、抱き付いたらいきなり気絶するんだもん、凄く焦つたんだよ？」

そう言つてその子は、僕の方に近付いて来て、目の前でしゃがんだ。間近で見ると、意外と可愛い。目なんかくりくりしているし。その魅惑的な容姿に吸い込まれそうになつたけど、一旦こらえる。

「な、何で僕をこんな所に……？」

僕がこの子に問うと、その子はきよんとした表情で、こんな事を口走つた。

「だって、人間見たの久しぶりだったんだもん」

まるで子供の様な……いや子供みたいな見た目ではあるからこの際それは放つといて、それでもこんな脈絡の無い……これからどうなるんだらう……

「あっ、自己紹介忘れてたね！ 私はコツメカワウソっていうの。ジャパリパークにいたんだけどね、この姿になって色々動けるよ

うになつてね、ジャガーちゃんと二人で外に出てみたの！」
待って、この状況で自己紹介しないで。まだ頭の整理が追い付いてない。そんでもって、やっぱりフレンズだったか。そうか。さて、どうしよう。
「やっぱり人間の身体って凄いな！ 凄く速く走れるし、手足もこんなに自由に動かせる！」

コツメカワウソと名乗るその子は、そう言うや否や、僕に物凄い動きを見せてきた。バク転しだしたり、側転したり、その辺にあつた石でお手玉も……カワウソが手先が器用な事は図鑑で読んだ事があるけど、ここまでスペックが高いとは。
「凄いなー！ フレンズになつてから、楽しい事がいっぱいなんだ！」

カワウソちゃんが目をきらきらさせて満面の笑みで僕に話ってくる。そして今度は、着ている服を見せびらかす。
「この、服っていうのもね、凄く気に入ってるの！ 可愛いし、オシャレだし、何よりこれ！」

そうやって差し出してきたのは、何と靴を履いた足。いきなりでドキッとした。ニーソに靴を履いたカワウソちゃんの足が僕の前にはずいと差し出され、不覚にも鼓動が早まる。

「フレンズになつてから、地面を歩くと足が痛かつたんだけど、これを履いてから痛くなくなつて、どこでも行けるようになったの。こんなのを発明するなんて、やっぱり人間って凄いな！」

と、差し出した足を揺らしながら嬉しそうに語るカワウソちゃん。その動きといい、鼻血が出そうだった。何を隠そう、実は僕、結構な足フェチでして、特に足裏が大好きで、この子の靴の中に隠れた足裏を想像してしまうと、どうにも妄想が止まらなくなつてしまう。あまつさえその芳しい香りを……なんて、そんな変態的な事を考える前に、ここから出なきゃ。

「そ、そう……じゃあ僕はここから出な……」
と言つて、踵を返し洞穴を出ようとした、その時だった。
「待って！」

カワウソちゃんの呼び止める声と共に、後ろからタックルをかまされた。そしてまた転んだ。
「な、何い今度はあ……」

「まだ遊び足りないんだもん！」

遊び足りないときた。どこまで弄べば気が済むのか。カワウソちゃんの顔を見てみると、成程不服そうだ。折角出会った人が二言三言交わしてすぐ帰ろうつてんだから。でも、遊ぶつたつて、こんな何も無い所でどうやって？ かくれんぼか、まさか鬼ごっこつていうんじゃないだろうか？ いくら何でも、この地形に不慣れな僕にはオーバークイルというものだ。

「な、何をやる気で……？」

「あ、お兄さんが楽しいと思う事！」

うん、さっぱり分からない。またもや満面の笑みを僕に向けながら放たれたこの一言、僕は更に混乱する。よく見ると僕の身体は起こされて、カワウソちゃんは僕に抱き付いてしかも両足を腰に回してがっちりとホールドしている。

「あのね、実はね」

ここで、カワウソちゃんの顔がずいと間近に寄つて来た。そしてその次に、

「私、発情期なの」

ずっこけてしまった。いきなりそのカミングアウトは予想外だった。でも間近に見えるカワウソちゃんの顔は、どこか恍惚としていて、頬も心なしに赤らまつていた。その瞬間、カワウソちゃんの笑顔が純粹無垢なものから、段々艶やかに見えて仕方が無くなつた。一体どういふつもりなのか、そして僕も僕も一体どういふ心変わりか。その時、カワウソちゃんが口を開いた。

「フレンズになつて初めての発情期なの。人間の発情期は物凄いなつて、ジャガーちゃんから聞いた。だからね、お兄さんと楽しい事したいの。ここまで隠そうとしたけどもう駄目」

カワウソちゃんがしきりに言っている楽しい事っていうのが、アレの隠語だつていうのはとくに分かつていたけど、僕はまだ発情期じゃない。夜中じゃないんだし。さて、時間が経つにつれカワウソちゃんの表情がみるみるうちにやばい。出来ればこのまま何事も無く終わりたいけど、この近距離は間違いなく襲われるに違いない。早く逃げなきゃいけないけど、そういえば背負っていた筈のリュックが見当たらない。

その時、カワウソちゃんが一冊の本をどこからか出して、僕の目の前に見せてきた。その本というのが……
「でね、お兄さんが気絶してる間にかばんを漁ってたたら、こんなのが出てきたんだけど……」

その本というのが、僕が大好きな足フェチ作家のイラスト本だった。女の子が蒸れに蒸れた足で男の顔を踏み、時には匂いを嗅がせたりするやつだ。台詞付きのもあって、臨場感が違う。
「ちょよ！ 待って、何で君がそれを！ ていうか何で勝手に人のリユックを……！」

「だって、久々に見る人間の事を知りたかったんだもん。でも、凄いな、フレンズになったら人間の言葉が喋れるし、文字読めるなんて、本当に凄いな！」

カワウソちゃんの表情が、あの時の無邪気な笑顔にちよつと戻った。でも、この後に起こるであろう事は想像に難くない。
「でさ、これ、女の子が足で踏んでるけど、こういうのがいいの？ 踏まれたら痛いよね？ しかも、歩く為の足だよ？ て

も、こういうのが好きなら、私もやってあげる！」
そうやって、カワウソちゃんが僕を仰向けに寝かせた。いきなり急展開を見せられて脳の処理が追いつかないけど、これからカワウソちゃんの足裏を堪能出来る、その認識だけはやけにはつきりして、興奮も加速していた。

「こんな風に交尾するなんて、人間って変な性質があるんだね。でもフレンズになったからには、人間の事もよく知っておかないとね」

それは多分誤解だという間もなく、カワウソちゃんが靴を脱ぎ始めた。そしてじれったく時間が過ぎ、数分後カワウソちゃんの右足が靴から解放される。

その足元を見て驚いた。灰色のニーソックスだと思っていたら、爪先が布に覆われていない、つまりニーソ丈のトレンカだったのだ！ 爪先だけ丸腰の状態の靴の中に入れていた、実質素足履きの状態からの解放、これは期待度が一気に上がってきたぞ。
「ほら、どう？ 私の足、綺麗かな？」

綺麗というよりも、もうこの時点でシコれる。灰色と赤みがか

った肌色のトゥトンカラーをあしらった足裏が顔の上で踊っている。足指を器用に舞わせて僕を誘う。ああそんなにくにくにと拱いたらもう……

案の定、僕の鼻に強烈な匂いが入って来た。汗が凝縮されまくった、いかにも野性的な匂い。既に僕の脳は懐柔されてしまった。これが動物上がりの足の匂いなのか……今まで思い描き、時には嗅いできた匂いの遙かに上を行っていた。

もしかしてフレンズ化して間もないこの子は、靴を履いた足が蒸れる事を知らないのでは……？ こんな無知シチュもそれはそれで勃起する。まだ距離があつてこれとは、もう待てない。もう踏んで欲しい。その激臭に染まった足裏を僕の顔の上に置いて欲しい。

「じゃあ、踏むね。痛かったら言っただけ？」
そして、待ち侘びた瞬間。カワウソちゃんの蒸れトレンカ足裏が近付いてきて、段々強まる匂いを鼻が感じながら興奮している。そして遂にその足裏が僕の顔にべたりとくっ付いた！

その途端、とてつもなく素晴らしい激臭が僕の鼻腔に雪崩れ込んだ。トレンカで靴を履いていたカワウソちゃんの足は、僕が期待していた何百倍も強烈な匂いを発していた。

何しろ、トレンカだ。踵は薄い布に守られて絶妙に湿った感触が口を塞いでいる。そこからはカワウソちゃんの足汗がトレンカの布で濾過されて僕の口に届き、口当たりなめらかで濃厚な逸品になっている。片やその先、無防備になっている爪先部分は、素足履き状態になって靴から守られる事が無かったから、靴の蒸れを一心に受け止めて汗が熟成され放題。その結果醸造された匂いはまた格別。

しかも、カワウソは水辺に棲む動物。きつとこの姿になってからも水辺で遊んでいたのだろう、靴の中に染み込んだ水分が生乾きになって張り付き、そこに元々あった芳醇な足汗と新鮮な足汗が混ざり合って、とんでもない化学反応がもたらした激臭を放っている。

更にジャパリパークで飼われていたとはいえ元動物。風呂なんか知らない筈だ。それもこの匂いをもっと濃いものにしていく。たったの一嗅ぎで、僕の脳は侵略され、カワウソちゃんの足の匂

いしか考えられなくなった。鼻も歓喜して、更に嗅ぎまくる。

「どう？ 私の足、気持ち良い？」

はい、気持ち良いです。足裏の感触は勿論、匂いが破壊的過ぎで嬉しい。ああ、僕は今カワウソちゃん足裏に踏まれている。なんて最高なんだ、カワウソちゃんの体重を足裏越しに感じる度、足の匂いが脳神経を突っ突いて犯していく。

「な、何これ……人間の足って、こんなに臭いの……？」

「それにしても不思議い、人間って足で踏まれて喜ぶんだねー。一体、足のどこがそんなに良いの？」

「こんなに臭いものに踏まれて交尾するなんて、人間って凄い……」

どこがって、全てが！ 主に匂いが！ 誰だって、生きてりや臭くなる。特に人体の一番下にあって全身を支える足裏なんか一番臭くなる。僕はそれが好きなんだ。ああ、最早こっちが望まなくとも鼻が勝手に鳴ってしまふ。くすぐったさからか、カワウソちゃんの足指がちよっとびくって動いた。凄く可愛い。もうその挙動で脳が溶けそうだ。

「な、何で……どうしたんだらう、なんか急に恥ずかしくなってきたよお……」

「あはは、くすぐったーい。ねえ、何で鼻息が荒いの？ もしかして、匂い嗅いでる？」

そんなカワウソちゃんの顔やら仕草やら全部が可愛くて、まじまじと見ていた。するとそれに気付いたカワウソちゃんが、

カワウソちゃんが勘付いた。そう、最高に芳醇なカワウソちゃんの足の匂いを嗅いでいる。でも、自分の足がこんなに臭いのをカワウソちゃん自身が気付くかどうか……

「な、ななな何を見て……！ もういいもん、お兄さんは私の足に踏まれてろおおおおおお！」

「もしかして、私の足、良い匂いするのかな？ ねえねえ、どう？」

そのまま二回戦に突入した。

遂に聞いてきた！ これはもうチャンス！ 見開いた目で僕は力の限り頷く。すると、僕を散々虜にした足裏が離れた。

さっきよりも強めに踏まれた。足裏が更に顔に密着し、匂いも格段に濃厚さを増した。その分、さっき味わえなかった足裏の湿度や湿り具合も新たに味わう事が出来た。そして何より、足裏の細胞奥深くに逃げ込んだ匂いも吸い込む事が出来たのだ。

と、急に激臭が遠のいた。改めて見てみると、そこには何かを期待して目を輝かせているカワウソちゃんがいた。そして座り込み、もう片方の靴も脱いで、出て来た足裏を自らの顔にくっ付けて、匂いを嗅ぐ……

「もう、こんな匂いで興奮出来るなんて、人間って思ってたより変態なんだね。何だか、こっちまでおかしくなっちゃいそう」

……凄いや、カワウソちゃんが自分の足の匂いを嗅いでいる！ 何日間履き通したのかは知らないけど、相当な期間洗っていない匂いだった。その激臭がこびり付いた足裏を自分の顔にくっ付けて、匂いを嗅いでいる。これはこれで鼓動がやばいし、勃起も激しくなる。

カワウソちゃんからの誉め言葉が、可愛い声に乗せて耳へ届けられる。もう僕の全身はカワウソちゃんの足の匂いでいっぱいになっていた。

と、カワウソちゃんが物凄い勢いでむせた。やっぱり自分で嗅いでも臭かったか。でも、何だろう、フレンズと化した可愛い子

「何だか恥ずかしいけど、こうなったら私の足の匂いを全部吸い取ってくれるまで出してあげないもん！」

番匂いのきつい部分を、ゼロ距離で動かして匂いをせっせと送り込んでくる。するとさっきの何百倍もの激臭が入り込んで来て、頭が真っ白になる。途端に快楽が身体の奥底から物凄い勢いで湧き出て来た。

「どうかな、私の足の匂い？ 人間さんって、こんな匂いでも興奮しちゃうんだね、信じられないねえ」

遂にカワウソちゃんの言葉責めが来た。全てが甘美だ。既にカワウソちゃんの足の匂いという名の沼に溺れ、全身が快楽に染まりきったこの身体に、この言葉は非常に効いた。最早耳にも嗅覚が宿ったと云うべきか、カワウソちゃんの声そのまま足の匂いとして変換されてしまう。

「ほらほら、もっと嗅がなきゃ交尾出来ないよお？」

カワウソちゃんが更に攻め立てる。足指の動きが艶やかになつて、匂いも留まる事無く成長を遂げる。カワウソ同士の交尾は多分人間のそれと一緒にだろう、でも人間とカワウソの交尾はこうだ。人間がカワウソの足の匂いを嗅がされるんだ。最高じゃないか。性器なんか要らないからエロくも無い……ってのはちよつと暴論だけど、足の匂いで繋がれるなんて最高の交尾いやああああ！

いきなり僕のちんこをとんでもない快楽が襲った。僕の両手はいつの間にかカワウソちゃんの足裏を離さんと顔に押し付けているのに、この感触……

「えへへ、分かつちやった？ 尻尾でお兄さんの変態ちんこをしこしこしてるの！」

そうだ、尻尾の存在を忘れていた！ にしても器用に扱くなあ、まるで手コキと変わらないクオリティに腰が抜けそうになる。その間にも足の匂いは止めどなく鼻腔を猛スピードで駆けて行く。もう駄目だ、狂いたい！ そろそろフィニッシュ！

……あれ？ おかしい。まだイってない。それどころか、たった今まで狂っていた匂いが感じられなくなっている……

それもその筈、カワウソちゃんの足裏が僕から離れていたのだ！ 足を高く上げて見せびらかす様に、指を躍らせながら遠ざかっている。

「簡単には交尾させてあげないよ？ 人間さんは変態だから、す

ぐイっちゃったら危ないもんねえ」

そんな！ ここまで来てそんな焦らしプレイなんて、殺生にも程がある！ 必死で鼻を鳴らすけど、到底届かない。足裏が挑発に踊っている。手を伸ばして足を引き寄せようとしたけど、快楽にやられきった身体は動かす事が出来ない。

しかも、尻尾は僕のちんこを扱き続けている。もう今にも射精しそう。嫌だ、足の匂い無していくなんて、耐えられない！

「ほらほら、嗅ぎたいかなあ？」

踊る足裏を披露しながらカワウソちゃんの艶やかな声色に乗せたこの言葉。僕は必死で頷いた。するとカワウソちゃんは、

「あはは、おもしろい！ しょうがないなあ、じゃあフレンズになつて初めての交尾記念だよ、特別に私の足の匂いで、イっちゃえー！」

そしてようやく、足裏が戻って来た！

そこからはもう、凄かった。カワウソちゃんの足の匂いが甦ったのは勿論、今度は足指が僕の鼻を完全に覆ったのだ。するとカワウソちゃんの体内に潜り込んだ匂い全てを足裏から摂取出来た。しかも鼻がすっぽり覆われているから、邪魔な空気が一切無い、純粋な足の匂い百パーセント。やった！ 臭い！ 最高！

僕の中の快楽は猛烈に暴れ続ける。体内の全ての臓器がカワウソちゃんの足の匂いと結婚し、子供を産み、その子供同士がまたカワウソちゃんの足の匂いにやられて孫を産み、一つの集落が出来た。こんな感覚、今まで味わった事の無い歓喜の瞬間。そして遂に、快楽のダムが崩壊して――

僕は射精した。ちんこからは物凄い量の精液が噴出されて、脳味噌も一緒に吐き出してしまった。快楽を制御出来ない身体がぐがくと震える。視界が真っ白になり、カワウソちゃんの足裏、僕の交尾相手だけがくつきりと鮮明に映る。

その快楽が退いて正常に戻るまで、一時間以上もかかった。でも、凄かった。まさかこんなに足の臭い子と一緒になれるなんて。やっぱ僕の旅プランは間違っていないかった。

「わあ、すっごい！ お兄さん、私の足の匂いでいっぱい出しちゃったねえ。交尾成功だね！」

カワウソちゃんが僕の射精を褒めてくれた。そしてそれを称える様に、足指が僕の鼻を優しく撫でてくれた。ああ、この匂い。可愛い。

……それはそうと、交尾が終わったというのに、カワウソちゃんの足裏はまだ僕の顔にくっ付いている。匂いもさっきより増している。何故だ。

「……もしかしてお兄さん、この一回で終わったと思ってる？」

……えっ

「言っただよね、私の足の匂い全部吸い取るまで帰さないって」

ああ、そういえば何かそんな事言っただよな気が……と、突如また座り込んで足裏を自分の鼻にやり、また戻って来た。

「ほら、私の足、まだ臭い。という事は、まだ続くって事だよなえ」

……あー、そっすか。

「それじゃ、もう一回だね！ 足が臭くなくなるまで、何回でもやるからね！ あっ、言っとくけど、カワウソの交尾は結構長引くからねえ」

……こうして僕は、精液を搾り取られて枯れるまで、毎日カワウソちゃんの足の匂いに狂わされる事になった……

終

春風連続けもシコ事件簿 (被害者は全てあなた)

タマリリス

「飼育員、ちゃんと聞いていますのですか」

パークの長であるアフリカオオコノハズク博士があなたに問いかけた。図書館の窓から、春の心地よい風が吹いてくる。

「ジャパリまんの重要な材料のひとつ：『賢者草』。それが今年の異常気象のせいで、実をつけなかったのです。だから今年のジャパリまんには、『けもしこ鎮静作用』がないのです」

あなたの呼び名は『飼育員』。三年前に突如ジャパリパークに出現した、パーク唯一の人間の男性だ。以前の記憶は全くない。ただ、パークのあらゆる人工物の整備の仕方、そして様々な道具の作り方は知っている。それ故に、大勢のフレンズ達にひっきりなしにあれこれ頼られている。今もちょうど博士と呼ばれ、図書館の掃除をさせられていたところだ。フレンズ達はあなたを何故か『飼育員』と呼び慕っているようだ。別に飼育などしていないのだが……。しかし物知りなあなたでも、『けもしこ鎮静作用』などという言葉には聞き覚えが無かった。

「お前が毎年の春、無事に過ごせているのは、賢者草のおかげなのです」

具体的にどういふことなのか？

「一般的な動物は春に猛烈な発情期を迎えます。一方ヒトは一年中まんべんなく発情期だそうす。そして我々フレンズは：一年中発情期でありながら、春はさらに猛烈に性欲が増すのです」

そんな話は聞いたことが無い。

「それはそうなのです。今までは、ジャパリまんに含まれる賢者草の実のけもしこ鎮静作用によって、性欲を抑制されていたのですから」

：つまり、賢者草が採れなくなったということとは：

「我々フレンズは今年、一切抑制されない本来の性欲がむき出しになる、ということす。お子様のフレンズには発情期は来ませんが、おとなのフレンズはヤバいのです。もんもんむらむらえちえちなのです」

にわかには信じがたい。フレンズ達はみんな清楚で、健全ない

い子達ではないか。目の前のコノハ博士だっけいつもと様子に変わりがない。

「それは私が清純で理性的な淑女のフレンズだからなのです」

お子様のフレンズだからでは？ ……などと失礼な仮説があなたの頭をよぎったが、発言しないでおいた。

「：幸い、交尾の仕方を知っている者は五人しかいないのです。図書館秘蔵の『ほけんたいいく』の本を読んだことのある奴は：私、お前、助手、かばん、そしてもう一人は、えっと：名前忘れましたが、地味な奴です。：はい、念のためこれを渡しておくのです」

あなたは錠剤包装シートに入った飴をいくつか受け取った。

「これはじゃぱりピル：フレンズ専用避妊薬なのです。ロッジの倉庫の奥にしまってたのを見つけたのです」

あなたは、なぜこんなものがロッジの倉庫にあったのか、と聞いた。

「知らないのです。パークを作った者に聞くのです。話は終わります」

忠告を終えると、コノハ博士は自室へと戻っていった。あの清楚なフレンズ達が、発情する？ ……にわかには信じがたい。コノハ博士は心配し過ぎてはないか？ ……あなたはそう思いながら、言いつけられていた図書館の掃除を完遂すると、森の中へと散歩に出掛けた。

夕方、あなたは森の中で薬草を集めていた。すると：

「はあ、はあっ！ 飼育員、さんっ！ さんっ！ あんっ！」

森の奥から何やらくぐもった声が聞こえてきた。声のする方へ歩み寄ると、草陰にうずくまっていたフレンズの背中が見えた。短いスカートの中へ突っ込んだ右手を激しく小刻みに動かしているようだ。大丈夫ですか、と声をかけると：

「飼育員さんっ♡あんっ♡い、イクうっ♡イっ…き、きやあ!」

フレンズは驚いてあなたの方を振り向いた。

「し、飼育員さん…! はあ、はあ…っ。…!? あ、きやあっ!」

少女は股間から右手を離し、スカートをぎゅっと押さえた。頬を紅潮させ、荒い息遣いであなたをじっと見つめている。真面目そうな雰囲気でありながら、パーク随一のスカートの短さが目立

つフレンズ。ロッジの管理人、アリツカゲラであった。

「あなたはフレンズ達に囲まれて過ごし、気づいたことがある。それは、フレンズ達はあなたと違って下着類は一切身に着けていないことだ。そう、ミニスカ姿で無邪気にはしゃぎ回る大勢のフレンズ達は、皆ノーパンノーブラである。目の前の超ミニスカ美少女もまた、あなたの視界からはスカートの中の股間が丸見えてあった。あなたは自身のペニスガムクムクと勃起するのを感じ、前かがみになった。

「うう……。み、見ました、か？私が、その、ひとりで……してる……とこ……」

「恥ずかしがっている少女に、あなたは「見ていない」と答えた。

「……はあ、はあ……。飼育員さんっ……♡」

アリツカゲラの様子を見たあなたは、風邪で熱でもあるのだと思いい、彼女をおんぶしてロッジへ連れて行こうと提案した。

「え!? お、おんぶ……!? いいんですか!?」

嬉しそうに尋ねてくるアリツカゲラに、あなたはもちろんと返し、おんぶした。後ろからぎゅーっとおんぶしめられ、背中に柔らかくて大きな膨らみが押し付けられる。

「はあ、はあ……。え、えへへ……。飼育員さん……。っ♡んっ、♡んっ……。♡」

熱い吐息があなたの首筋に当たる。あなたは先ほど見てしまったぐしょ濡れの女性器を忘れようとしながら歩いた。だがあなたの股間はピンピンにテントを張ってズボンを押上げ、鎮まる気配がない。

空がすっかり暗くなった頃、あなた達はロッジへ到着した。

「介抱してくれてありがとうございます……。はあ、はあ……。っ。そうだ、今夜はロッジアリツカに泊まっ……てはいいかがですか？ 飼育員さん……。っ」

あなたは鍵を受け取ると、案内された部屋へと足を運んだ。アリツカゲラはあなたの目の前でベッドメイクを始めた。前に屈む度に超ミニスカートが捲れてお尻が丸見えになる。女性器の割れ目から太腿へ透明な粘液が伝っているのが見えた。あなたの男性器は再びフル勃起した。まるで少女の雌穴へ入りたがっているかのように。

「ではどうぞ、ごゆっくり♪」

少女が去った後、あなたはシャワーを浴び、寝間着に着替える

と、ベッドに横たわった。灯りを消して目を瞑ると、アリツカゲラのぐしょ濡れの女性器が思い浮かんでしまう。……ちんちんが刺激を求めている。ものすごく自慰がしたい。だがあなたは欲望を堪えて我慢した。

あなたは己のペニスがなぜ勃起するのか知っている。交尾するためだ。しかしフレンズを妊娠させるわけにはいかない。……三年前、あなたは一度だけ、あるフレンズのことを思い浮かべて自慰をしたことがある。だが自己嫌悪と罪悪感からオナ禁を誓い、それ以来一度も自慰をしていない。ジャパリまんを毎日口にしているうちに、ムラムラすることは無くなっていった。けもしこ鎮静作用のおかげだろう。

……だが、今あなたは三年ぶりに、自慰がしたくてたまらない衝動に襲われていた。いや、自慰どころか、アリツカゲラと交尾がしたくて仕方がない。さつき見たぐしょ濡れの女性器へペニスを突っ込んで激しく腰を打ち付け、射精したくてたまらない。……あなたは性衝動を我慢し、股間をピンピンに立たせたまま、やがて眠りについた。

「んっ♡あっ♡ああっ♡しいくいんさん♡しいくいんさあんっ♡あっ♡」

あなたは高く上ずった喘ぎ声を聞きながら目を覚ました。腰の上でなにか重いものが上下に動いている。それに股間が凄く気持ちいい。

「はっ、はあっ、ああいくっ♡いっ……。んんん……。っ♡♡♡」
目を開けると、アリツカゲラがあなたの股間に跨り、恍惚の表情をしながら背を仰げ反らせてびくびくと痙攣している姿が目に入った。

「あ……。あへえっ……。♡ぎもちいいっ……。れすううっ……。♡」

あなたの股間は少女のスカートに隠れて見えないが、熱くてぬるぬるしたもの包まれ、ぎゅうぎゅうと締め付けられる感触がある。

「んっ……。飼育員さん……。♡もっつと、もっつとおっ……。あっいい……。♡はあんっ♡」

アリツカゲラは蕩けた表情で喘ぎ、豊満な胸でブレザーをゆさゆさと揺らながら、腰を上下に動かしている。スカートの中から

ぐちゃぐちゃと音がする度に、あなたのペニスは上下に激しく扱かれ、先端が何かにこんこんと当たった。三年前の自慰とは比べ物にならないほど気持ちがいい。あなたはアリツカゲラへ、何をしているのか、と尋ねた。

「はあっ、はあっ♡みてください♡なにしてるか、わかりますかあ？」

少女はスカートをたくし上げて股間を露にした。ぐしょ濡れの雌穴にあなたのペニスが入り込んでいる。どうやらあなたは、朝勃ちしながら寝ているところを騎乗位逆レイプされ、童貞を奪われたようだ。

「あっ♡こーび、こーびきもちいいれすっ♡ずっと、したかったあっ♡」

アリツカゲラはさらに激しく腰を上下に動かし、あなたのペニスを先端から根本まで全部使って雌穴の中を擦り、快楽を貪っている。

「あんっ♡ききう、もりであつたときい、わたしい、ひとりえつちしてたんですっ♡んっ♡しーくいんさんと、こーびするの、かんがえながらあ♡」

アリツカゲラは快感に身悶えし、喘ぎながら話し続ける。

「だいすきなしーくいんさんに、おんぶされるときい♡こーびしたくてたまんなかったですう♡あのおとおへやですっ♡としてましたあ♡」

「あんっ♡んっ♡でもっ、ゆびじゃものたりないですう♡しーくいんさんの、だんせーきいっ♡ゆびよりずっときもちいいれすう♡ああんっ♡」

やがてペニスの根元から、むずむずと射精の前兆が伝わってきた。このままでは膣内射精してしまう。あなたは慌てて抵抗し、少女へ自分の上から降りるように言った。

「ああ♡しーくいんさん♡すきっ♡すきですっ♡あっ♡いく♡またいく♡」

だが美少女はより一層激しく腰を上下に動かし、あなたのペニスを雌穴で扱いて責め立てた。あなたは気持ちよすぎてもう射精寸前だ。

「しい…くいんっ…さんっ♡あっ…いくっ…♡あああーっ♡♡♡♡」

アリツカゲラは絶頂に達し、背筋を仰げ反らせびくんびくんと痙攣した。雌穴はぎゅうぎゅうと蠢き、あなたのペニスを締め付ける。とうとう堪え切れず、あなたの中に溜まった大量の精液は勢いよく放出された。雌穴の一番奥へ精液がびゅるびゅると搾り取られていく。長い長い快感が続き、やがて射精は止まった。

「ぐすっ…ごめんなさい…ごめんなさい…。こんな、乱暴なこと…っ」

アリツカゲラはあなたを犯し童貞を奪ったことへの罪悪感から泣きながら土下座して謝っている。あなたは少女の頭を撫でて慰めた。

「…図書館で、交尾の仕方の本を読んでから…。ずっと、あなたと交尾がしたくてたまらなかつたんですっ…。好きです、好きなんです、飼育員さん。愛してますっ…。でも、私が独り占めするわけにはいきません。…他の子にも…」

「…それに、あんなことした私のこと、嫌いになりました…よねっ…？」

あなたは全く嫌っていないことを伝え、手を差し出した。アリツカゲラはあなたの手をぎゅっつと握り、愛おしそうに頬ずりした。

…半開きのドアの隙間から吹く風が、少女の髪をふわりと撫でた。「…あれ？ ドアは閉めてたはず…。建付けが悪くなつたんでしようか？」

「騒がしくすると常連客のお二人が起きちゃうので、こっそり…あなたとアリツカゲラは廊下を進み、玄関から外へ出た。

「いつてらっしやい、飼育員さん♪ お気をつけて」
アリツカゲラはロッジの玄関からあなたを見送った。すると突如風が吹き、少女の短すぎるミニスカートを捲り上げた。

「きゃあっ!？」
露になった股間は、たつぷりと注ぎ込まれた精液でまみれている。あなたは、飴をなめ終わったら早くシャワーを浴びるべきだと薦めた。

交尾の仕方を知っているフレんズはアリツカゲラの他にはいないはずだ。もう襲われることはないだろう。あなたはロッジを後にした。

アリツカゲラに筆おろしされてから三日後。

「ようやく来たわね！ 飼育員！」

ライブステージで、ロイヤルペンギンのプリンセスが出迎えた。

「ああ来てくれた！ どうも今回もお世話になりますう！」

マネージャーのマーゲイがあなたに駆け寄り、ぺこぺこ頭を下げる。

「おはより、飼育員くん。ジャパリまんたべる？」

フルルが差し出したジャパリまんを、あなたは受け取って食べた。

「飼育員って言葉、シークイーン：海の女王みたいな響きですね」

ジェーンが何か不思議なことを言っている。こんな子だっただろうか。

「ステージの機械が全部動かなくなったんだ！ 直してくれよ！」

慌てるイワビーにせかさながら、ステージの電源設備を確認すると、発電装置の駆動部が破損しているのを見つけた。あなたはマーゲイから貰った弁当をつまみながら、夕方まで作業を続け、発電装置の完全な修復に成功した。やがて電気は復旧し、機械は動き出した。

「す、すっげー！」

「すごいです！」

「さすが！」

「やっばりできる男ね！」

ペパプのメンバー達は、口々に感嘆と称賛の声を上げる。そういえば、だれか一人足りないような……

「お、おつかれ、さまっ。飼育員。……し、シャワー、浴びてくるといぞ」

ペパプのリーダー、コウテイが物陰から姿を現した。顔を赤くし、内股をもじもじさせながらあなたを見ている。特大のポリウムを誇る胸の膨らみと、ハイグレオタードにくっきりと浮き出るボディライン、そして性器が見えないか心配になるほどギリギリな鼠径部に、あなたの視線はちらちらと寄ってしまう。……三年前、ペパプライブを初めて観たとき、あなたはコウテイの煽情的な姿が脳裏に焼き付いて離れなかった。そして、その日の夜中

に草陰でこっそり己のペニスを扱き、射精した。それ以来あなたはオナ禁を誓った。コウテイのことも、できる限り性的な目で見ないように意識している。しているのだが……

「ど、どうしたんだ……。シャワー、浴びないのか？」

「皆さん、せっかくステージが直ったので、練習しましょう！」

ジェーンに促され、ペパプ一同はステージでライブの練習を始めた。練習を見学するあなたは、必死に邪念を払おうとした。しかしあなたの視線は、どうしてもコウテイに注目してしまった。

コウテイは練習後、もじもじしながらあなたにバスタオルを渡した。

「はい。お疲れ様、飼育員。本当に頼りになるな」

コウテイはうっとりとした表情であなたを見つめている。

「コウテイさんはいつもあなたのことを褒めてますよ！ さっきのお弁当も、今朝コウテイさんが早起きして作ったんです！」

「な……マーゲイ！ ばらさないで……！ ……その、美味しかったか？」

あなたが美味しかったと言うと、コウテイは嬉しそうに満面の笑みを浮かべた後、慌てて顔を手で隠した。

「おやおや、照れてますねえコウテイさん！ ふひひ……！ 萌えですう！」

「て、照れてない！ 鼻血を出すなマーゲイ!!」

あなたはコウテイに礼を言い、シャワー室へ向かった。脱衣所でシャツを脱ぐと、入り口のドアの向こうからコウテイの声が聞こえてきた。

『ふ、服は置いといてくれ。私が洗っておくぞ』

ありがたい。あなたはシャワールームへ入り、熱い湯を浴びた。フレンズはサンドスターによって体表の老廃物を取り除かれ、体が清潔に保たれるため、湯浴みの必要がない。だがシャワーを浴びると疲れが癒えるらしく、毎日フレンズ達が利用しているそう

だ。

シャワーを浴びている最中、あなたはコウテイの姿ばかり思い浮かべていた。邪な欲望を必死に払おうとしていたが、雄の本能は激しくコウテイを求めた。あの胸を揉みしだきたい。あの股間にペニスを挿入したい……あなたは自慰をしたくなる衝動に抗い、耐えていた。

溺れてしまつては、いづれ餓が完全に無くなる。あなたは図書館に行き、博士に相談をした。すると博士は助手とともに事態の調査を始めたようだ。

「数日後、図書館にはあなたと共に、四人のフレンズが集まっていた。」

「真つ先に思いつく原因は……！ お前が言いふらしたことです！」

「い、言いふらしてません！ この縄ほどこいでくださーい！」
ロッジから連れ去られてきたアリツカゲラは縄で縛られている。足をじたばたと動かしており、スカートの中身がちらちら見える。

「あの……アリツカゲラさんもこう言ってますし、離してあげたほうが……」

ヒトのフレンズであるかばんがアリツカゲラを心配している。あなたは、アリツカゲラが他の宿泊客にばれないようにこっそり帰してくれたことを主張し、アリツカゲラを擁護した。

「ううむ……どうやらこいつはシロなのです」

助手ことワシミミズクは、アリツカゲラの縄を解いた。

「しかし、とすると誰が……？ 他に知っているものは本当にいないのです」

「パークの外から誰かが教えに来た？ ……いえ、するとラッキーさんが真つ先に知らせに来ますよね……」

交尾の仕方を知っている四人のフレンズ……博士、助手、かばん、アリツカゲラは議論を始めた。だが、『誰が、どうやって交尾の仕方を知り、フレンズ達へ広めたか？』……その疑問に対する回答は出ないままだ。

「はかせ、もう実行犯を捕まえて吐かせた方が早いのでは？」

「駄目なです助手。シロサイを捕まえていっばいくすぐりましたが、一向に吐かないのです。……なんてこんな頑なに口を閉ざすのですか！」

「乱暴なことはやめましょうよ！ ……うう、フレンズさん達、どうして……」

あなたは、これまでの情報からある仮説を導き出し、提唱してみた。

「……ま、まさか。そいつが犯人だというのですか……？」

あなたは図書館から出ると、パーク中を探し回り、容疑者を探した。

「……追い詰めましたよ！ もう逃げられないわ！ 観念しなさい！」

波の音が絶え間なく聞こえ、潮風が吹く断崖絶壁の崖の上。あなたとアミメキリンの2にん二人は、容疑者を崖へと追い詰めた。「……博士と助手とアリツカさん、かばん。四人は確かに、本に載っていた交尾の仕方を誰にも話しませんでした。私も分かりません！ しかし……たった一つだけ、本を読まなくても、やり方を知ることがあります！」

キリンは容疑者へ虫メガネを向けながら語る。

「それは、飼育員さんとアリツさんの交尾を目撃することです！ それが出来たのは、当時ロッジに泊まっていた二人の客に絞られます！ 私以外なら……残るのはあなた一人だけです！」

「……さあ、私は目撃していません。寝ていたかもしれないね」
容疑者は、肩から下げた大きな鞆を触りながら言い返す。

「いえ起きてました！ あなたは耳がよくて根が優しいので、アリツさんの喘ぎ声が聞こえたら心配して様子を見に行つたはずですよ！ 飼育員さんが襲われた後、閉めたはずのドアが開いていたことが証拠ですよ！」

「……なるほど、覗いたかもしれないね。しかし、私がいいたい何のために、フレンズ達に飼育員くんを襲わせたというのかな？ 動機がないよね」

「いいえ、動機ならあります。それにあなたは飼育員さんを襲わせたわけではありません。……『襲いたくなるような衝動を与えた』のです！」

「どういうことかな？」

「飼育員さんを襲ったフレンズ達には共通点があります。それは皆、『おとなのフレンズ』だということですよ」

「おとなのフレンズ……？ それがどうかしたのかな？」

「より具体的に言う……『子供っぽくないフレンズ』です。そう……『子供向けの漫画には興味を持たないフレンズ』ということですよ！」

「……なるほどね」

「あなたの子供っぽい漫画は、彼女達に興味を持って貰えなかった。：そんな時、アリツさんと飼育員さんの交尾を目撃した！あなたはその様子を漫画にして：おとなのフレンズ達へ見せて回ったのです！つまり、無名な作家の可哀想な動機だったのです!!」

キリンは容疑者を指さし、自信満々に言い放った。

「：でも、彼女達からは何も証言が得られてないそうじゃないか」
「ええ、飼育員を襲ったフレンズ達は皆、交尾の仕方をどこで知ったのか聞かれても、頑なに口を閉ざしたわ。その理由は、あなたがこう言ったからです！『この漫画のことが博士にバレたらもう続きが描けなくなる』：と！ 続きが読みたいフレンズ達は黙るしかなかった!」

「：証拠はあるのかな」
「その鞆の中を見せてください。その中身が、あなたが犯人だという動かぬ証拠です！ どうですか！ タイリクオオカミさん!」

「：お見事だ。随分やるようになったね、キリン。嬉しいよ」
オオカミの鞆の中からは、推理通りにエロ漫画の原稿が出てきた。：ちなみにこの見事な推理は、あなたが考えてキリンへ教えたものだ。

「それで、私を追い詰めてどうするつもりかな？」
「どうって：その漫画は没収します!」

「何故かな？ 私は彼女たちに、飼育員くんを襲うように指示した覚えはないよ。私はただ、えっちな漫画を描いて読ませただけ。飼育員くんを襲ったのは、まぎれもなく彼女達の意思だ」

「うっ：!? て、でも、悪影響がある有害図書です! だから：!!」
「それは漫画が悪いんじゃない、影響を受けた者が悪いんじゃない?」

「：どうしてそこまで、かたくなにえっちな漫画にこだわるんですか!」

「：エロ漫画はいいね。大人のフレンズ達の食いつきが、ギロギロとは段違いだよ。そう、エロは素晴らしいものだ。：誰にも邪魔はさせない!」

そう言うと、なんとオオカミはあなたを押し倒し、のしかかっ

「な、何をやるおつもりですか、オオカミ先生!」
「そこで見ているといいよ、キリン。大人の愉しみをね」
オオカミはあなたのズボンと下着を脱がせ、ペニスを露出させた。

「はあ、はあ：。飼育員くん、私もずっと挿れられたくてたまらなかつたんだ! 君の、本物のこれをつ：! 想像だけじゃもう我慢できない!」

オオカミはあなたのペニスの上に乗る、スカートをたくし上げた。無論オオカミも下着を穿いていない。オオカミは腰を前後にくねらせ、濡れそぼった女性器の割れ目であなたのペニスの裏筋を擦り始めた。

「あ、はっ：きもちいっ：。ん、んっ：」
あの凛々しいオオカミが、あなたのペニスに股を擦り付けて喘いでいる。刺激を受け続けるあなたのペニスはむくむくと勃起し始めた。

「は、はわわ、さ、させないわ、オオカミ先生!」
「いいことを考えたよ、飼育員くん。私と交尾で勝負するんだ。私が先に絶頂に達したら君の勝ちだ。おとなしく原稿は渡そう。だけど君が先に射精したら私の勝ちだ。この場は見逃してもらおうね」

あなたは、オオカミの勝負に乗った。
「ふふ：アリツさんやコウテイ達が君を犯すところ、私はじっくりと観察していた。：すぐにひいひい言わせてあげるよ、私の腰使いでね」

オオカミは自身の雌穴へ、あなたのペニスを挿し込んでいく：。
「あ、きもちいっ：きもちいっ：きもちいっ：きもちいっ：」

奥まで入ったとき、オオカミは気持ちよさそうに喘いだ。
「んっ♡んっ♡どうだい、アリツさんとどっちが気持ちいい? あっ：♡」

オオカミはゆっくりと腰を上下に動かし始める。

「あ、あわわわわわ：! こ、こんなすごいことを：! ごくり：」

キリンは顔を真っ赤にし、あなたとオオカミの勝負を見守った。

「はあーっ♡はあーっ：♡うああああっ：♡もうだめえっ：♡」

ンズ達にきちんと性教育と情操教育をしなくてはならないので
す」

「うう…では、皆に交尾を禁止するのです！ 交尾したら罰なの
です！」

「博士。何でもかんでも禁止すれば収まる問題ではないのです。
無理矢理抑圧しては、いずれ猛反発を受けすべてが台無しに
なるのです。否定するのではなく、受け入れて向き合わなくては
いけないのです」

「…今の私には難しい問題なのです。もう少し考えさせてほしい
のです」

博士はオオカミへ原稿を返すと、図書館の奥へ去っていった。
「すごいです、助手さん。大人の意見ですね！」

「当然です、かばん。私はおとなのフレンズなのですから。えへ
ん」

「…ありがとう、私が一生懸命描いた原稿…守ってくれて…」
「私はおとななので」

何はともあれ、どうやら一件落着のようだ。
「そうだ飼育員さん、ちょっと奥の部屋に来てもらえますか？」

かばんがあなたを呼んでいる。何だろうか？ あなたはかばん
へ付いていき、狭い部屋に二人で入った。そしてかばんに要件を
聞いた。

「…飼育員さん。…どうやらばくも、鎮静作用が切れたみたいで
す」

かばんはあなたに抱きつき、胸板へ頬を擦り付けた。
「他のみんなとやったこと…。ぼくにもしてください…♡」

頬を紅くしたかばんは、雌の獣の目であなたを見つめている。
「抜け駆けはするのです。博士に内緒でこっそり共犯するので
す」

部屋のドアが開き、ワシミミズク助手が入ってきて、あなたを
押し倒した。…どうやらフレンズ達とあなたの春は、まだまだ続
きそうだ。

くおしまい

ちいさな鳥たちの庭

たると

僕が念願かなくてジャパリパークで働く事になったのは、つい先週の事だ。

昔から動物が好きだった僕は、大きくなったら動物園で働くという夢を胸に、今まで頑張ってきたのだった。そしてついに、ジャパリパークから内定が出た時など、思わず踊り出してしまうほど嬉しかった。

嬉しかった、はずなのになあ。

「やい新入り。とつとと掃除するのです」

「そうなのです。掃除は大事なのです」

「イタタ：杖でつつくのやめてくださいよ」

二匹：いや、二人に杖でつつかれながら、汚れている地面を帚で掃いている僕がそこに居た。そんな僕を杖でつついてくる二人は、ここジャパリパークの鳥エリアの長であるコノハズクの博士とワシミミズクの助手だ。彼女たちは暇を見つけては僕にちよっかいを出し、仕事に支障をきたさない程度に振り回してくるのだ。本当に長かどうか怪しいところではある。

「おや、津山クンお疲れさま。今日も仲が良いね」

「松なのです」

「お疲れ様です！ 仲が良いんですかねコレ？」

「そうなのです。松は勘違いしているのです。我々なりの躰をしているのです」

「はっはっは。そうかそうか。ところで、博士さんと助手さんはそろそろ見回りの時間なのではないのですかな？」

「おっともうそんな時間なのです」

「ついつい新入りいびりに時間を取られてしまったのです」

「やっばりいびりじゃないか」

「なんの事やら。それでは新入り。ちゃんと掃除をしておくのですよ」

バサバサと羽を広げ、どこかへ去ってゆく二人。そんな二人を見送ると、思わずため息が一つ。いかんいかん。ため息はいかな。

「それにしても、随分と気に入られたみたいだねえ」
「気に入られてるんですかね：邪魔されてばかりいるみたいないな気もしますよ」

その証拠に、先程せっかく集めた塵芥が羽ばたきの風ですっかり散り散りになってしまっている。それを必死になって集めてみると、松さんはカラカラと笑っていた。

「いや本当に。珍しいよ。彼女たちは結構人見知りするみたいだから」

「人見知りですか？ ええ？」

「前任者：今は居ないんだけど、随分と苦勞してたからね。その点、津山クンはどうやら最初から気に入られてるようだからね」

「なんでですかねえ。気に入ってるなら、もうちよつと優しくしてくれと嬉しいんですけど」

「まあまあ。その掃除が終わったら、休憩入っちゃっていいから」

「はい」

それじゃあ、と松さんは何処かへ行ってしまった。

ゴミを一カ所にまとめ、グイと腰を伸ばす。空は快晴で、雲一つない。

綺麗に拭いたベンチに腰を掛け、ベルトに差しておいたペットボトルのお茶を取り出す。一口だけ口をつけると、またぼんやりと空を眺めた。

憧れていたジャパリパークでの仕事にも、ようやく慣れてきたと思う。入ったばかりの頃は右往左往していたが、一か月もすれば多少は動けるようになるものだ。とは言うもの、まだまだ役職で言えば下っ端も下っ端。こうして掃除に精を出すぐらいしかする事がないというのも事実。

早く世話役に回りたいたいものである。

「ま、そのうちそのうち。焦る事もないか」

「パフィンちゃんもそう思いまーす！」

「おわっ」

いつの間にか隣にパフィンが座っていた。この子も僕に懐いていると言うか、偶々残ってしまった弁当を分けたらえらく懐かれてしまったというか。ついでに弁当の残りを上げるのはあまり良くないと怒られたりもしたが。

「ところでなにがそのうちなんですかー？」

「いやまあ色々だね？ パフィンちゃんはお散歩？」

「そうでーす！ おさんぼたのしいでーす！」

「元氣だねえ」

ポケットに入っていたジャパリまんパー（携帯餌）を半分渡すと、パフィンちゃんは上機嫌でジャパリまんパーをパクついている。頭を撫でると、嬉しそうに目を細めながらも食べ続けている。

「さてと、そろそろ事務所に戻らないとな」

「おかえりですかー？」

「うん。また明日ね」

「はーい！」

びよこびよこ手を振るパフィンちゃんに手を振り返し、掃除道具一式を担ぎ事務所へと向かう。がさがさと草木を掻き分け従業員専用口を開けると、靴についた泥を丁寧に落とし廊下を進んだ。

廊下を抜けると、すでに人もまばらな園内通路へ出る。時間的にもそろそろ閉館だ。隅っこにおいてある台車に掃除道具一式を乗せると、人の流れとは逆方向に向かつて滑らせる。大きな窓ガラスの向こうで、フレンズ達が遊び道具で遊んでいる姿が見えた。そして、その隣で一緒に笑う従業員の姿も。

僕も早く、あの場所へ立ちたい。

急いでどうなる話でもないけれど、やっぱり早く立ちたい。

「と、その前に片づけ片づけ」

それに今のままだと、あの小うるさい二人組の隣に立つことになりそうだ。

備品用具室に掃除道具を仕舞い、着替えに事務所へ戻る途中、

松さんに声をかけられた。

「津山くん、ちよつといいかい？」

「はい、なんですか？」

「来週から、夜勤を頼みたいのだが、いいかね」

「あ、夜勤ですか？ 大丈夫ですよ」

元々、入社時の説明で夜勤が有る事は知っていた。もちろん夜行性のフレンズ達も居るのだから当たり前と言えれば当たり前か。

しかしここにきてから初めての夜勤か。すこしワクワクするな。

「本当は希望者から選ぶんだけどね。今回は津山くんは白羽の矢が立った訳なんだけど、何か聞きたいこととかあるかい？」

「…希望者から？」

「ああ、夜はちよつと特殊だね。普段とは違うフレンズ達の姿が見られるから『是非私が！』って人が多いんだ」

「なるほど。仕事内容的にはどうなんですか？」

「そこは心配いらさないさ。まずは慣れてから。それから色々やってみて感じかな？ 準備に必要なものは特に無いからね。睡眠と食事をしっかり取るくらいだ」

この時、初めての夜勤で少し浮かれていた僕は、大事なことをすっかり聞き逃がしている事に気付かなかった。

仕事の具体的な内容が一切わからないまま、夜勤に臨むことになる事の怖さ。

それを知るのは、週が明け、普段とは違う顔を見せる夜のジャパリパークへ足を踏み入れてからの事だった。

「まだ夜は蒸すなあ」

すこし生ぬるい夜風を浴びながら、正門口から事務所へと向かう。普段なら入場口なのだが、夜間は閉鎖され、裏の方にある門が入場口になるらしい。

夜にジャパリパークへ入るのは初めてだったので、いつも通りの風景なのだがいつも通りで無いような気もしてくる。見慣れた看板も、夜に見ると空恐ろしいものに見える。見慣れた

ふと、前から人影が見えた。他の従業員だろうか。極力光源が抑えられている為、結構近づかないと解らないものだ。お化けでなければいいんだけど。

随分と近づき、びよこびよこ動く大きな耳が見えた。どうやらフレンズのようだ。夜間は場内散歩もしているみたいだ。

「おっ、うえっ?!」

「あれえ見かけない顔だねえ。新入りさんかな？」

普段なら洋服（毛皮と言いついて張っている）を着ているのだが、何か今はやたらと布面積の小さい、マイクロビキニと呼ばれるものを着ていた。

鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていて、ニヤニヤと蠱惑的な表情で彼女は近づいてきた。ぶるんぶるんと揺れる胸を注視するのもしないと思いい、視線を逸らしたところだが、気が付くと見入っている自分がいた。体は正直だった。

「どうしたのかなあ？ し・ん・じ・ん・さ・ん・ん」

「い、いやっなんでもないですっ？」

声が上がっている。何とか、童貞丸出している。

「失礼しますっ」

「ああん、もう。美味しそうだったのになあ♥」

後ろから不穏な科白が聞こえてきたが、気にせず速足で事務所へ急ぐ。

もちろんこんなスピードじゃあっさりと追い付かれるのだが、彼女の興味はどうやら他に移ったようで、ちらりと後ろを見た時には姿が無かった。

ホッとした様な少し心残りの様な気分、場内を進む。ちらりちらりとフレンズ達の姿が見えるが、やはりどのフレンズも布の面積が小さくなっている。

換毛期ならば考えられる：かもしれないが、全員が全員同時には考えられない。もしかして、もしかしてちらっと思いついた事なのだけれど。

「普段とは違うフレンズの姿って、こういう事なのか？」

松さんに問いただしたい所だったが、彼は夜勤組に入っていないかと思っただけだ。

聞くのは明日にするとして、今日一日大丈夫だろうか。なんとか事務所の扉までたどり着き、思わずつんのめりながら扉を開けた。

中には余り見た事のないスタッフ達が談笑している。やはり昼と夜じゃスタッフも違うのか。笑い声が一瞬止まり、人数は少ないものの事務所に居る全員の視線を集めてしまった。う、少し恥ずかしい。

全員、と言ったがどうやらまだ居るらしい。ごちゃごちゃとした書類やらが乗った机に声がかかると、もぞもぞと書類から頭が飛び出した。

最初は黒い塊が出てきたかと思っただが、ズルリと這い出てきた姿は、だらしなく白衣を羽織り、黒いシャツを着た背の高い女性だったことに驚いた。

「寝てたわ：すまんすまん。君が津山クンかい？」

「は、はいっ！ よろしくお願ひし：ます」

近づくと、ちよつとばかり、臭った。ああ、酷い風邪をひいて何日も風呂にも入らなかった時はこんな臭いがした気がする。僕もそんなに気にする方ではないが、外から人が来たらどうするのだろうか。

「んん？ なんだその顔は：ああ、臭いが気になるか？」

「えっいえっそのお：はい」

「正直だ君は。良いかいひとつ言っておくがこれは私の趣味でも嗜好でも何でも無い事だけは言っておく。夜のフレンズ達に合わせてこういう対策を取って居るだけだから勘違いするんじゃない。解ったな。大体私だって割と嫌なんだぞ何日も風呂もシャワーもない生活は。いや慣れてくれば多少は平気になるもんだが慣れてきただけで嫌なもの嫌なんだ。そこら辺も理解してくれと助かる。いや理解しろ。さてまず津山はどこに配属するんだっけか：ああ昼は鳥のフレンズのエリアの掃除がメインなのか。じゃあ鳥のフレンズのエリアで良いかね。姿形が変わるわけじゃないから慣れ親しんだ方がやりやすいだろ」

「ちよ、ちよつと待って下さい！ えーつと：色々と解りました」

「良いね。色々と解ってもらえればいい。何か質問は？」

「先程フレンズを見かけたんですけど、その、服装が：」

「ああ？ 夜なんだから：あ、もしかして何も知らないのか」

表情が全然変わらぬ課長と呼ばれた女性は、そうかそうかと頭を掻きながら机の上にある書類の山を漁る。が、どうやらお目当ての書類が見つからなかったようで、クソがつと悪態をつくながらこっちへ振り返る。

「口頭で説明するのも好きじゃないんだが、いいか、一回で覚えろ」

「はいっ」

「返事は良いな。津山は。まず昼と夜とじゃフレンズ達の服装が違う。見たらしいから詳しい事は言わなくても解るだろ。あんなるんだ。理由は解らんがな。で、私達の仕事は彼女たちの世話：何だが、あーこれも聞いておいた方が良いか。あんまり聞きたくないけど。津山。お前童貞か？」

「うええっ!? 何ですかいきなり」

「はよ答えろ」

周りにいるスタッフがニヤニヤとこちらを見ている：殆どが男性スタッフだからある意味助かった気もしないでもないが。

「ど、童貞：ですけど」

「そうか。じゃあまあ覚悟しとけ。アイツらそーいう匂いには敏感なんだよな。野生の力って凄いな。ついでに言うなら時期も悪い。普段なら一匹二匹に襲われるくらいなんだが丁度繁殖期でな。ちよいと気の荒い奴らも居るからがんばれ」

「：普段も襲われるって何ですか」

「さーてね。ムラムラしてるんじゃないか。ま、気を付けてれば大丈夫じゃないかな。多分。知らないけど。鳥のエリア担当って：ああ丁度居ないのか。ま、今日は程々に慣れる程度に仕事しとけ。気にしないから」

「ええー：わ、わかりました」

会話が終わると、丁度始業のベルが鳴った。各々準備を始めてるので、僕も急いで着替える事にした。それにしても、夜のジャパリパークはいつたいたどうなってるんだ？襲われる：のだろうか。

とりあえずいつも通りの清掃する格好へ着替え、掃除道具一式を台車に乗せた。パタパタと準備をしていると、後ろから課長がぬるりと現れた。

「なあ、ひとついいか」

「な、なんですか」

「鳥のフレンズ：博士と助手は、知ってるか？ 知ってるとは思うが」

「もちろん、知ってますよ。しょっちゅう杖でつつかれていますから」

「ほお。杖で」

「はい」

「じゃあ心配いらさないな。アイツらに気に入られてるなら。でもアイツらに合わないようにしろよ。昼より夜の方が元気だからな」

「昼間以上ですか：注意しておきます」

それじゃあと、さっそく鳥のフレンズのエリアへと向かう事にした。しかし、合わない様に：ねえ。普段の行動を考えると、中々に難しい。彼女達は視界が広い上、飛ぶ羽の音すら聞こえないのだ。幾ら警戒しても気が付けば後ろに居たりする。しかし、昼間より元気な位ならそこまで気にしなくてもいいだろうか。

「博士と助手も、あんな服装になってるのかな：似合わないさうだけど」

独り言ちて、トコトコと廊下を歩く。作業用入口の扉の施錠を外すと、ゆっくりと扉を開いた。昼間でも薄暗いが、夜になると更に何も見えなくなる。

勘と経験を頼りに壁伝いに進み、いつも休憩しているベンチを見つめる。目安としてはこら辺が良いだろう。さてと、まずは何処から掃除しようか：

「似合わない、と言うのは心外なのです。これ程までに似合うというのに」

「えっ？」

ガツンと、衝撃が走った。頭に。

良く解らない声が出て、そのまま倒れる。

最後に聞いた声は、博士だろうか。

それにしても、どこから現れたのだろうか。

というか、聞こえてたんだ。僕の独り言。

——ぼんやりした頭が、段々と冴えてきた。先程殴られた？ 頭をさすろうと腕を上げようとすると、ジャラリとした音が響き途中で止められる。手首の辺りに、鎖が繋がれている？

「え、いや、え、マジで？」

両方の腕、両方の足、四つとも鎖の様なもので繋がれているらしく、大の字に横になったまま身動きが取れなくなっている。更に。

「あれ、洋服着てない？ 何で？」
丸裸一歩手前、パンツ一丁であった。

「おや、目を覚ましたのです博士」

「おや、ようやくですか助手」

頭の上の方から、聞きなじみのある声が聞こえた。と言うより、もう呼び方で大分誰がいるか丸わかりなのだが。

「は、博士と助手か？」

「正解なのです。ついでに言うなら殴ったのは博士なのです」

「人聞きの悪いことを言わないでほしいのです。ちょっと眠って貰っただけなのです。少々乱暴ではありましたが」

「あれが少々なのか。で、でも一体何で？」

「おや、知らないようですよ博士」

「おや、知らなかったようですよ助手」

「何を？」

パチリと壁に着いている照明が点いた。先程より少し明るくはなったが、依然として薄暗い。窓の無い、余り広さのない部屋の様だ。壁はコンクリートが打ちっぱなしである。鉄の様な質感の扉が左に見えるが、本当にそれ以外何も無い。

異様な部屋の雰囲気、冷や汗が背中を伝う。しかし、先程から博士と助手の声が近くから聞こえるという事は、二人は同じ部屋の中に居るはず。それだけが、まだ少し異様な雰囲気から救ってくれている。

「な、なあ。二人とも。この鎖を外してくれないか？ 何時もの悪戯だろ？」

「はて、我々は悪戯などしませんか？」

「ええ。我々は悪戯なんてしませんもの」

ふわりと、目の前を影が飛んだ。丁度両脇腹辺りに着地をする、小さく冷たい手がびたりと胸の上に二つ、乗せられた。

「いつだって全力がモットーなのですよ。我々は」

「二人ともその格好は……！」

昼間見た時は、いつも通り暑そうな毛皮を着ていた二人。だが、今日の前に居る二人の格好は、さっき出会ったフレンズの様に、マイクロビキニと呼ばれる、布面積の低い水着に、白タイツを穿くというフェティッシュな恰好だ。

そろりそろりと胸を這う指先が、乳首の周りをくるりと捏ねた。

何度も何度も、甚振る様に弾かれ、思わず硬くなってしまふ。

「ちょ、ちょっと何するんですか……ん……」

「何するのか、ですか？ もちろん決まっていますよ」

「その為にお前を呼んだのですよ」

ついと手が離れ、二人の体が密着する。冷たい指先と違い、体温が高くすべすべとした肌。そして、妖しく光る眼から目が離せなくなった。

「発情期というやつなのですよ。ぺろり」

「エッチな事がしたくて堪らないのですよ。ぺろり」

「んあっ！」

ぺろりと、両乳首を舐められる。そのまま啄むように、ちゅっちゅっとならぬ吸われ、ピリピリとした刺激に声が漏れ出てしまった。

「んあっ……♡」

「んふ、感度良好なのです。ですがまだまだ。助手、アレを」

「了解なのです」

片方の乳首から助手が離れ、何かを口に含んだ。薄暗くて良く見えないが、あれはジャパリまん……か？ もぐもぐと咀嚼し、そのまま顔を近づけてきた。

「ちょ……ちよっとな！」

「んーふ♡」

「ほら、大人しく食べるのです。夜は長いのですよ」

「そんなこと言われ……むぐっ!?」

「ん……じゆる……んんー♡」

じゆるじゆると唾液を含んだジャパリまんが口の中に侵入してくる。細かく砕かれ、水分を多量に含まれているから思わず飲み込んでしまった。口の中に飲み残しが無いか助手の舌が所狭しと動き回り、舌と舌が触れ合う度、甘い刺激がじわじわと口の中に沁みこんでいくように感じられた。

「ぶわ♡」

「はあっ……はあっ……」

「では、二口目♡」

「うええっ!?」

息を整える間もなく、助手に口を塞がれる。飲み込む。三口目。飲み込む。

量的には、丸ごと一つ食べただろうか。すでに食べ終わっている

にも拘わらず、助手は僕の口をべろべろと舐め続けている。

「んちゅ：べろ：んんっ：♡」

「おやおや。助手が夢中になってしまったのです。仕方ないのです」

「仕方ないって：むぐ：ぶは：」

「ま、いいのです。美味しいところは博士がいただきなのです」

いつの間にか胸から離れていた博士は、此方に背を向けお腹の上に乗っかっていた。妖艶な笑みを浮かべると、伸ばした手が僕のパンツの上から掴んだ。

「うわっ！」

「ほら、こんなにも美味しそうなのです♡」

自分でも、今までにないほど勃起している事に驚いた。確かに助手からのキス責めにより興奮してしまったのは事実だが、こんなになる：か？

「ジャパリまんが効いてきたようですね。効果はバツグンなのです」

「ジャ、ジャパリまん：!?」

「裏技と言うやつなのです。とあるジャパリまんとフレンドズの体液を混ぜると、媚薬と精力剤になるのです。これを知ってるのは我々と：いえ、どうでもいい話でしたね。ともかく♡」

ぐりぐりと指先で先の方を刺激され、ビクビクと反応してしまふ。そんな僕が面白いのか、博士は楽しそうに弄り倒す。

「ふっ：んぐっ：くっ：！」

「我慢は体に悪いのですよ？ ほらほら、びゅーってするのです♡」

「くはっ：！」

お尻にグッと力を入れ我慢する。未だに現状を理解しきれない自分が、ここで射精したらまずいとブレーキをかけている。そんな僕を嘲笑うかのように、博士はどんどんと弄る指に力を入れてきた。

「んん中々我慢強いのです。ちょっと疲れてきたのです」

「うっ：し：」

「でも♡」

ズルリと、パンツを一気に脱がされてしまった。血流が溜まりに溜まったそれは、窮屈な場所から抜け出た勢いで下腹部を叩い

た。人より体の大きくない僕は、他人と比べてやはり小さい事もあつたか、余り見られたくは無かった。羞恥で涙が少しだけ出てしまったが、それさえも助手にべろりと舐めとられてしまう。

「これはこれは：ちゅちゅくて皮もかむってて：まるでお子様なのです♡それなのにこおくんなにピンピンでトロトロで：♡」

直接、触られた。初めて他人に直接触れられた。恥ずかしさと悔しさと惨めさで、苦しいほど胸がいっぱいになる。

「博士、あまり虐めるのも可愛そうなのです♡」

「そうですか？ こちらは虐められてこんなに元気になってるのです♡かうばーとやらもだらだら垂れ流して：くんくん：おふっ♡」

ちゅちゅことワザと音を立てながら扱かれている。こうなつたら意地でも射精しないと、そう決めた。一方的に虐められ、弄ばれ、このまま身を任せてしまったら、その時僕は僕で居られなくなりそう。

「この匂いも堪らないのです：♡ まずはお口で味わうとするのです♡」

「博士、次は私もなのです♡」

ぬろりと、生暖かい何かに食べられる感触。一瞬気をやりそうになり、たった一秒前の決意ですら碎かれそうな衝撃。

「じゅぶっ♡じゅぶっ♡ずろろろっ♡ちゅっ♡ちゅじゅっ♡」

「うあっ：！ や、やめっ：ひぐっ：♡」

「んんー♡♡じゅぼっ♡♡じゅぼっ♡♡」

目の前がチカチカと点滅する。博士の舌は縦横無尽に動き、僕の射精を促した。

負けるもんか、負けるもんか、負けるもんか——

「えいっ♡」

胸部に、衝撃。助手の指が僕の乳首をグイと捻り。間髪入れずに口づけされて——

「んおっっっ♡♡」

「んんー♡♡♡♡♡」

ビュビュと勢いよく出してしまった。溜まりに溜まった精液が、尿道を駆け上がるのが解るほどに濃く、脳髓を焼き切らなばかりの快楽をまき散らしながら、博士の口の中へと吐き出されてゆく。

「ごっ♥ごっ♥」

「じゅるるっ♥ごくっ♥ごくっ♥」

いつもならとっくに止まってはいるはずの射精は、まるで壊れた蛇口のように止めどなく放出し、三十秒もの時間をかけてようやく収まるほどだった。

「んぐっ…ふはあ♥まさかこんなに出るとは思わなかったのです。おなががちやぶちやぶ言っているのです」

「博士、交代なので♥私もごくごくしたいのです♥」

「クソっ…クソっ…♥」

「あむっ♥」

「んはあっ♥」

今度は助手の口の中へ。博士とは違い、丹念に丹念に、丁寧に丁寧に、ゆっくりと蕩けさせるように舌を動かしている。あれだけ出したはずなのに、もう出ないはずなのに、じわりじわりと精液が溜められていくように感じるのはジャパリまんの所為なのだろうか。

「新入りばかり楽しんでいないで、こちらにも気持ちよくするので♥」

「むぎゅっ!?!」

いつの間にやら僕の顔の上に立っていた博士は、勢いよく腰を落とした。思いがけない前方からの柔らかい圧力と、後頭部に接している柔らかくない板に挟まれた僕は良く解らない声を上げた。そんな事は露知らず、博士はスベスベの肌触りの良い股間部を鼻から口から刷り込むように擦り付けてくる。やけに水分を含んだ博士の白タイツは、何とも言えぬ芳香を放っていた。

「んむ、これは意外に…ま、サービスサービスなのです♥」

ピリリと、爪の先で白タイツを破く。楕円形に破れた白タイツの下からは、遜色ないほど白く透き通る博士の柔肌が露出した。そして何より、目を、引くのは。

「はい、あーん♥」

「あっ…うあ…はむ」

滴るほど濡れそぼつ割れ目に、思わず舌を挿入してしまったのは本能なのだろうか。今まで味わった事のない液体が絡みつき、熱い肉壁はキュンと締め付ける。

舌を動かしか柔らかい壁を抉る度、博士の口から嬌声が漏れる。

飢えた渴きを潤すように、何度も何度も舌を動かす。

「んむっ♥じゅるるっ♥ぶはっ♥もうそろそろびゅっびゅしちやいそうなので♥さきつちよがばんばんに膨らんでっ♥はやくお口にびゅーしちやうのです♥」

「助手、しっかりと啜えておくのですよ♥そーれ♥」

かぶりと啜えられた瞬間、博士が僕の乳首を強く捻る。不意打ちの強すぎる快楽に、またも僕は情けない声を出して果ててしまった。

「んぐっ♥」

「ごっ♥声がぶるぶる響くのですっ♥」

「じゅるるるるるっ♥ずぞっ♥じゅるるるっ♥」

一度出したというのに、依然変わらない射精量に、驚きを感じる事さえ出来なくなってきた。助手は満足そうに口を離すと、もぐもぐと味わう様に文字通り噛み締めていた。

「そろそろめいんでいっしゅとやらの時間なのです♥ほらほら、助手は退くのですよ」

「んんっ♥博士っ♥これとっても濃くって♥腰が砕けてしまうのです♥」

「んもう、世話の焼ける助手なのです」

くたりと僕の太ももに抱き着いて居る助手をよいしょと博士が抱きかかえ、僕の胸の上に乗せる。くちゅくちゅと口を動かしている助手と、目が合った。すると彼女はニコリと笑うと、白濁液塗れになっていく口を開いて、僕に見せつけてきたのだ。ドロリとした液体を、赤い舌先がぬるりと攪拌してゆく様は、とても淫靡で美しく、得も言われぬ興奮が胸中を奔走した。

視線の端で、白い翼が動くのを捕らえた。視線をやると、自らの秘部と胸をまさぐり、恍惚の表情を浮かべる博士が、熱り立つ僕の上で蹲踞している姿が見えた。ぼたりぼたりと指の隙間から洩れる雫が、あと少しで触れそうな先端を更に濡らしてゆく。一瞬、びくりと博士の体が強く震えると、とろりとした割れ目を両の手でゆっくりと見せつけるように広げた。てらてらとぬめる表面に、びとりと先端が触れる。

「まどろっこしい準備は無しなのです♥ばくばくなのです♥」

「あっ…」

思わず目を瞑ってしまった。瞳を閉じるほんの数瞬に見えた博

士の笑みは、きつと僕を嗤ったのだろう。完全に快楽を受け入れ、自ら腰を上げてしまった僕を。

にゆるりと、熱く蕩ける。口の中とは全く違う感覚が包み込んで。目を瞑ってしまったからか、余計に感覚が研ぎ澄まされていく。

熱い肉壁を掻き分け、ぎゅうぎゅうと締め付けられながら進んだ先。

全てが入りきり、終点に先端がたどり着いた時、瞼が開く。

眼前で助手が咳いた。

「どーそつぎよう、おめでとうなのですよ♥これはおいわいのしるし♥」

助手の口が僕の口を塞いだ。舌でこじ開けられ、どろりと液体が侵入する。

苦み走るそれは、先程僕が助手の口へ出した精液の味だ。

いつもの僕なら、何をするんだと頭を振り拒絶しただろう。

でも今は。もう堕ちてしまった僕は。

助手と舌を絡め、どろどろの液体を味わい飲み込んだ。

「んん♥やはりこのサイズが丁度良いのです♥お好きなのでごりゅごりゅやられるのも悪くはないですが♥これなら思う存分動けるのです♥」

ばちゅんっばちゅんっつとワザと音を立てる様に腰を打ち付ける博士。流石に二度も出した後なのですぐに済んではいるが、悪戯っぽく笑う助手が僕の乳首を指で挟み、断続的に刺激を与えてきているので、またもあつという間に吐精してしまうかもしれない。

「あひっ♥ちくびはらめれす：♥」

「そんなこと言っつ♥つねられる度にびくんびくんしてるのですっ♥」

「ほらほら、くりくりうってされるの好きなのですか♥」

ぐりぐりと博士は腰を前後左右にくねらせ、全方向からの刺激による搾精を目論んでいる。助手も片方はつねり、もう片方は舌で転がし、甘噛み、乳首イキによる吐精を目論んでいた。

「ぐりぐりやめえっ♥でりゅっ♥でちやいまひゅっ♥」

「出しちやうのですっ♥頭真っ白にしてびゅーびゅーしちやうの

ですっ♥」

「らめっ♥でりゅっ♥でりゅっ♥」

その時。

グイと力を入れた腕から、ガキンと重たい金属音がした。

驚きより先に、自分の腕が急に自由になり助手を抱きしめる形になった。

博士と助手は驚いてはいるもの、止まったのは一瞬で、またゆっくりと腰を前後し始めた。今度は足に着いている枷も衝撃で外れる。

「まったく、せっかくいいところだったのになのです♥」

「こんなに早く来るとは思わなかったのです♥」

理解の追いつかない僕の耳に、もう一つ金属音が響いた。今度は僕の体の近くではない。少し離れたところにある金属製の扉からだ。

ガチャリとノブが回る。

誰かが助けに来てくれたのか？

有り難いが、今の状況を見られるのもどうなのだろうか。

手枷足枷が無い今、犯されてしまったと説明するのは難しいだろう。

この蜜月が終わってしまう事に若干の後悔はあったが、如何やら最後の最後。

まだ完全に堕ちきっていない自分が、助けを求めるように手を伸ばした。

伸ばした、先には――

「あー！博士たちもう始めちゃってますー！」

「うわあ！すっごい匂い♥クラクラしちやう♥」

「わー人間さんです♥」

わらわらと、フレンズ達が部屋に入ってきた。どの娘も、僕が掃除を任されたエリアに居た娘達で。みんな、殆ど裸になって。

「どうやら我々だけの時間は終わりの様です。これからは、みんなて犯してあげる時間になるのです♥」

「さ、博士にびゅーびゅーしたらまたジャパリまんを食べさせてあげるのです♥次はふたつ、その次はみつつ♥」

「パフィンちゃんもたべまーす！ おにいさんにもわけちやいまーす♥」

フレンズ達の手が、体が、僕を包み込んでいる。

助けを求めると自体が、間違っていたのかもしれない。

ここから逃げ出すと自体が、間違っていたのかもしれない。

僕を見るフレンズ達の瞳は、博士と助手の様に妖しい光を秘めている。

これから僕は、僕は、ぼくは――

「これからみんなに犯されて♥犯されて♥犯されて♥どろどろのぐちゃぐちゃにまざりあって♥いーっぱい壊してあげるのです♥」

博士に口づけされ、僕は三度目の射精をした。

おわり

ナイトグリーディング

WAROSU

超巨大総合動物園ジャパリパーク
人の姿になった動物、通称アニマルガールが見られるというのが最大の特徴である動物園として世間一般に知られているレジャースポットだ。

レジャースポットと言うだけあってジャパリパークには動物園だけでなく、リゾートホテル、ゲームセンター、パビリオン、カフェとエトセトラ、といった感じて施設数ならあの某ネズミにも負けないであろう膨大な数、つまり見る場所やインスタ映えしそうなフォトスポットが無数にあるのもあってか、連日数多くの客が訪れ、大盛況なのである。

「すみません！写真お願いしてもいいですか？」

遊園地で母親にその声をかけられたのは、ジャパリパーク公認マスコットキャラクター、スタービースト。

全部で三種類おり、パッション溢れるルビー、クールで優しいサファイア、そしてピュアで天然なエメラルドが存在する。

母親が声を掛けたのは赤いマスコット、ルビーだ。

ルビーは「いいよ！」と言わんばかりに快く頷き、子供を優しく、傷ついた動物を保護するかの如く抱きしめた。

子供も着ぐるみに怖がることも無く、逆に抱き付き返してきたおかげで無事撮影を終えることが出来「ふう」と一息。

最後に風船を配って親子と分かれた。

「ありがとうございます！」と満足そうな母親と嬉しそうな子供の顔、そして嬉しそうにさっきの事を親に報告するその光景は、着ぐるみ越しからでも眩しく見える程に羨ましかった。

（やっぱ子供は可愛いな・・・でもそもそも相手がいなきゃ始まらないよね）

ルビーのアクターは結婚願望を抱いていた。

元々子供が好きと言うことで自らスーツアクターを志願し、子供と戯れることで間接的に願望を満たしていた。

（もう良い時間だし、風船もそろそろ切れそうだし、バックヤードに戻ろうかな）

ルビーのアクターは時計に目をやった。

閉園時間までもう残り30分程、もう少ししたら閉園アナウンスがパーク中に響き渡るだろう。

遊園地の倉庫へ向かって歩き始めた。

するとどうだろう、倉庫へ向かうルビーを見て慌てて「最後に写真一枚」と言わんばかりに客が集まって来た。

丁度別々に行動していたサファイアとエメラルドも合流し、本当の最後の撮影会が始まった。

客の数はそれなりに多かったが、コッチは三人、一人の時よりは楽に裁くことが出来た。

閉園のアナウンスが流れ、飼育員たちによる歌が流れ始める頃には無事に終了、三人仲良く倉庫へ引き上げた。

倉庫内はパークグッズの入ったダンボール箱や、季節によって取り換える看板、掃除用具等が並び、そしてその最も奥には少し開けたスペースがあり、床には大きめの布袋が3枚落ちてい

る。

それはスタービーストを入れる為の袋で、それと同時に頭を直接地面に置かないようにする為の袋だ。

三人はそれぞれの頭を持ち上げ、大きく一息ついた。

スタービーストの体内に溜まりに溜まった湯気が一斉に放たれるのを感じる。

換気の上にある小さな窓を開け、スタービーストの胴体を脱ぎ捨てた。

僅かながらも流れてくる爽やかな風は、全身を撫でるように駆け、不快な湯気を吹き飛ばす。

「今日もお疲れさま！」

汗だく顔でそう言ったのはサファイアのアクター。

「いやーコッチは悪ガキが多くて大変だったよ」と愚痴るのはエメラルドのアクターだ。

「いかなせん尻尾引つ張る奴がいて困りましたよ。大丈夫だとは思いますが、念のため尻尾見てくださいませんか？」

そう言うときエメラルドの尻尾を見せつけるように突きだした。エメラルドの尻尾は特殊で、三本に分かれています。

一本目はキツネのようにフサフサしたもの、二本目はワオキツネザルのように細長く縞々、そして三本目は爬虫類のような尻尾だ。

尻尾自体はルビーにもサファイアにも生えているが、(因みにルビーはアライグマのように太くて縞々のが一本のみ、サファイアはキツネのような尻尾が二本生えている)子供にはエメラルドの尻尾にイジリがいを感じてしまったようだ。商売道具なので、もし傷があったら大変である。

三人は引つ張られた三本の尻尾の根元から先端にかけてそれぞれ一本ずつ、くまなく探した。

「うーん、見たところ、特に目立った外傷とかはありませんよ」そう答えたのはルビーのアクター。

「それなら良かった！もし傷があったら、多分給料から修理費分が差し引かれていたかも」とエメラルドのアクターはホッと胸をなでおろす。

「給料ねー・・・そういうえば今日〇〇さん(ルビーの人)この後夜勤で警備の仕事があるんでしたっけ？」

サファイアのアクターが訪ねた。

「今日のタイムスケジュールはそうなっていますね。それまでの時間仮眠をとっておくよう上司にも言われています」

「夜の警備員の仕事ね・・・」

サファイアのアクターは神妙な顔で唸った。

「何か問題でも？」

「いやさ、最近妙な化け物がパークをうろついているという噂があるじゃない？不審者とかならまだしも、化け物に出くわしたら嫌だなーって思っただけ」

「ああ、確かセルリアンでしたっけ？最初は胡散臭いと思っていましたけど、何やらあちこちで目撃情報があるみたいですね。実際見たことないので何とも言えないですが、もし警備中にそれらしいのを見かけた際はアラートボタンを押すように指示されていますので多分大丈夫だと思います」

「なんです？そのセル・・・なんちゃらって」

「××さん(エメラルドの人)は最近ここに来たばかりでよく知らないか。と言っても自分も実際には遭ったことないし、他の職員が噂していたのを聞いていた程度の知識しかないが、主にアニマルガールや人を襲うらしい」

「それ、大人気レジャースポットにしてはとんでもない欠陥じゃないですかね？「化け物がいっつも襲ってくるかわからない動物

園」とか炎上待ったなしの案件ですよ」

「そのための警備の仕事ですからね。元々動物園に限らず、警備員って危険な仕事ですし」

「まあそういうわけで、後は〇〇さんに任せて、我々は寮に戻りましょうか」

「さっきの話聞いたらばかりだと正直後ろ髪を引かれる気分ですけどね・・・。気をつけてくださいね」

「はい！ではまた明日！」

倉庫でそんな会話を交わしながら二人と別れたルビーのアクターは、倉庫の隣にある守衛室へと向かった。

守衛室には壁に警備員の制服と警棒、それから懐中電灯がかけられており、制服の胸ポケットには例のアラーム装置が入っていた。

床はお座敷のように畳がひかれ、その上には布団と枕が用意されている。

マンションや見舞い等に使われる病院の入り口で見かける部屋を想像すれば概ね大丈夫だろう。

仕事の時間までの間仮眠をし、力を養うことにした。布団を敷き、自前のスマートフォンに目覚ましをセットし、眠りについた。

ルビーのアクターもとい、警備員が寝てからどれ程の時間が経っただろう。

日はすっかり沈み、辺りは闇と静寂に包まれていた。もうそろそろ仕事の時間に入ろうとしたその時だった。

倉庫の方から何やら強い光を発し、その輝きは窓を通し守衛室で寝ていた警備員の寝惚け眼に強く刺さった。

何事かと言わんばかりに飛び起き、倉庫を確認した。先程ではないが、それなりに強い光が倉庫を中心に収束している。

「まさかセルリアンじゃないだろうな」と思いながら制服に着替え、倉庫へと向かう。

気配を感じる。

セルリアンか定かではないが、何かがいるのは間違いない。現に扉の奥からゴトンと物音も聞こえている。

警備員は扉を小さく開け、恐る恐る部屋を覗き、そして驚愕し

た。
音の主、それはセルリアンではなく、三体のスタービーストである。

しかしスタービーストとは言っても、見慣れた着ぐるみとは大きくかけ離れた姿をしていたのだ。

その姿はマスコット特有のダボダボではなく、少女の如くスラッとした姿。

そしてそんな姿になったマスコット達は、今現在見られているとも知らずに、淫行を繰り返していったのだ。

股から聞こえるは卑猥な液体音、無声なのに喘ぎ声が聞こえてくるような錯覚に陥る。

お互いがお互いを弄りあうその艶めかしい光景は正に百合の世界。

色々とツツコミどころが多いこの状況で、何て声をかけるべきか迷っていたその時だ。

ピピピ！ピピピ！ピピピ！
スマートフォンが目覚まし音が鳴り響き、空気が一瞬にして凍てついた。

スタービーストの三人は慌ててその場で正座した。

「お前たち、一体何をしていたんだ？」
警備員の質問にルビーは人差し指を目の前にかざすと、指の先端に小さな光が灯る。

その後、空中に文字を書き始めた。

「せっかくこの姿になったので、Hをしてみました」
そう書ききると文字は光の粒となってサラサラと落ちて消えた。

元が着ぐるみだった故、直接喋ることが出来ないのだろう。

筆談が彼女らの伝達手段らしい。

しかし、互いの顔を見ながら話し合うような動作をする辺り、スタービースト同士は筆談の必要はないようだ。

「しかし、さっきの光はもしやアニマルガール誕生の現象なのかな？何事かと思つて慌てて来たらまさかのお楽しみ中とは思わなかったけどね」
今度はサファイアが指を上につんつん指した。

「上を見ろ」と言わんばかりに指す指の先には、換気の時から開けっぱなしになっていた窓ガラスと、その淵には虹色に光る

小さな結晶が付着していた。
それは、動物をアニマルガールに変える未知の物質サンドスタ

1。
恐らくだが、天からそれが降ってきた際、窓を通り抜けて着ぐるみに触れたのだろう。

動物をアニマルガールに変えるサンドスターだが、別に動物でなくてもアニマルガールに変えることが出来るという前例があった為、別段おかしな話でもないのだ。

「んで、人の姿になってやろうと思つたことがよりにもよってHと？」

「私を着ていた時、結婚とか考えていたでしょう？着ぐるみだったから分かるの。だから・・・」

その言葉と同時にサファイアとエメラルドはすつくと立ちあがり、警備員のサイドを固めた。

「突然何するんだ？」
不穏な空気が漂う。

「私がお嫁さん役になってあげる！」
ルビーは警備員のズボンを脱がし始めた。

無論抵抗しようとするが、サファイアとエメラルドのコンビによって妨害され、あれよあれよと言う間に下半身が無防備になる。

ルビーは初めての男根に驚きながらも、優しく奉仕をした。

着ぐるみ特有のモフモフした感触が男根を包む。

「オイ本気か！？いくらなんでも流星にこれはまずいんじゃないのか」
そんな警備員の声に反応したのか、手はピタリと止まった。

「もしかして、もう“寝たい”とかかな？」
警備員を床に仰向けに寝かしつけ、その上にルビーがマウントする瞬間、「まさか」と思った。

ズブと音をたてて、男根はルビーの膣内に挿入したのだ。

人の体になったという事は、当然ソレも存在するということ。

そして彼女たちは先ほどまで“遊んでいた”為、受け入れるための準備は万全だった。

というのも、実は警備員が来なくとも夜這いする予定だったのだ。

まさか向こうから来るとは想定外ではあったが、正に飛んで火にいる夏の虫、彼女らにとっては予定が早まった程度の認識でしかなかった。

「すごい！これが性の感覚なんだね。とっても気持ちがいいよ」ポフィン！ぬちゅ！ポフィン！ぐちゅ！と変わった音を立てながらルビーは腰を上下に動かしている。

「離してくれ！汚してもしたら・・あダメだ！出る！」

「とても熱いものが流れ込んでくるよ。これが噂の」

他の二人と何か話しているようだ。

しばらく話し合った（？）後、再び指を動かす。

「二人もやりたい」って。「ルビーばかりズルイ」だって。

そういう訳だから、二人にも付き合ってくれかな

「今さっき射精したばかりなのに・・」

絶え絶えの息をあげながら抗議するが、ルビーは何食わぬ顔でこう返した。

「大丈夫だよ後2発で終わるから。だよね？」

確認をとるようにサファイアとエメラルドに向いた。

二人は頷き、サファイアが挙手した。

「次は私（サファイア）の番」とでも言わんばかりの主張である。

ルビーとサファイアはそれぞれのポジションを交替する。

その際拘束されていた下半身と右上半身が自由になったが、警備員は諦めたのか、抵抗を止めてしまったようだ。

元になった動物や個体にもよるが、アニマルガールは見た目こそは人間の女の子（スタービーストの場合そう呼ぶのは甚だ疑問である見た目をしているが）だが、その身体能力は常人どころかスポーツ選手すらも凌ぐことがあるのだ。

スタービーストの場合はハグする力が発達しており、その気になれば柔道のメダリストやレスリングのスペシャリストでも逃げるのは難しいだろう。

そう考えれば先程のルビーとのやり取りで抜け出すことが出来

ずされるがまだだった以上、抵抗しても無駄だと悟ってしまった。

次にサファイアが上に跨った。

ルビーと違って腰は上下に動かさず、グリグリと横にスライドさせるように動かす。

射精したばかりと言うのもあるが、上下のピストンとはまた違った快感に思わず悶える。

そう長くは持たず、2発目が出て、エメラルドの番になった。

エメラルドはマウントせず、お尻を突きだす形で四つん這いになる。

バックを希望らしい。

警備員としては体力的にも精神的にももう限界ではあったが、拒否権はない。

そのままルビーとサファイアに動かされるまま、ほぼ倒れこむ

ような形でエメラルドに覆い被さった。

朦朧とした意識の中、身体が沈んでいく感覚に襲われる。

それはまるで雲の如く優しい誘惑で、先程の疲れもあってか同時に眠気もやって来た。

意識が落ちる瞬間、「何か」が聞こえたような気がしたが、気が付いた時にはもう遅かった。

夢を見た。

黒いなんらかの大群がこちらに向かって津波の如く押し寄せる悪夢。

何故か分からないが、「それ」に本能的な恐怖を感じる。

すぐさま「逃げなきゃ」と思いつつも、足が竦み動けない。

眼前に“それ”が迫り衝突する瞬間、後方から何か強い力に引っ張られる所で目が覚めた。

気が付くと、周りは倉庫内ではなく、洞窟の中だった。

ヒヤリとした空気が頬を撫でる。

「なぜ俺はこんな所にいるのだろう」と思いながら薄暗い洞窟を抜ける。

そこは夜明けのサバンナであり、その奥からは黒煙が立ち上っていた。

「目が覚めたんだね」

「心配したよ」

聞き覚えのない声の主は、洞窟の入り口付近に立っていたルビーとサファイアだった。

「なんて突然倉庫からこんな所へ？というかなんて普通に会話

してるの？」

「それはね、今君はエメラルドになっただよ」

ルビーがそういうと、自分の体を確認した。洞窟内は薄暗かったのと、現状が知りたかったことから特に気にしてはいなかったが、自分の姿を見てみた。

本来ならあり得ないスラックとした体型と、それを覆うフサフサの白と緑系の毛皮の姿は紛れもないエメラルドスタービーストだった。

慌てて脱ごうとするも、頭と首は繋がっていて外れず、背中にはチャックがなかった。

そんなときに頭の中で悲痛を訴える声が響く。

「痛いよ！引っ張らないで！」

「だったら脱がしてくれよ」

「うん、だけど、ちゃんと続きやってよ？さっきは大変だったんだから」

「大変って何がさ」

そこにサファイアが黒煙の方を見つめながら会話に入る。

「君たちの言うセルリアンが襲撃してきたんだよ。このままじゃ危ないと思ったからとりあえず安全そうな洞窟に逃げ込んだんだ。担ぐよりは着てもらった方が効率良いしね」

「そんな・・・」

あまりな出来事に思わず崩れ落ちるようになられた。

これが後に「女王事件」と呼ばれる事態である。

職員たちは出来る限りの人が避難し、一部の人間が事件解決に挑んだ大事件。

この警備員は運良くその場から逃げる事が出来て助かったのだ。

ルビーはポツリと呟いた。

「仕事なくなっちゃったね。あの惨状じゃお客さんが来ないよ絶対」

「仕方ないよ。んで私の中の警備員さんはどうするの？」

「しばらくは危険だろうし、このまま着ていてもらった方が良いね。ほとぼりが冷めるまでの辛抱だよ」

「じゃあさ、どっちか交代してよ。こっちはやり損ねちゃったからずっと悶々としてたんだよね」

「それじゃあこのルビーが相手をしてあげよう！」

そういうとルビーとエメラルドは背中を合わせた。背中の中の毛皮同士が合体したかと思いきやすぐに離れ、お互い元の姿に戻った。

「ごめんね。まだ一応警戒中だからさ、こういう形で着替えてもらったよ。けどこれが終わったら脱がしてあげるから」

ルビーの股が開き、そこから警備員の男根が飛び出てきた。

「続きやるのか？」

「もちろんだよ！さあルビー早く突いて！」

「いくよー！」

ズブ！

「ひゃー！すごい！着ぐるみで入っていると全然違うよ！」

「でしょでしょ！人の体つてとつても気持ちがいいんだよ！」

「しばらく休憩してたからなんとか持つけど、もう限界だ！」

「！？ああ注がれていくよ・・・」

「なあもういいだろう？解放してくれよ」

「いいよ。けど大丈夫？まわりには遊園地をポロポロにした怪物がウヨウヨいるよ。ココに入っていれば安全だとは思うけどね」

「うっ・・・それは・・・」

そこにとどめを刺すかのようにサファイアが言った。

「ちゃんと家賃を払えばいいだけの話だよ。簡単でしょ」

そう言いながらルビーから生えた男根をムンズと掴んだ。

そしてそれに続くようにルビーとエメラルドも掴む。

「つまりこれからどうかよろしくねだよ！」

「大丈夫！今度は連続じゃなくて朝昼晩だからね。ご飯もしつかりあるから心配しないでね」

「なんかもう、君たちがセルリアンよりも危険に思えてきたよ・・・」

こうして彼女たちとの奇妙な生活が始まったのである。

※女王が討たれたのち、管理センターでようやく解放されたが、長年着続けていたため汗と精液の臭いによる激臭のせいで、しばらくの間アニマルガールや他の職員達から避けられたのだが、それは別のお話

完



カイチョー

Twitter:@kaityou_tyou

アライさんみたいな普段はフレンズたちの中でもいじられてたりする子にいじわるされちゃうのが好きなのでアミメキリンとかパンカメちゃんとかマーゲイにいじわるされるのもアリだと思うのでよろしくおねがいます。



間間山

Twitter:@QUATRE_AAAA

女の子しか登場しないアニメやゲームを見ると『この子達全員から逆レされたら大変だな』みたいなことをいつも考えてしまうので、今回この場を借りて妄想を実現させて頂きました。至らない部分も有るかもしれませんが何とか描き切れました。また合同企画があれば誘ってください。



座織きたか

Twitter:@zashiki_taka
pixivID:3942622

野性解放する為にタイリクオオカミ先生の格好しながら描いてました。杭打ちピストンされたいです(支離滅裂)



いんつつきー

Twitter:@apple12th
pixivID:1808696

企画を聞いた時これはもうやるしかないという天命を授かりました。本能はフレンズの性的な営みを求めるのです…短いですがフェネックの恍惚を描けて満足です。



しおバター

Twitter:@ObscurityOnline

神絵師の方々と同じ誌面で漫画を描くという事態に脳が麻痺してきたので、フェネシコで回復を図りたいと思います。



イラン伊蘭

Twitter:@Ylang_Ilang
pixivID:70939

人生初めての本格的な漫画作成で四苦八苦しましたが、なんとか出来上がりました。せっかくのR-18なので大好きなおねショタもので行きました。今晚のオカズにしてもらえたら幸いです。もしまた合同企画があれば参加したいです。



ちよいよ君

Twitter:@Chomplyfire
pixivID:1284423

SouthYOKOHAMA…
俺たちのStreet…



ウィナーズサークル

Twitter:@Fennechin_club

去年はタイリクオオカミさんで108回抜きましたが、1番愛しているのはフェネックで、去年、誤ってフェネックで1回射精してしまい、3日くらい鬱になりました。でも、今年は0回のまま。フェネックは恋人であって、タイリクオオカミは愛人のような存在です。小汚い絵を楽しんでいただけたら幸いです。



ドリキヤスん

Twitter:@DreCas2
pixivID:8361076

6冊目の合同であり、初のエロ漫画です。始めは逆レって何だ？から始まりましたが、何とか無事に完成できました。しこりばさんとのDMから続きも妄想していたので、機会があればそっちも描いてみたいです！



おきあみ

Twitter:@okiami_ill

よう見ときい、
これが本当の
けものパレードや

あとがき



村山東一

Twitter:@east_murayama
pixivID:23393932

えっちな漫画初挑戦かつ
けもフレのえっちな絵初挑戦
なのでうまく出来てるか
不安ですが、
ボクはしこれました。
デジタルで描ければ表現の
幅も広がるのしょうけど、
描画スピードがえらく下がる
ので今回もほぼアナログです。
液タブ欲しい。



那魅ちあ希

Twitter:@731_akki

もっとシコシコして頂ける
絵を描けるようになりたい
と思った次第です。



エクイテス

Twitter:@No101_RR

ケツァールは自由の象徴と
されているからおっぱいの
大きさも自由なんだから
ラッキービーストが
言っていました。



にのじ

Twitter:@ninojisan
pixivID:4452293

マラマラの実の
全身チンポ人間



はづきガレット

Twitter:@hazkigaleet
pixivID:21988885

けものクッスはねえ…
理性を無くし自由というか
救われてなきやあ駄目なあ



ピタみんみー

Twitter:@vita_minmi
pixivID:24308973

とりあえずいっぱい
射精シーンが描けたので
楽しかったです。



れいひ

Twitter:@reihi514
pixivID:28941056

仮面ライダー 顔騎。



ま王

Twitter:@maousan_mk2

個人的に描きたいこと
好きに描く事が出来たと
思っているのも非常に
満足です。
この素晴らしい企画に
参加させていただいて
本当にありがとうございました。



いの

Twitter:@tellu0120

オオカミさんのえっちな
妄想を描きました…♡



ミリ

Twitter:@osasimilli
pixivID:238765

馬すき……

.....
.....
.....
.....



チェルノ・をかし

Twitter:@cherno_wokashi
pixivID:28741998

まあ！
本編通して騎乗位しか
していないなんて
チェルノったら
いけないひとッ！



絶対絶命

Twitter:@zettaizetumei

おねショタが好きで
題材(逆レ)にマッチして
いたので参加させていた
できました。
普段はあまり年齢指定を
描かないのですが今回は
欲望のままに描かせて
いただきました。
良かったら抜いていってね。



Nokemono-san

Twitter:@Bocchi_friend
pixivID:9582526

参加させて頂きありがと
うございます！
人生初のR-18漫画を
描かせて頂きました。
オオウミガラスちゃんと
らぶらぶックスしたい…♡



てらねこす

Twitter:@teranekos

あそびかげきはです。



おささみ

Twitter:@osasa_osasami

オオウミガラスさんの
ブーツを舐めて綺麗にする
仕事に就きたいです。



朝倉銀

Twitter:@cynthia2asa
pixivID:264145

キュウビキツネは、
元ネタからして
「美女に化け
人間の男を誑かして襲う」
とされていて、
今回のテーマにピッタリ
じゃないかなって。
「クミホ」とは「九尾狐」の
朝鮮語読みです。
クミホは人間になりたいと
願っており、そのために
1000人の男の心臓を
食べるのです。
(解説：あさくらおねえさん)



ヨカ茶

Twitter:
@Japari_cocatea

神絵師だらけの合同誌に
勢いに任せて
生身で突撃しました。
漫画は不慣れですが、
せめてちょっとでも
抜いていただければと
思います。



おきやお

Twitter:@Okyaostini
pixivID:3994511

逆レ合同…
なんと素晴らしい企画
でしょう。皆様の発想に
股間が引き締まる思いです。
初めてのえっちな漫画で
四苦八苦しましたが、
すこしでもいやらしみが
伝われば幸いです！



トトキチ

Twitter:@10ki38
pixivID:123475

ちゃんとした逆レは
みんなやってくれ
ると思ったのでつい…



せんすいかきゆう

Twitter:
@kaclass_deepsea

「あああああッ!?
何描いでんだ
お前わあッ!?」

って怒りたいです…
(怒られます)

ハアハア……
もっと、もっと
けものフレンズの逆レ作品がいっぱい見てえ…っ！

そんな思いで勇気を出してこの合同誌を主催してみました。
いかがでしたでしょうか…？
主催は編集時、右手が忙しくて大変でした…♥
本当はまだ描きたい漫画があったのですが
時間的都合で今回はひとつだけしか描けなくて悔しい…！
逆アナルとかケモチんとか…いつか描きたいですね♥

それと今回初めてエッチな作品を描く参加者が結構いらっしゃるみたいですね…！
(これを期にたくさんエッチな絵を描いていこうね…♥)
皆様の「ここ好き」ならぬ「ここシコ♥」が溢れている原稿で
とてもえっちな合同誌になりました！

本誌を手にとってくださった読者の皆様！
合同誌参加者の皆様！
本当にっ！本当にありがとうございました！！
2019年も目指せ♥素晴らしいけもシコライフ♪

しこりば

「フレンズ逆レイプ合同誌～アニマルガールによる性的暴行被害記録集～」

発行 : けもシコ同好会
発行日 : 2018年12月29日 コミックマーケット95
印刷所 : 株式会社プロス
主催 : しこりば
連絡先 : shikoripa@gmail.com
pixivID=30260996
Twitter:@shikoripa

※この作品は「けものフレンズプロジェクト」の二次創作物です。

執筆者(敬称略)

朝倉銀
エロニアート
いにつっきー
いの
イラン伊蘭
ウィナーズサークル
エクイテス
おきあみ
おきやお
おささみ
カイチャー
コカ茶
座織きたか
絶対絶命
しおバター
しこりぱ
ジャパリトロッコの人
スカーレッドG
せがれきんぐ
せんすいかきゅう
たなか
タマリリス
たると
チェルノ・をかし
ちよいよ君
てらねこす
トトキチ
ドリキャスん
那魅ちあ希
にのじ
Nokemono-san
はづきガレット
ビタみんみー
間間山
マメゾウ
ま王
ミリ
村山東一
モリマサカズ
れいひ
WAROSU

